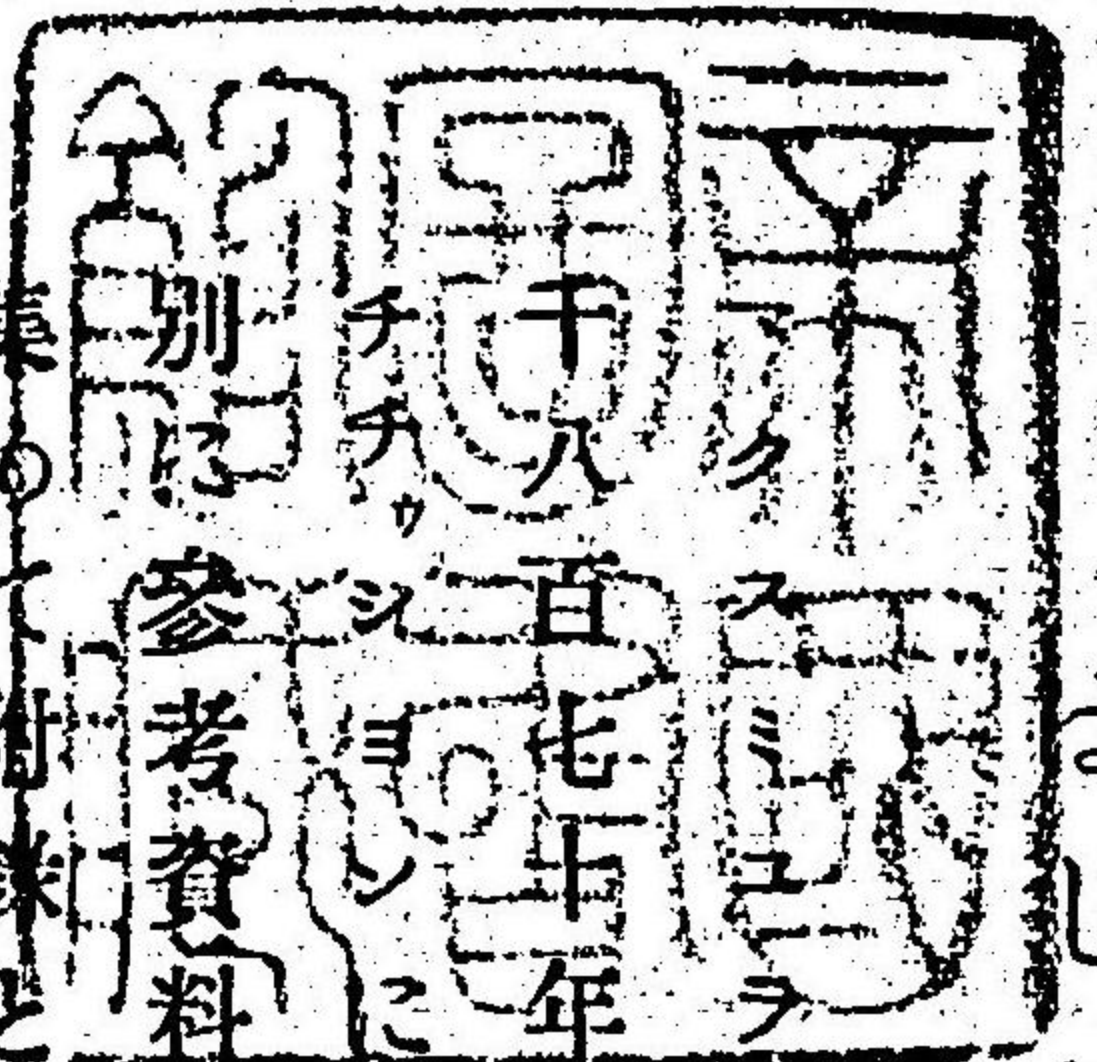


1914



宗教學綱要

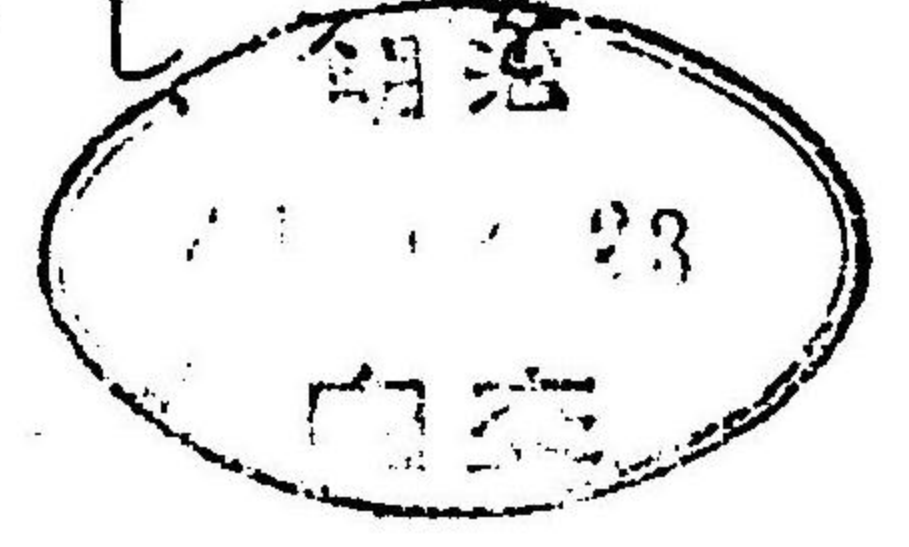
はしがき



博士、宗教に關する自家の研鑽の結果を、千八百七十年の二月より三月にかけて、ロイヤル、イン
チ、チ、ヨ、ンに於て講演すること前後四回、後之を編輯し、
別は参考資料として、同主題に關する小品的評論數種を
集めて附録とし合せて以て一卷となしぬ。題して *Introduction to the Science of Religion* と云ふ。是即ち本書の原本なり。
可なり多頁の冊子なるも、本文は短くして附録は比較的
に老大なりとす。

二、本書、署して抄譯と稱すれども、本文は大抵之を譯出し、唯
さまで肝要ならずと覺えられたる若干の節々を逸した
るのみ。但し附録に至りては、其内最も注目すべく最も價

宗教學概要 はしがき



値ありと見えたる者二個をのみ摘譯するに止めたり。是れ此譯書の容積が原本の夫に比して頗る小なる所以なり。而かも決して原著のほんの大意を略述したる底の者にあらず。見ん人、外形の大差を見て直ちに内容を憶斷するなくんは幸甚。

三、講演に附せられたるものながら、氏が自家の筆に成り、其特得の莊重典雅なる文致は斯學の叙述に最もよく適合し、不可言の妙趣は到所に溢る。然るに今や這の錦繡を徒らに剪裁して縊縷となす。罪免るゝに所なし。叩頭以て、天上の翁の靈に向つて謝するを禁ずる能はず。

四、本書を通讀する者の容易に見ん如く、氏が斯學上の見解の先哲未言と覺ほしき著しきもの二あり。曰く宗教の起原は言語の疾病にありとすること。曰く宗教は無限を感

知する特殊の心機能なりと定義せること。是なり。其思想の卓拔なる丈に、非難を容るゝの地なきにあらで、從て、學者間の評定一にあらず。譯者の胸中又云ふべきもの少からずと雖此處其場所にあらず。今は其役に居らざるを以て唯黙して已むのみ。但し、已にウント氏も嘗て言及せし如く、氏の立脚地がスペンサー氏等の唯物的宗教説と全然相異なれるにも拘らず、共に宗教の起原を言語の不完全に歸する點に於て相一致せるは、偶然とも云はゞ云へ、頗る奇として注目するに足るべし。此事に關しては卷末の附録を参照せよ。

五、氏の説は殆んど凡て言語上の證明に成る。是れ言語學者としての氏に取りて固より其所、從つて他者の摸倣を許さざる所、價値の最も多く存する所にして、只管感服の外

なしと雖、人若し、眞理は凡て唯言語の歴史よりのみ證明し得らるゝものゝ如くに思はゞ大なる誤なるべし。言語的論證は凡ての論證中の一方而たるには相違なし、凡てにはあらず、故に全く無効にあらざるや論なし、されど萬能なるにはあらず、氏の眞意も實に此にあらん。又是に惑ふ程の愚者もあることなけん。敢て駄言を費すも是必竟老婆心とはさても我は衰へにける哉。

東京駒込に於て

明治四十一年十月

譯者 識

宗教學綱要目次

第一講

宗教學に反對の二説——宗教は神聖なり——ヘン氏の宣言書——阿育王の刻文——寛容的精神——
 爲善と迷信——比較研究——比較の利益——ゲートのマラドックス——宗教の二義——史的宗教——
 心的能力としての宗教——感性及理性と異立す——人の人たる所以——カントの説——比較神學
 と理論的神學——比較研究の資料——アクバ——大帝——本文批評の學——モハメットの奇蹟——佛
 陀の奇蹟——バラモン教——波斯教——佛敎——聖典は必ず其原語に於て讀まざるべからず——ウ
 オルテールとア—ノルド——古代語は今世語と同一視すべからず——古傳説の眞意を解する
 には其語の特質に通ぜざるべからず——ブリーク博士の言——有性語と無性語——ツル語の「葦」
 ——希臘人の祖先——言語は皮殼なり——之を破りて眞義を露現せしむるに何の不可か之あら
 ん——希臘の諸神——天父の像——

第二講

宗教的典籍の豊富——セム族及ア—ルナ族に於ける典籍宗教——並行的二流脈——支那の宗教
 文は例外——波羅門教の書類、韋陀及其他——シク教——佛典——閻伊那教——波斯教の書類、ツエ
 ンダエスター——支那の佛典——二流脈外の宗教研究の材料——阿弗利加——埃及——野蠻人——南洋
 宗教學綱要 目次

諸島—南北亞米利加—此汗牛充棟を如何せん—分類あるのみ—種々の分類法—眞宗教と偽宗教—天啓宗教と自然宗教—各教自らを天啓とする傾あり—自然宗教の別義—要するに探るに足らず—國民的宗教と個人的宗教—何れの開祖も自ら其創始者たるを認めず—多神教、二神教、一神教、一單一神教及無神教の二目を置くの要あり—然らば如何なる分類法を採用すべきか—

第三講

國民、言語、宗教、三者の關係—國民を作る所以のものは何ぞや—政府にあらざ—血肉にあらざ—宗教と言語とにあり—而も宗教を重しとす—シエリングの説—ヘーゲルの説—歴史家の説—法律は宗教を借る—メーレン氏の説—爰に所謂宗教とは何ぞや—或種の言語の一群の謂に外ならず—言語と宗教との親縁—宗教の分類は言語の分類と同様ならざるべからず—歐亞の大陸に於ける言語の集中化—ツラニヤ、セム、アールヤの三中心に於て固定す—言語の集中固定は宗教の夫れと精密に適合す—ツラニヤ諸族の宗教と言語は其特質相同じ—セム族の神の性質—歴史に於ける神—アールヤ族の神の性質—自然に於ける神—三中心以外の者は只野生的榮枯をなすのみ、斷滅せるにあらざ—彼等は何故固定をなきべりし乎—集中化が例外に屬せるなり—ツラニヤ族に於ける集中化—薄弱なる證據—未開人の宗教狀態—典籍宗教としては只埃及の夫れあるのみ—最近の研究—彼等の動物崇拜—唯

一神—言語の疾病によれる墮落—レメフ及マリエット氏の言—再び南北亞米利加—ポリネシア—宗教學は言語學以上の利徳を享有す—宗教の言語的研究—三族共に同様の方法を用ゆべし—言語的研究によりて社會狀態は推知せらる—宗教も亦然り—梵語のデーザ、希臘語のツエウス、羅甸のジヨ—非ス、國逸語のチリに於けるアールヤ共通の神名—セム族に於ける研究—此族の神名の意義—此族共通の神名エル—エルに就ての精しき研究—其他の神名バール—其女性—セムの女神は力の表示に過ぎず—アシメトレト—メレク—アドナイ—エリヨ—ン—シヤツダイ—ヤーエ—諸説紛々—さばれ太古に共通崇拜のありしは疑ふべからず—ツラニヤ族に於ける研究—一見、前二族に存する如き關係は見得られざるが如きも必ずしも然らず—古代支那民間の信仰—諸靈崇拜—陰陽説—「天」—他のツラニヤ族の至高神名—支那歴史家の匈奴誌—メカシタルの誌録—カルヒニ及ボローのナタガイ—カストレンの報告書—ムム—ジユマ—ジユマ—一老婦の信仰—何れも支那の天に同じ—共通神名ありや—匈奴のダングリ、蒙古のテングリ、土耳其のテンケイ—リ—タンガラ—思想推移の同一行程—西藏語のナムは同一視すべからず—他のツラニヤ族の諸靈崇拜—タアルプクジヨ—祖先崇拜—本講の要旨—

第四講

宗教の比較研究は宗教哲學の面目を一新せしめん—古代宗教に對する精神—憐むべき偏

執者—オ—ガスチンの言—神の人類教育—イレネウスの言—レオ大法王の言—使徒の言—開胸と慈眼—善なれ我子よ—古宗教典籍よりの拔萃—韋陀ソシタの歌—神は人を捨てず—ワル—ナ讃歌、アグニ讃歌、其他及二三の注意、特にキスツカルマンに就て—サエンド—アジスターゾロアスターの革新—彼の言説其他—佛典—法句經の拔萃及二三の語譯—宗教との類似—バラモン教との類似—同一の思想は孔老二教にもあり、其拔萃—古代埃及宗教書類の二三の見本—世界最古の書—未開黒人の宗教思想—カフエー氏と土民との對談其他二三—外國宗教研究の注意—何等の信仰形式に拘束されざる宗教思想の標本—フアイチの書—古今東西萬りの宗教なし—水掛論—高尚なる生活を渴仰し之を向上する點に於て凡ての宗教は一致す—古宗教は此感情の言表はし方の幼稚なるもの—一印度人の言—北米印度人の凡神觀—其真相—言語が思想に與ふる感化の一大著例—古宗教の字典は比喻語の積集—古語には物質的と精神的の區別判明ならず—誤解の源泉—向上向下の二波動—宗教の生命—神名の定まる過程—無限者渴仰の情—満足なる名はあることなし—天空の名の發明者は可見的の夫れを意味せしにみならず—ヤコブの神と相模ひし比喻譯—老嬰幼稚間の誤解—墮落過程—宗教の言語的榮枯或は言語的生命—言語上の並行—男性語と女性語—宗教も是より彼に移らざるべからず—此間の進退—一極に走るべからず—要するに神名は近接的、比較的、若しくは一面的—古宗教の他の一特質—一物多名—多名語と多神教—名稱の不完全に由來す—多神教及神話は宗教の幼稚語—ダンテの句—幼稚語は

不誠—慈悲的解釋の必要—

附録

(其一)ポリネシヤの神話に就て……………一六一

人類に關する二説—宗教の起源は鬼物崇拜にあらず—神話の不合理の分子—語の想に與ふる不可避的感化—予は一切を言語の疾病に歸するにあらず—神話は宗教にあらず—ギ氏の書の價值—ポリネシヤの傳説と他國の夫れとの類似の數々—名稱上、皮相上、脚色上、の夫れ—洪水譚—偶然的—一致—同一起源說何ぞ容易ならん—明なる言語疾病も充滿す—宇宙譚—抽象的、思案的、後代的—太陽神話—偏見者に向つての好箇の試金石—

(其二)エホツテントット人の神話……………一七二

此名の由來—コイ—人、とサー—人—娘のもてること—其歌—彼等の宗教—從前の觀察者の報告—信憑すべからず—ツイゴアの義—ナマカ人の物語—ツイゴアは必竟、壯大慈悲なる天然力の名—彼に關する奇譚—醫者兼魔法使—傷ある膝若しくは痛き膝—所謂不合理の分子—出來得べき二個の説明法—古のオイヘメロス説、即ち今時のマニエーの主張—スベンサーの説—相反せる理由に基ける同説—ス氏の御論謹聽(其一)—(其二)—(其三)—(其四)—(其五)—(其六)—ス氏何をか恐る、要は舉證にあり—ツイゴアの字義—意義の變遷—老婆の幼兒への御伽—此他同種の神名—事實は小説よりも奇—ス氏の説も絶對的

の非なるにあらざり—ヘーン氏の此書は吾輩の味方—

(右の細目は、讀者の便を計りて、抄譯者の恣にものしたるなり)

目次

宗教學綱要

第一講

(千八百七十年二月十九日、ロイヤル・インスティテュションに於て)

抑も宗教學とは宗教を研究する學である。然るに宗教の科學的研究を不可なりとする説がある。一種ある甲は云ふ、凡そ宗教は神聖にして犯すべからざるものあり。之を如何に動物や物質と等し並に、研究の對象物として取扱ふとは怪しからんと。乙の説には曰く、宗教はもと一煉金術や星占法と同班に列すべきものでつゝ、まゝ人間の迷妄見の産物に過ぎないから、とても科學者の注意を價する譯にはいかぬと。此二説は其理由とする所が丁度相反對して居る。一つは宗教は神聖だから手を觸れるのは勿躰ないと云つて、擔ぎ擧げるし、他は賤しい下等なものだから手を附けるが物はないと輕蔑する。吾人は此の相反せる二説共に或意味に於て認容するのである。但し其結論は全然之を排斥するのは勿論である。さて、なるほど甲説の云ふ如く宗教なる者は——其最完全な者にせよ、はた最不完全な者にせよ——

必ず神聖なる者に相違ない吾人に向つて最高の尊重を請求する権利はある。さればこそ、印度の Keshub Chunder Sen と云ふ人が立てた Brahman samaj 教會の「主義の宣言」書中に左の如き個條がある。曰く人ノ拜崇シタル若シクハ拜崇セントスル對象物ハ、ツガ如何ナル宗派ニ屬セントモ、之ヲ嘲笑シ或ハ非難スベカラズと、又曰く如何ナル書典ヲモ神ノ無過誤ノ言語ナリトハ認定スベカラズ、然レドモ、其宗派ガ、シカク或書典ヲ認定シタル以上ハ之ヲ嘲笑シ若シクハ非難スベカラズ、と又曰く如何ナル宗派ヲモ賤シメ、笑ヒ、若シクハ惡ムベカラズ

とある。何れも尤もな言であるが、人或かくの如き寛容的精神は印度人固有のものではなく全くかのセンが但しは、教會長の Rammohun Roy が、基督教に模倣したのであらうと邪推を逞ふするやも知れぬが、そうは云へん。見よ、之と正に同一の主義は同地に於て已に二千年以上の其昔に宣言せられて居ることを、之をなしたの Asoka (阿育王、紀元前二五九—二二二) 其人である。彼が造つて置いた紀念碑は近頃發掘されたが其刻文を讀めば、何人も之を疑ふ事は出来なす。E. Lehart 著 "Les Inscriptions de Pindasi" 一八八一年、七版、二七四頁、十二版二四九頁參照、其刻文の一つに曰く、

「ピヤタシ王は、諸宗皆、何處に於ても相侵することなく、任在せんことを願ふ、彼等は何れも肉欲の控制と靈魂の淨拂とを慕ふものなればなり」と又曰く、王は一切の宗派、僧侶、及戸主を恭敬す。王は寛大と諸種の愛顧とによつて彼等を恭敬す。然るに茲に各宗の必ず奉ずべき根本律あり、言語の節制是なり、他宗を貶して以て自宗を揚げんとすべからず、彼等を輕蔑すべからず、他宗に對しては常に相當の恭敬を與へざるべからず、かくの如くなすは是れ自宗を揚げ兼ねて他を益する所以なり。若し之に背かば却りて自宗を損するのみならず、他を益するなけん、抑も自宗を揚げ他を貶する者は必竟自宗を顯揚せんとする篤信の心より出づるなるべきもかくの如きは適、自宗を害するに止まらん、此故に唯平和を是宜しとなす。されば他の言説は喜んで聽聞せざるべからずと

苟も宗教學の研究者は之等の印度人に負けてはならぬ、公平無私の態度を取らんければならぬ、がさて、如何に尊き者なればとて、夫れを只敬して遠けて置いて、手を觸れるなと揚言するのは眞に尊敬の道に協つたものではあるまい、否寧ろ、よしや如何に神聖なるものにもせよ、恐るゝことなく、偏することなく、親愛と忠實とを以て、自由なる眞摯なる研究をなして以て眞理の爲めに盡す事に於て眞の尊敬は

存して居るのである。

次に乙説の云ふ所も決して嘘ではない。否、宗教は其過古に於て賤劣なりしのみならず、現在に於ても、吾人は厭忌すべき許多のものゝ行はれてゐるのを認むるに躊躇しないのである。咒物崇拜フエナナムと相去る遠からざる迷信、否、尙之よりも悪しきもの、羅馬の *Angus* (ト古) にも劣れるもの——偽善も今の世には甚多く存して居る。けれど其が爲めに宗教は研究を價せぬとは云はれぬ。

勿論實際の生活上に於ては以上の相反せる二説の中間位を保たうとするのは誤であらう。宗教に對して相當なる敬禮を拂はぬ者には吾人は決して賛同はせぬ。咎責せなければならぬ。迷信や偽善の跋扈を見ては、吾人は決して看過はせぬ。驅逐せぬけりやならぬ。けれども宗教の研究者としては吾人は此様なことに係はつて居てはならぬ。超然として居なければならぬ。吾人が迷信や妄想を研究するのは恰も生理學者が疾病を研究する様なものだ。彼等は疾病の原因や影響などを詮索する。又其救治法をも考へる。けれど之を實際に應用することは醫師に委ねる。又物理學や化學の歴史由來を知てる人は決して煉金家や星占者を怒らない。却りて彼等の見説の中に眞知識の萌芽を發見する。宗教學研究者が迷信や妄想に對するもの

之れ同様だ。彼は宗教とは何ぞや、宗教は人心中に如何なる基礎を有せる乎、宗教は如何なる法則に従つて史的發展をなすかを究明せんとする者である。而して此目的を達せんが爲めには、自分が眞正として信じてゐる宗教計りを見るよりも、寧ろ誤見、迷想と思はれるやうなものを研究する方が遙に有効なことが多し。

或は言語の比較研究を非難してこんな言を云ふ人がある。曰く、言語を研究するのは實用上の目的を眼中に持たなければならぬ。一時に多數の國語を學ぼうものなら、確乎たる據所を失ふ恐があるから、實際上に必要な丈の少數の國語に限て置くがいと所が之れと同一の論法で宗教の比較研究を排斥する人がある。多くの宗教を學ぶ時は之が爲めに自家の證信に動搖を來す患がありはせぬかと心配する。けれどかくの如きは杞憂に過ぎない。

抑も比較と云ふことは何等の利益を齎らすだらうか。云ふ迄もない。凡そ高等なる知識は唯、比較によりてのみ得られるのだ。殊に近世の科學的研究は皆、比較を基としてやる。が今試に、言語學が比較によりて得たる結果は如何なりしかを顧みよう。従前、*Hebrew* 語は天啓の言語である。凡ての國語の根本であると云つて、音韻上若しくは意義上の漠然たる類似を理由にして、他の國語はヘブリッ語から派生した

のだと主張する偏見者流が少くはなかつた。彼等の迷夢を撃破したのは比較言語學者 Humboldt や Bopp や Grimm などではない乎。彼等の著作の中には敵者の如き獨斷的非科學的缺點は一つもない乎。彼等は凡ての國語には——其最劣等のものにもはた最高等のものにも——共通なる一定の體系と秩序が存して居る事を教へたてはない乎。而かも之が爲めに、ヘブリウ語の研究は其價値を失ひはしない。又我々は我々の母國語に對する敬愛を減じはしないではない乎。

されば比較の方法は之を宗教に適用するに毫も遲疑すべきではない。其結果として、或は世界の諸宗教の起原、發達、及盛衰に關する從來の諸説を變更せしむる事もあらうけれども、夫れは決して忌むべき事ではない。但し神學に於ては、新しさも盡く偽なりてふ文句を盲信せざる限り。

Goethe の曰く、一つの國語を知れる者は、國語を知れる者にあらずと、此反言は移して以て宗教に就ても云ひ得られる。世間には其信、山をも動かすに足りながら、宗教の本質は何ぞやの間に對しては黙つてしまふか、或は、只外面的標徴のみを列擧して、毫も内面的本質を御存じない方が少くはない。之れはつまり、唯自分等の宗教斗りを見て居て、他を知らないのに由來するとしか思へない。

宗教には、少くとも二つの相異なる意味がある。猶太教とか、耶蘇教とか、印度教とか云ふ場合に於て、そこに所謂宗教とは、傳承若しくは、法典的書類によりて傳へられ、若しくは、保たれ、居る所の若干の教説の群を意味して居る。よう人が自分は宗教を變へた、改宗したなど云ふのは、全く此意味での宗教を指して居るのだ。基督教を去りて婆羅門教に歸すると云ふは、丁度、英語の代りに印度語を話すと云ふ様なものなのだ。

然るに宗教には又別の意味がある。人間には言語の凡ての史的形式とは獨立に「言語の能力」と云ふ者がある如く、凡ての史的宗教とは獨立に、信仰の能力と云ふものがある。人間と獸類と異なる所以は宗教を有すると然らざるとによるなど云ふ場合に、其所謂宗教とは基督教若しくは猶太教等を指して居るのではない。或特殊の宗教を意味して居るのではない。人間をして無限を覺知せしむる、感性及理性とは獨立なる、寧ろ反對なる一種の心的能力若しくは素質を云ふのである。若しかくの如き能力が人心中に存しなかつたならば如何なる宗教、例へば偶像崇拜若しくは呪物崇拜の如きも全く不可能である。吾人若し注意して耳を傾けるならば、凡ての宗教には、不可思議的を思議せんとし、不可言說的を言說せんとする苦悶、呻吟、無限者

への渴仰神への愛の潜むて居るのを聴取することができやう希臘語の *αἰψήμιος* へてふ語は果して彼等希臘人が主張した如く *αὐτοῦτοπος* (上の方を眺める者) へてふ語から出たのであるか、どうか、夫は扱置いて人間の人間たる所以は其顔を天に向け得る事にある、顔を天に向け得るは只人間あるのみである、と云ふ事は確かである、感性や理性が興へてくれるのではなく、否、寧ろ彼等が拒否せんとする、或者を追慕し、渴仰し得るのは唯人間ばかりであることは疑はれない。

哲學の内に、感性的若しくは直観的知識の條件を究明する科目があり又合理的若しくは概念的知識の條件を詮議する科目があるとすれば、こゝに又第三の科目を容るゝの地がなければならぬ、第三の科目とは即ち、感性及理性と相共働の、但し獨立なる第三の能力、精しく云へば凡ての宗教の根底に存せる無限感知の能力の條件を研究する科目を云ふのである。

獨逸語では此能力を *Vernunft* (各々の *Vernunft* (Reason) 及 *Sinn* (sense) と別にしてある英語では之に相當する語なし、予は唯信傳の能力と云ふより外優れる語を知らず、但しかく云ふ時は其信仰てふ語は只次の如き事物に就てのみ用ゆべき者と定め置かねばならぬ、曰く、理性もはた感性も之を證する能はず、而かも吾人は其存在を

拒否する能はざる、吾人以外の或者が要求し設定する事物。(譯者曰ふ、我國にては *Verstand* を *Reason* も共に理性と譯する人多し、*Verstand* は悟性或は解性と譯す、英語の *Reason* も學派によりては *Verstand* と區別して *Vernunft* の義に用ゐらる。かゝる場合には *Understanding* を *Verstand* に當てあり、吾國にて單に「理性」と云ふ時は *Vernunft* も *Verstand* もこめて意味するが如く解さる)

抑も近世の思想史を回顧するに、カント以前に於ては、人間の一切の知的活動を感覺から導き出さうとする學説が最も勢力を持つて居た、此説の定句は即ち *Nihil in intellectu quod non ante fuerit in sensu* (知力中にあるものは何れも嘗て感覺中にならざりし事なし) である、然るに *Leibnitz* は之に反して主智説を樹て、*Nihil nisi intellectus* (智力以外何もある事なし) と云つた、之に續いて起たのがカントである、彼は、認識には感覺の與件の外に、時空の直観及悟性の範疇が必要であると唱へ、此範疇は先天的性質のものであると云つた、然るに彼は、智力には有限を超越するの力、即ち無限に近づくの能力はないと云つて之を論證せんと力を極めた、が、若しこうすると、人間が無限を望む通路が閉遮される事と相成る、そこで彼は、實賤理性の批判で、其閉ぢた門の傍へ一つの小扉を開らくべく餘儀なくされた、此最後の點こそ實に彼れ

の尊まるゝ所である、何故と云ふに、果して哲學なるものは只現に在るものゝみを説明するに止まり當にあるべきものには及ばないものであるとしても、若し人間には、第三の能力即ち無限を覺知するの能力が只に宗教上に於てのみならず、一切の事に於て存して居ると許されたならば人間は安心する事ができる。否之が許される夫迄は安心しない又安心ができないのである。此能力は理性や感性とは獨立なもの、或意義に於ては矛盾するもの、而かも宇宙の太初より存して居つて、感覺によりても理性によりても敗られない眞の力である。多くの場合に於ては感覺や理性を打破るに足る唯一の力である。予が茲に能力と云ふは古代心理學者の云ふが如き、獨立的の靈魂力を意味するにあらず、活動の一つの様式の義なり。

さて上述の如く宗教てふ語には二个の意味があるから、従つて、宗教學は分れて二部となる。其一は宗教の史的諸形を研究するもの、之を比較神學(Comparative Theology)と云ふ。其二は如何なる條件の下に於て宗教は——最も高等なる形のにせよはた最も低き形のにせよ——可能なるかを究明するもの、之を理論的神學(Theoretic Theology)と名ける。

吾人が是からやらうとするのは前者即ち比較神學である。勿論後者即ち理論的

神學の研究の來る日も遠くはあるまいけれど、是は世界中の諸宗教の比較研究によりて得らるる所の者を十分に多く集め之を分類し分析したる後てな^ゆべければならぬ。こうなつた時には古來ありふれの神學は丁度、Poppeの比較文法學の傍へ Vossius や Lammep 等の著書を持て來た様な觀があるであらう。

理論的神學、精しく云へば、信仰を可能ならしむる內的及外的條件の分析研究をやつて居る學者は昔から随分澤山あつたのに、比較神學は何故近頃迄起らなかつたらう。奇なるが如し而かも之決して奇ならず、理由は簡單なり。比較研究に資すべき材料が缺乏して居たからである。然るに今日に於ては其材料は實に豊富で、如何なる大手腕も到底獨りては盡く處理する譯にはいかない位である。

世人の普ねく知れる如く、彼の Akbar 帝(一五四二—一六〇五)は宗教研究に熱心であつて、猶太教徒、基督教徒、回教徒、婆羅門教徒、波斯教徒などを皆朝廷に招き入れ、且つ出來得べき限り多く諸種の聖典を蒐集し之を翻譯しられた所が今より僅三百年以前に此大帝が集め得た所は、實に今日の一貧學者の藏書よりも遙に憐れてある。彼が種々の苦心魂膽を以て得たと云はるゝ章陀は Atharvan と Dhanishad の幾分と丈だ。今日吾人が持つて居る Zendvesta は Akbar 帝が波斯教の聖者 Ardssher から

授かつたものよりも遙に完全で且つ正確なものである。且つ波羅門教や波斯教や回教よりもずつと大切な佛教の如き者が、彼が各本曜日の夕に開く講筵の上の題目とはならなかつた。彼れの大^{アブドゥル}大臣 ^{Abul-fazi} は自分は佛教研究をやらうとするのに助ける人がないと云つて嘆息した事がある。然るに今日に於ては吾人はバリ語、ビルマ語、シヤム語、梵語、西藏語、蒙古語、及支邦語等て書いてある佛教書典を全部見ることができる。若し此處に何等かの缺陷があるとするならば、夫れは唯此等の書類の完全なる翻譯がないといふ事丈である。但し支那の孔老の書は精良な翻譯が出来て居るから夫によりて研究することが出来る。

現代が享受せる利便は雷に之に止まらず、傳導使共はアフリカやメラネシア等の未開野蠻の宗教に關する材料を盛に集めてくる。是等は皆宗教發達の研究に資すべきもので、言語學に於けると同様である。

然るにこゝに尙一層重要な利益がある。他でもない。聖典批評の學が教えて呉れた所の法則である。今日に於ては誰しも一つの書を引用して我論の證とする際には皆此法則に従つて居る。精しく云へば、其書は何の時代に出来たか、場所は何處、著者は誰、記者は果して其事件の目撃者であつたか、或は傳聞者であつたか、若し後

者であるとするれば、少くとも其典據は其事件と同時代のものであつたらうか、記者は或は黨派的感情の爲めに制せられて曲筆したやうな形跡はなきか、又は全部共に一時に出来たのだらうか、異なる時期に於て生ぜしものか、果して然らば各部分の時代を定め得るか、等を詮議の上ならては其書を引用するやうなうかつな事はしない。

かくの如き精細なる批評的精神を以て古代宗教を研究した二三の堪能なる學者は各宗教に就て、其眞に古代のものとの比較的に近時のものとの間、又教祖及其直弟子の言説と後代の思想、寧ろ後代の訛傳との間に峻別を立てた。勿論、後代の發達、訛傳及改良も其自身に於ては價值なしとせず、だが、丁度、諸國語の比較をしようと思はば先づ其各の古代的の形を知らなければならぬと同様に、諸宗教を比較し其價值を決定しようと思はば先づ其等各の原始的の形に就て明瞭なる概念を得なければならぬ、今一二の例を擧げて御話をしやう。

正統派の回教徒共は頻りと ^{Mohammed} が奇蹟を行つたことを誇りかほに喋々するけれど、モハメッド自身は ^{Corn} の中に、自分は他の人々と同様なものであると明言して、奇蹟を行ふことを非難し、奇蹟は只 ^{Allah} 大神の大事業例へは、日の出、日の入、

雨、露、人獸、草木の發育等に於て現はれるばかりのもので、是等のものこそ、眞の信者の眼には眞の奇蹟であると云ふて居る。其言に曰く、我は唯警告者たるのみ、我は汝等が日夕見る所のもの、外何等の奇蹟、何等の休徴をも示す能はざるなりと。

1. スタンレー、レンフリー著、譯者モハメッドの演説及茶談序論三、六頁及九一頁參照(The Speeches & Table-talk of the Prophet Mohammed' by Stanley Lane-poole, 1882. Introd. p. XXXVI & XII.)

2. 今の世は好悪なり、汝等休徴を求むとも、豫言者ヨナの休徴の外何の休徴をか興へられんや[路加傳十一章二十九節]を比照せよ。

恐らくは佛教の話譚ほど荒唐怪誕を極めたのは世界中何れの宗教に於ても其比はあるまい。然るに、佛陀自身が命じたる戒律の中には、他人より要迫せられた場合にあらざるよりは決して奇蹟を行ふべからずと明言してある。而して佛が弟子に、必ず行へよと命じた奇蹟がある。夫れは如何なるものぞと尋ねるに、曰く汝の善行を隠せよ、而して汝の行ひたる罪を、世界の前に告白せよと。是れが佛の所謂眞の奇蹟なのだ。

又近世の波羅門教は階級制度を基礎とし、此制度は岩石の如く動かすべからざるものとして居る。然るに、*Manu* 法典中に記してあるやうな複雑な階級制度の事は

エーダの中には一言も書いてないのみならず、僧侶も武士も市民も奴隸も皆等しく梵より出たりとしてある。

典據の批評的淘汰は、今日に於ては宗教研究者に安心を與へるほどには未だ十分成就してない、尙々開拓すべき餘地多しだけ、端緒は已に開かれて居るのだ。そして、端緒の開かれた丈けても既に宗教研究者に心得を授ける程の効果はあるに相違ない。それで、原始のエーダの教を研究するには先づ、*Rigveda* と *Sāma*, *Yajur*, *Atharva* を區別し、更にリグの内に就て古き部分と新しき部分を區別せなければならぬ。勿論之をなすには語形、文法、音韻等の微なる異同をたよりとするのである。

次に又 *Ahura Mazda* 崇拜を唱へ出した開祖其人の動機や衝動を了解しやうと思はば *Zendavesta* の中に *Gāthā* 語て書いてある部分を依據とせんければならぬ。何となれば波斯教の經典に現はれて居る方言の中ではガーター語が最も原始的のものであるからだ。

次に又、佛教を批評するには、三藏の中でダルマとアピダルマとを混同してはならぬ。何故と云ふに、二者共に同じく佛教の典籍には相違ないが、夫等各の思想は決して同一でなく、宗教思想發展の異なる時期に屬して居るものであるからだ。

聖典成立の過程を知らうとするには之を佛教史に見るに若くはない。佛教に於ても他教に於けると同様に、其教祖の在世中は師の言説や事蹟を筆録する必要はなかつた。目の前に恩師を見て居る丈けて十分であつた。又滅後の成行に關しては弟子等は少しも心を煩はさなかつた。記録蒐集の企ては佛滅後に於て初めて起つたので、此時は苟も佛の光輝を増すべく思はれる事柄は何くれとなく喜んで迎へ集めたのである。それで佛を神聖なるものとする事に反對するかも知れぬと思はれるやうな人々は此結集には與らしめなかつた。けれども異論異説の起り來ることは到底避け得べきでない。慎重なる熟議熟考をなすものはなく、相互に異端外道を以て罵り合つて、遂には政治上の権力者に請願して争を決せなければならぬ。始末に立至つた。夫れは即ち阿育王である。是に於て彼は多くの長老を招ぎ寄せ、爲すべき事と爲すべからざる事とを命じ、且つ某々の書典は異端と考へらるゝ故排斥せよと勸告した。

1 大典(Mahavamsa, p. 12)に曰く、佛僧の出席するを許さずと(Nānēhi Indha vatthudāma ih).

2 Nāstika, Pāṭaliputra.

今茲に、當時王がマガタの會に告げた言を擧げやう(第二の Bairat 岩の刻文中の

にあり、ケルン氏の譯による)「マガダ王 Priyadasi 本會を歓迎し其幸榮を祈る。佛と信と會、此三者を我は如何に尊び愛するか、是夙に汝等の知れる所、我主佛の語り玉ひたる事は凡て善し、故に之を以て典據となさざるべからず、かくてこそ眞信は永久に榮ふべけれ。我は此等の書を貴びて第一に推す。曰く、戒律の綱要、師の超自然力、未來の恐怖、仙者の歌、禁欲に關する諸經、優波帝沙 (Uṭṭisāya) 問經、虛偽に關して羅候羅に向つて佛の與へし忠告、是なり。是等の書は僧俗共に絶えず學習し記誦せんことを要す。此目的の爲めに我は是等を記録し、我の意向を明にせんことを望む。」直譯とある。

1. ヴァサナシヤは舍利弗の一名

2. 印度古物誌五卷、二五七頁(Judian Antiquary vol. V, p. 257.) カンニンガム氏印度刻文集(Cunningham, Corp. Inscrip. Ind. p. 132.) カンニンガム氏作(Oldenberg, 'Vinayapitaka' vol. I, Intro. p. XI.) 參照

今一つ此處に、學者の注意すべき事がある。眞實の鑑定である。Voltaire 氏が「泰西が東洋に負ふ最貴の賜」と銘打つて出版した *Essai sur l'Inde* は偽書であつた。ヴォ氏は全く欺されたのだ。Jucoliot 氏の *La Bible dans l'Inde* (印度の聖書)も此類だ。

苟も其書の原本に就て讀むのできる人ならば、こんな誤謬に陥るとは決して

ない。今日に於ては吾人は、でき得る限り原本に就て讀まむければならぬ。希臘語を知らずにホーマーを語り、ヘブリツ語を知らずに摩西教を談ずるものがあつたら我等は何と評するであらう。されば *Matthew Arnold* 氏が *La Science des Religions* (宗教學) をヤトラニ嘲笑なさるのを我等は決して怪しまない。君は、アールヤ人の聖典が波斯及印度からバレスタインに入り、そこで耶蘇やパウロやヨハテの手にする所となりて漸次に改良せられ完成せられ、其間に超絶哲學的性質を附與せられ遂に今日見る如き基督教の教義と發達したのだなどと眞面目に唱へられたが、こんな事は、苟もエーダや新舊約書を其原本に就て讀み得ん程の者ならばどうして云ひ出そうぞ。又基督教は元來セム人から來たのてない。既にエーダの讚歌中にチャンと含まれて居る。基督教の教義は、エーダのアグニ神の説だ。化身は火の産出力を表示したのだ。父子、靈の三位一體説は、エーダにある日、火、風の三體説に外ならぬ。而して神は宇宙の大原である。などいふ様な説は *Colebrooke* や *Jassen* や *Burnouf* やの口からは夢にも出やうとは思はれぬ。アールノルド君はビュルヌフの名を引證して居られるが、このビュルヌフ氏の事だらう。 *Augene Burnouf* 氏には實子も養子もないことはア君も御存じの筈だ。

然るに茲に猶又一つの注意すべき事がある。それは、古代の言語は今日のものと同じでない。東洋のは西洋のと同じでない。彼此同一視してはならぬ事である。同じ西洋にしても、英語と佛語とは其同一語でさへ意味が必ずしも一致していない。然るを況んや、古代のセム語を今日の言語で解釋しやうとするならば、どうして誤りに陥らぬ事のあり得べきぞや。

言語と思想とは常に相並行する。舊約書時代に於ては、語も想も尙未だ抽象時代に達して居なかつた。例へば自然力と超自然力とを區別することを知らなかつた。今日の我々ならば、内外の誘惑と云ふべき所を、彼の時代の人等は、人間の形若しくは動物の形したる誘惑者を持出してくる。神の不斷の冥護と云ふべき場合を、神は我れの岩なり、城なり、塔なりなどと云のである。申命記三十二章、十八節に、彼等を生み玉へる岩とさへある。但し茲の意味はホーマーの詩中の「人間の生れ出たる岩」とは決して同一でない事は云ふ迄もない。今日吾々が所謂「天佑」と云ふ所の者は、彼等には翼のある使者であつた。神の導きを彼等は「光の柱」としてゐた。

勿論上述の場合は何れも其中心の眞實の意義を叩いたならば甲乙同一に歸することは疑はれない。吾人若し唯言語の外形、皮相のみを見て、以て古代の思想を理解

し得たと思ふならば、ゆゑしき誤りである。言語上に未だ抽象的と具體的との區別、物的と心的との區別が確と定まるに至らなかつた時代でも、人々は一種異様の、今日の吾人には知り得られないやうな仕方て、此等の區別を辨きまへて居たのである。此事をよく腹に入れて居らなければ、古書を読む際必ず誤謬に陥るのである。否、私は、宗教史上の難點の過半は、古代の言語を解するに、近世の言語を以てし、古代の思想を解するに、近世の思想を以てするの誤りに由來すと斷言したい。此誤解は特に言語が精神よりも神聖なりとして崇められた時代に於て行はれ易いのである。比較神話の研究によれば、這般の誤解は、最古の文書よりも尙ほ古へに於て已に起つて居る、而して宗教思想發達の上に多大の影響を與へて居る。ホーマーやエーダ以前に於て已に這般の誤解作用が發生して居る。但し其影響の著しくなつたのは後來の事である。

抑も此誤解は言語其物の本質に由來せる必然的の過程である。夫故に、上述の如くアールヤ語に於ても之があつた。然らば如何にしてセム人の語、特にヘブライ語のみが之を免れ得やうぞ、唯、ヘブライ語は其性質として、アールヤ語が蒙つた程の著しき影響を受けなかつたと云ふ迄である。併し創世紀の第一章を讀めば、古代の

言語は古代の思想に對して如何なる感化を及ぼしてゐるかよく知れる。

創世紀第二章には、神は最初の人間を作つた後、其肋骨の一つを取つて女を作つたとある。之は文字通に見ては、解することができない。然るに第一章には、神は己れを像とりて人を作れり、彼は男と女とを作れり、神は彼等に幸榮を望み、豊かなれ、増せよ、地に充てよ、地を服従せよといへり。是は第二章の肋骨の語、神は己の助手にとて、エデンに住みける者の肋骨の一つを取りて女を作れり」と相違して居る。如何様に調和し得られやうか。一考へねばならぬ。所が最初に先づかういふ事を知て置かなければならぬ。ヘブライ人は今日の吾々なら、同一物と云へき筈の處を「骨」と云ふて居つた事だ。是はアラビヤ人が物の眼と云つて居たのと同じである。「骨」とか「眼」とか云ふのは、^{エッセンス}實體とか或は、魂とか、自己とか云ふのと同じ義であつたのだ。かゝる例はエーダの中にもある。曰く、骨を有せざる者骨を有せる者を生じたる時誰か其最初に生れたる者を見しや」とある。是は無形の者が有形となつた時、若しくは實體を有せざる者が之を得たる時と云ふ程の義である。次に問ふて居る文に、世界の生命と血と魂とは何處にありしぞや」とある。エーダの古語では「骨」「血」「息」などは何れも唯物質的の意味斗りてはなく、夫れ以外の或者をも意味してゐたのだ。

Atman^{アトマン} といふ語は本來は「息」の義だが後になつて代名詞となり、自己の意味になつた。ヘブリツ語 Eizen^{エイゼン} も同じやうに、元來は「骨」の義であつたが後には唯の代名詞的形容詞となり、自己若しくは「同一」の義となつたのだ。

以上に説明した事を心得たなら、かの疑問は容易に解せられる。アダムがエヅに對して、近世の語でならば「汝は我と同一物なり」と云ふべき處を、汝は我の骨の骨、肉の肉なり」と云つたのであらう。こんな言ひ方が數代も打續いた後には、物質的の解釋が必然に起つてくるであらう。太初の女は太初の男の肋骨の一つから作られたと云ふやうな考が必ず起つてくるであらう。殊に肋骨にはぶら／＼してゐるのがあつて、取り去つてもよいやうに思はれるものだから、此説は愈々俗間に受けられる事になる。かゝる誤れる解釋も一度確立されたる以上は、其奇抜は偶以て俗人を驚かすに足り無智の民衆の間に傳播するやうになる。

古語に於ける此種の誤解はセム語に於てもアールヤ語に於ても必然的に起つた過程であつた。不可避的の過程であつた。今セム語に於ける他の一例を舉げて見やう。

Berosus^{ベロース} と云ふ人がバビロンの宗教の事を書いた断片がある。今夫れに就て御話

しやう。

猶太人の宗教とバビロン人の夫れとは御親類であることは疑はれない。然るに聖書の語は頗る簡潔朴素であり、バビロンの神話は甚荒唐奇怪であつて、一見しては、兩者は氷炭相容れざるかの觀がある。而かも實は夫れは皮相の觀に過ぎない。

Berosus^{ベロース} がバビロンの宗教の事を記した書は正確なものであることは争はれない。彼は歴山大帝と同代の人で、バビロニア生れて、Belus^{ベロース} 神の堂に居た僧である。彼は大帝に献上する爲めに希臘語でカルデアの歴史を書いた。其書の第一卷には本書はバビロンに保存されたる天文記及年代記より輯録したるものと書いてある。其間星霜を経る約二十萬年(Syncellus^{シンケラス} 氏によれば十五萬年)然るにベロースの書は逸失して、只其拔萃が Alexander Polyhistor^{アレキサンダーポリヒストル} の手に保存されてゐた。是は紀元前一世紀頃の事である。然るに此拔萃の書も今は亡し。但し Eusebius^{ユゼビウス} (二七〇—三四〇)が其著 Chronicon^{クロニコン} 年代記を書いた當時には、まだあつたものと見えて、クロニコンの中に引用されて居る。然るにオイゼビウスの書も傳はつて居ない。唯、其幾部分がアルメヤ譯で吾人に傳へられて居る。其中に、ベロースのバビロン史の文が載つて居る。此アルメヤ譯は一八一八年に出版せられ、Niebuhr^{ニブホル} 氏が始めて、此書の重要な價値ある

事を云ひ出した。

さて、オイゼビウスの書の抜萃の多くはコンスタンチノープルの權大僧正 *Georgius Syncellus* と云ふ人の手に保存されて居た。氏は紀元後八百年頃に年代紀を著した人である。氏の所藏によりて希臘の原本とアラメヤ譯とは多くの箇所にて比較することができ、而してアラメヤ譯の信憑するに足る者であることが分る。

さてペロヌスが開闢に關するバビロン人の傳説を誌して居る文に、曰く、凡てが暗黒及水なりし時ありき。其中に怪物は生せられ、種々の形を有せりき。人間には二箇の羽翼あり、或者には四箇あり、或は一身二面、一頭は女、一頭は男なるあり。兩根共に具せるあり、羊の足及角を有せる人間あり。馬の脚を有せるあり。後足は馬、前足は人なるあり。 *Hippokentaurus* (希臘の半人半獸の神名に類似せり。牛は人頭を有し、犬には四身ありて其後部より魚の尾出づ。馬は犬頭を有し、人間にも馬頭馬體而かも魚尾なるあり。他の動物の中には、凡ての種類動物の形を具せる者あり。此他、魚、蛇、爬虫等、奇怪なる生物あり。各相異なる容貌を有せり。其等の肖像はペルス神の堂にあれば就て見ることを得べし。凡てのもの、長として一つの女ありき。 *Omorka* (armen, *marcaja*) と稱す。カルデアにては *Thalathin* (希臘にては *Thalassa* (或は海) と譯せらる。かく

て、凡てのもの、集まりし時、ペルス來り、其女を兩斷し、其半を以て地を作り、他の半を以て、虚空を作れり。かくて彼は彼の女の内にあるあらゆるものを滅しき。されど此物語は比喩として解せざるべからず。何となれば、凡てが尙濕潤にして被造物が其内に含まれし時、神(ペルス)は己れの頭を切斷せしが、諸神は夫れより流れ出たる血を土に混して、以て人間を作りき。是を以て、人間には理性あり、よく神智を享有するを得るなり。かくてペルス、即彼等の所謂 *Zens* (又アルメヤ人は *Armazd* と呼ぶ) は暗黒を兩斷して天と地とを分離し、以て世界を作れり。かくて、光の力に耐へざる動物は亡びき。かくて、ペルスは荒蕪の地と豊饒の地とを見、諸神の一つに命ずらく、我頭を斬り、夫より流るゝ血に土を混じて、以て空氣に耐ゆる人と獸とを作れと、かくて又ペルスは恒星と日と月と五箇の遊星とを作れりき。(直譯)

一見した所では何人と雖、此バビロン人の開闢説の無意義と混雅とに吃驚せぬものはなからう。然し吾人は此説話の中に明に次の諸要素を認めることができる。

- 一、太初には暗黒及び水があつた事、
- 二、ヘブリウの方では暗黒は大海の而を蔽へりとなつて居る。
- 二、天と地と判れたこと、

へブリウの方では、水の直中に天涯あまのあらしめよ、かくて、それよりして、水と水とを分れしめよ……かくて神は天涯を天と名け、乾ける陸を地と呼べりとある。

三、 恒星、日月、及五箇の遊星の作られた事、

へブリウの方では、かくて神は二個の大光を作れり、大なる光をして晝を支配せしめ、小なる光をして夜を支配せしむ、又彼は恒星を作れりとある。

四、 種々の獸類が作られた事

五、 人間が造られた事、

此内、獸類の創造に就て特にバビロン人は荒唐なる想像を逞ふして居る、而して夫等異形の者の肖像はベルスの堂にあると書いてあるし、又今日英國の博物館の所藏には此等の配述と一致してゐるものがあるから、此等の説話は、古人がバビロンの殿堂にあつた奇異な偶像を見て考へ出した構造説に過ぎんと云ひ得るかもしれない。けれども此事だけでは未だ十分に古代的思想を説明したとは云へない。

こゝで最も肝要な事は、人間は神智を分有して居るとのバビロン人の思想である。此思想を表はし居る言語こそ甚だ忌はしく恐ろしきものではあるが、底を叩け

ば、へブリウの神は人間の鼻孔に生命の息を吹き入れ玉ひきと云ふのと必竟同一である。同一思想の微弱なる發表に外ならぬのである。

苟も古代傳説の眞義を解せんと欲せば先づ其國語の特質眞髓を熟知せんければならぬ。例へば希臘語、羅典語、梵語等の如き名詞に性を付ける、國語に於ては奇怪なる神話が必然的に生じてくるけれど、性を表はさない國語はかゝる説話を産しない。Dieck博士は曾て「南亞弗利加語の比較文法の序に於て次のごとくに云ふてゐられる。曰く言語の形式はそが發表する思想の上に多大の影響を與ふるものなりとは既にマックス、ミュラー氏の唱導せる所なるが、吾人は亞弗利加探究によりて愈其然るを確めたり。或人種 (Kaffirs, Negroes, Polynesians) 等の祖先崇拜と他の或人種 (Hottentots, Northfrian, Semite, & Aryan) 等の天體崇拜は各其國語の性質に負へる所あり。性を表はせる國語を持てる國民は高尚なる詩才を有し、諸の無生物に生命を附與す。此事は殆んど凡ての神話の基とはなるなり。然るにカフア人等に於てはかくの如き事を見るを得ずと。そこで私はアフリカの言語に於ける一例を挙げやうと思ふ。

博士 Callaway 氏に據れば、ツル人は皆各家族及各部族の祖先を第一に拜して居る

が、又人類一般共通の祖先をも信じて居る。之に *Dakimukulu* と云ふ名が附いて居る。會(會)祖(祖)父(父)の義である。而して、此者の出所を尋ねるとツル人は大抵皆葦(葦)から分れ出たのだとか、葦の床から出たのだと答へるとの事である。私は之を聞いて、如何に言語なる者は、神話を織り出す上に、其作用を逞(逞)ふするかを思はざるを得ないのである。梵語の *Parvan* は、葦の一節が本來の意味であつたのだが、夫が轉じて「一鎖(鎖)一員(員)」の義となり、後更に家族に移りて、本幹より出づる萌芽の義となり又幹(幹)種族(種族)系統(系統)等の意味を表はすやうになつた。 *Vansa* なる梵語も元は、葦又は竹の意味であつたのだ。ツル語で「葦」は *Dhalanga* と云ふ精密には「出芽し得る葦の意味である。そこで此語は比喩的に、生物の源の意味を有することになつた。故に祖先は其子孫のツトランガである。今日のツル人は此言を如何に解して居るにせよ、太古に於ては、人間が眞に葦から出て來たとの意味ではなかつたのだらう。カラエー氏の言に「義は失せて語のみが傳はりたる事は疑ふべからず」とある。私が此ツル人の神話に付て試むる解釋は至極簡單である。即ち次の如くである。

太古ツル人は、我等は一つの葦より出てたるなり」と云ふて居つた。其時代では其所謂「葦」とは梵語の *Vansa* と同じで、即ち彼の言は「我等は一つの祖先の子孫なり、一種族の部員なり」と程の意味であつた。然るに後來ウトランガが「一種族を意味するに至つた時にもまだ原始の「葦」の意味が残つて居つたのである。そこで民衆共は比喩的の語、比喩的の想を知らないから、人は眞に葦から出たのだと解したのでらう。又ウトランガを固有名詞と見て、之を全く人類の祖先と解した人々もあるだらう。現に今日に於ても、或ツル人はウンクルンクルを最初の男、ウトランガを最初の女として居る。

凡そ何れの國民にもあれ、何れの部族にもあれ、家族にもあれ、いつしか、一つの祖先を欲しがつてくるものである。比較的近世の事であるが、*Briton* 人即大英の國民が自分等には祖先がない遺憾であると嘆いたので、*Monmouth* の *Geofrey* 氏はブリトン人はブルータス(*Brutus*)の子孫であると云つて其證明を與へた事がある。之と同様に、*Hellenes* 即ち *Hellas* の古の住民共は自ら *Hellen* の子孫であると唱へて居つた。ヘレナスてふ語は始めは只 *Thessaly* の一部族をのみ指してゐたのだが、後には全國民の稱となつた。そこで、*Aeolia* 人の祖先 *Aeolos* も、*Doria* 人の祖先 *Doris* も、*Achaeos* 人及 *Ionis* 人の祖先 *Xuthos* 等何れもヘレンの子なりとせられた。尤もな事だ。然るに茲に、然らば其ヘレンの父は誰なるかとの問の起るも尤もだ。ヘレンが果

して全人類の祖先であるならば *Nous* 大神の子であらねはならぬ。或者はこう解釋したが又異説もある。他の諸國と同じく、希臘にも洪水の傳説がある。之に據ると、此災害を免れたのは *Prometheus* の子でテッサリの王 *Deukalion* (父に前以て洪水があるぞと教しへられたので) と其妻の *Pylaia* と丈けてあつたとある。すると希臘人には二つの祖先があることになる。ヘレンとドイカリオンとである。そこで、ヘレンをドイカリオンの子とするより外はない。

吾人若し古代語の特質真髓を捕捉するならば上述の事はよく理解することができる。

希臘の傳説は、ドイカリオンは如何様にして凡ての人間の祖先となつたかを説明して居る。曰く、彼と其妻ピルラとが石を後方に投げしに夫等の石は化して男女となつた。と、此話は甚奇怪である。ピルラと云ふ妻をドイカリオンが已に持つて居たのなら、ヘレンは其子であると云ふに於て何等の不思議はないのである。こんな附け加への話のあるのが却りて不思議である。然るに此不思議も、語の由來を調べて見ると、事のう嗜れるのである。抑もピルラは、赤き者の護で、こゝでは赤き地の意味である。希臘人は自分等は本來希臘の地には、えぬきの民である。余所から移住

たのではないと云ひ舞する爲めに自分等の大古の母即ちドイカリオンの妻をピルラと名けたのだ。所がもとく希臘の洪水説でも、印度の洪水説中の *Manu* と同様、洪水を免れたのは唯一人のドイカリオンがある計りなのである。そこで妻なくして如何に人類の祖先たり得るやとの疑問が起り、之に對して石を投げたと云ふやうな説も出てきたのらしい。希臘語では人民は *Polis* 石は *lithos* である。されば、ラオス即ち人間は何處から來たのかと、子供が尋ねる場合に御母さんが、ラエス即石からだと答へるやうな事は随分ありそ、うだ。

私は上述の如き例はいくらでも擧げる事ができる。が古代の傳説はどれにしても、皆無意義のやうに見えて而かも意義がある。吾人若し、言語の訛傳てふ皮殻を除く去するならば、背理的な思はしき説話と雖、其裡には美しき愛すべき理解し得べき核實を見出すことが出来るのである。

後世の誤解曲解を剥き去つて古代の原始的の意義を露出せしめたとして、其爲めに吾人は得る所あるとも失ふ所は少しもない。 *Harpheistos* が斧を振つて *Nous* の頭を割くと *Athene* が跳り出すと云ふ話譚は、裏面から見ると、ツエウスとは輝ける空其額とは東方、ヘファイストスは未だ昇りきらぬ若き太陽、アテネは曙光の泉より

歩み出て来る空の娘を指して居るのであると看破したとて、夫が爲めに吾人は何等の損失をも感じない。

又 Apollo と Artemis とが Niobe の十二子を殺す譚は、其ニオベとは元來雪及冬の義であつて、春の神アポロとアルテミスが雪てふ可憐兒を殺すと見た詩人の想像に過ぎぬと知つたとて、其が爲めに希臘の諸神が吾人の眼中に其價値を減じはしない。

抑も梵語や希臘語や羅句語が未だ確然と定まらない頃、エーダ諸神が未だ拜まれない頃、ソエウス神の祠が未だドドンナの柏の森の裡に建てられない頃、短く言へば、アールヤ人種の分裂以前、更に短く云へば、今より四五千年以前には唯一の最高神のみが拜まれて居た、而して其神は他のは取換ゆべからざる優れたる美しき名で呼ばれて居たのであると知ることには何の價もない事であらうか、所謂其名とは Dyaus, Zeus, Jupiter, Tyr 是れてある。皆原始に於ては同一であつて、光輝の意味である。此概念は後になつて一方では物質化せられて空、朝、晝となり一方には輝く天上界の實在、即ち Dyaus となつた。是ぞ即ち神聖なるもの、最初の名である。

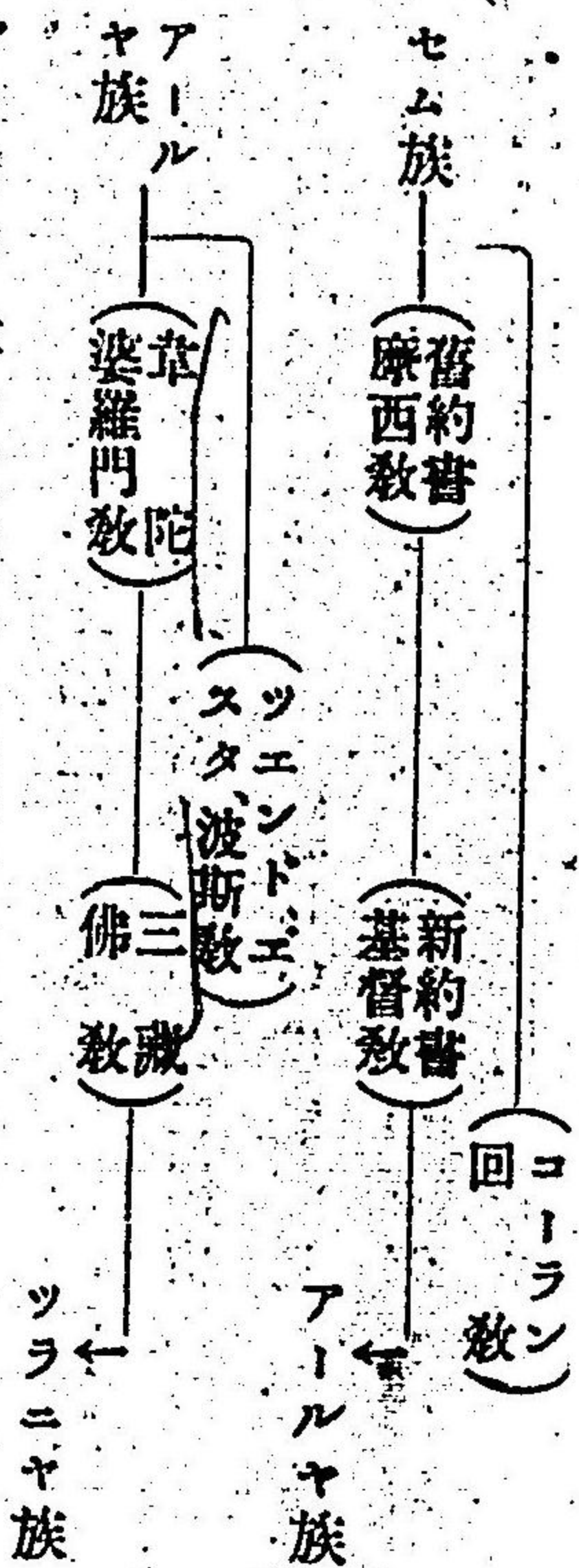
之を要するに、言語的研究によりて、吾人は得る所あるも失ふ所は決してなし。古代宗教は猶古寶玉の如し。時代の錆を除けば始めて其眞躰は露現し、赫々乎として純潔なる光輝を放つてあらう。而して其際、其中から開き示さるゝ像は何の像であらうか、父の像、地上凡ての國民の父の像であらう。其上書を、若しよく讀み得たならば、神の言葉は常に猶太のみならず全世界凡ての國語にも啓示されてあることが知れるであらう——それが啓示され得べき唯一の場所に於て——人間の心胸に於て。

第二講

(千八百七十年二月廿六日)

宗教學研究に於ては其材料に缺乏を訴ふる憂は決してない。通例、東洋諸國の宗教は、所依の經典を有て居るのと、之を有てゐないのとの區別する。然るに實際に就て見ると、所依の經典を有て居る宗教は其數甚少なく、且所謂其所依の經典も、眞に教祖が述べた教義を其儘に傳えて居るのは甚だ少なく、何れも大抵屈曲變形せられて居るけれども、學者に取りては此等の書は云ふ迄もなく重要なのである。

先づ世界史の舞臺上の大役者と云へば、アールヤ族及セムの二大人種である。所が此各が、何れも典籍を有する宗教を二つ持つて居る。アールヤ族の中には印度人及波斯人、セム族の中にはヘブライ人とアラビヤ人の宗教がある。而して印度人の宗教にも二つあり、ヘブライ人の夫れにも二つある。前者はバラモン教と佛教とて、後者はモーゼ教と基督教である。波斯教はゾロアスター教と淵源を同ふし、回教はアブラハムの宗教から派生したのである。今此流脈を圖にすると、



佛教はバラモン教の直接の後繼て且つ同時に對敵である。波斯教は韋陀教の派生であるが、併し最古のゾロアスター諸神の崇拜には反對して居る所もあるのである。右と同様の關係がセム族の方にもある。但し年代の順序だけが違つて居る。即ち回教は佛教より後に出たのだけれど、波斯教は佛教以前のものである。

佛教は右の婆羅門教に反對して起つたのであるが、一時盛大になつたばかりで間もなく其本國に於ては亡びてしまひ、後、ツラニヤ民族の中へ移り入りて、そこに本營を建てた。即ちアールヤ族の宗教から生れ出て而かもツラニヤ族を支配する主宗教となつたのである。

基督教はモーゼ教から出たのではあるが、丁度佛教がバラモン教に排斥された如く、猶太人に排斥された故に猶太教の改革者としては失敗に歸したが、セム族を去

りてアールヤ族に移り入てからは、即ち所謂猶太人から異邦民に移てからは、大に其真相を發揮して世界の大宗教とはなつた。即ち、生れたのはセム族からであるが、終にはアールヤ族を支配する主宗教となつたのである。

然るに茲に又、セム及アールヤ以外の一民族で典籍を有する宗教を二つ有て居るのがある。孔、老二教を有する支那人が即ち夫である。

上に挙げたる八大宗教の經典は梵語、ハリ語、ツェンド語、ヘブリウ語、希臘語、アラビア語、及支那語の七ヶ國の語で書いてあるのだが、是程の典籍を涉獵するのは、一人の學者に取ても左迄至難の事とは思はれぬであらうが、中々一寸見た様な譯にはゆかない。手近い處先づ、我等の新舊約書に關する或は歴史的の或は教義的の注解書、異説の著述などは毎年如何程出版されるであらうか。蓋し思半に過ぎるであらう。今道教の所依經典老子道德經を見るに、此書は僅に五千二百語あるのみである。然るに其注解書は殆んど數ふべからざる程に澤山ある。Julien 氏道德經 'Taote-king' p. XXXV: p. 62 參照。又回教は最も新しい宗教で且つ最も文字少き宗教であるのに、其歴史を知らうと思ふと用ゆべき材料は中々澤山で容易に涉獵することできぬ。Sprengr 氏は其著モハメット傳 ('Das Leben des Mohammed' vol. 1. p. 9) に「此書の

材料として用ひたる書名を列舉せば可なりの大冊子をなすべし」と云ふて居られる。

次にアールヤ人の宗教に移つて申せば、先づ最も狭き意味でのバラモン教の書類と云へば事なく一擧の中（一擧の中）にありそうに思はれる。リグ、エダ、讃誦は其數僅に一千二十八で、約一萬五百八十句ある丈けだ。所が、其注解書は私の出版したのでは六大冊になつて、十萬行ある。各一行は三十二綴だから、總計三百二十萬綴になる。（拙著『古代梵語文學史』, 'History of Ancient Sanskrit Literature' p. 220 參照。然るにリグ、エダの外にまだ三種の章陀がある。此等は教義を見るのには必要ではないが、供儀や禮式などを知らうと思へばどうしても缺くことはできぬ。然るに此等四章陀の各には Brahmanas と名くる注解がある。後代人の手に成つたものではあれど、古の梵語で書いてあつて、印度人は之を天啓の書として尊崇して居る。此書は章陀讃誦よりも遙に浩翰である。

上に挙げたのは何れも是れ原本である。處が此等の原本を基とせる種々の論說、評釋、語彙の類が上下三千年の間に於て無數に産出せられ綿々として今日にまで尙續いて居る。然に夫等は皆正統派の述作である。之に反對の信仰及思想は又無數

の書類を産出して居る處が夫等に對して、バラモン共は所謂大鐵槌的毒矢的辯駁をやつて居る。其争論の激烈なるや實に千古の偉觀、世界無比である。然るに印度人の宗教思想を知るのには此外尙、法典類がある。史詩特に *Mahābhārata* 及 *Rāmāyana* と云ふ二大史詩がある。其他 *Purāna* だの *Itihāsa* だのと云ふ書類もある。何れも採て以て參考に資せんければならぬ者である。然るに以上を通覽しても、未だ以て印度の宗教思想全體に涉つたとは云へない。古來此國には宗派の異別が實に無數であつて、各地至る所に宗教生活の中心ができて居て動もすれば割據獨立の勢をなすものだから、僧侶輩は之を統一しやうと苦心慘愴、*Nanak* が建てた *Sikh* 教の如きは殆んど獨立して居るもので、自家丈けの經典もあり、僧侶もあり、一時は婆羅門教や回教の向を張つて侮るべからざる敵であつた。然るにこの派は十五、六世紀頃印度教及回教の腐敗に反抗して起つた所の多くの改革派中の只一つに過ぎない。此派の所依典は *Grantha* と云ふ。此書は全體から云へば、つまらぬものだが、中には折々詩的な意味深長な文句もなすてはなし。(Trapp, 博士の譯あり、'The adi Granth, or the Holy Scripture of the Sikhs, translated from the Original' Gurmukhi) 然るに此の書には種本がある。Grantha は大抵 Ramānād の弟子 Kabir の書から採て來たものである。此書も學者は

一讀すべきである。

然るに吾人は未だ印度の第二の典籍宗教即ち佛教に付ては尙一言も及んでいない。佛教の典籍は實に無數とも云ふべきで、教徒は世界の大半を占領して居る。歐洲の學者は云ふ迄もない。佛教徒中の博學なる學者でも未だ全佛教の全經典を讀むだ者はあるまい。

南方佛教の所傳によれば、佛典はもと八萬部(或は八萬四千部)あつたが、今ては六千部丈けになつたとの事だ。(Burnouf 氏印度佛教史緒論、Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien, p. 37. 参照) *Saddharma hankara* 經(直譯、妙法楞伽經)には、佛典は原本と註解と合せて二千九百三十六萬八千字だとある。序に云ふが聖書の英譯は三百五十六萬七千八十字ある。但し母音と子音を各一字つゝに算して)

現存の佛典は、南方佛教のはバリ語で、北方佛教のは梵語である。バリ語の佛典は聖書の二倍程だ。英譯なら四倍あらう。Spence Hardy によると、本文は二十七萬五千二百五十句で註解の方は三十六萬千五百五十句あるとの事。一句とは三十二綴音より成る一行を云ふ)

梵語の佛典は所謂九つの Dharma (九部或は九分?) だ。西藏譯は Kanjur 及 Tanjur の

二部門に分れてゐるが、合せて三百二十五冊ある。北京版では各冊の重量が四磅乃至五磅ある。

又此外に *Jaina* と云ふ一つの支派がある。教祖を *Maha Vira* と云ふ。其以前にも同じやうな聖者が二十三人あつたと傳へてゐる。之を *Pitankara* と云ふ。マハーギーラは又 *Shataputra* 又は *Jatruputra* 又 *Jastiputra* (シリテは *Nakaputra*, チャイナ、ブラクソットテは *Nayaputa*) と云ひ *Papa* テ死んだと傳へてゐる。若し其年を紀元前五百二十七年とすれば釋迦よりも古い人となる。鬼に角鬘、伊那派と佛教との關係は當今未決の問題である。此派の經典は一つの *Prakrit* (地方語) で書つてあつて *Ardhamagadhi* (シリテは *Magadhi*) と名づく。 *Siddhanta-dharma-sutra* (經名) によると此派の經は *スートラ* 又は *シツダンタ* と名け、大別して *Kalpa sutra* 及 *Agama* の二とし、前者が五後者が四十五あるとの事、他の分類法によると、八部門に分ける。第一には十一の *Angas*、第二に十二の *Upangas*、第三に四の *Mula-sutra*、第四に五つの *Kalpa sutras*、第五に六つの *Chedas*、第六に十の *Payanna*、第七に *Nandiskri*、第八に *Anuyogadvarya str.* とて總計五十之に註解を合すると六萬偈になるとの事だ。但し今日に傳はつてゐる所のものは紀元後五世紀よりも古くのものでは決してない。

1. Bühler 氏印度古物誌 Indian Antiquary VII. p. 143.

H. Jacobi, 氏 'On Mahāvīra and his preceptor' (マハーギーラ及其先行者) 關して(印度古物誌 IX. 163)

及同氏の Kalpastra of Bhadrabahu の序文參照

譯者云ふ漢譯では耆提子又は尼離子などあり。

2. 印度古物誌 IX. p. 161

次にアールヤ人の第三の典籍宗教の經典は *Zend-avesta* といふ。原本甚乏しい、且つ缺陷が多い。をまけに此書には其本國人の施した注釋がないせいでもあらうが良翻譯を見る能はざるは遺憾な次第である。

最後には支那の宗教だが、孔子教の所依は四書五經である。夫れ自身は浩翰ではないけれど注釋書類は殆んど測るべからざる程の數である。老子教のは道德經と云ふ。僅に五千語に過ぎないけれど注釋は非常に多い。Julien 氏が譯された時参考に用ゐられたのが六十家以上だつた。而して夫等なしには通解し得られないとの事。此二教の外に *法* (フア) と云ふ宗教がある。是名は佛陀の漢語訛である。佛教は印度から支那へ入りて著しき變化もしたし又莫大の書籍を産出したには相違ないけれど、未だ以て獨立の宗教を以て目するに足る程のものはなかつた。佛教は一方

はセイロン、ビルマ及びシヤム、他の一方ではチバル、西藏、蒙古、支那、朝鮮及日本と、さう南北兩大部に區別される。そこで支那のは北方佛教に屬するけれども、パリ即ち南方に屬する典籍も甚多く譯されて居り又信奉されて居る。今假りに上述の幾多の聖典を涉履し盡すとした所で未だ以て全人類の宗教を研究するに必要なる十分の材料を捕へ得たりとは云へない。是に洩れたるものでも、而かも甚肝要なるもの少からず、上述の中には希臘人や羅馬人の宗教の事は云はなかつた、Pentons 人、Celts 人、Slavs 人のも云はなかつた。此等の國民が其神聖なる柏の森を切り倒して、基督教に回宗した以前は如何なる信仰を有つて居たらうか、之を研究するには如何すべきか、ホーマーや Hesiod の作は決して古希臘人の衷心の眞信仰に關する消息を與ふるものでない。所依の經典でもない。而して羅馬人に於ては *Hind* や *Odyssey* に比すへきものすら一つもない。チウトンやケルトやスラーヴの宗教に至りては、諸神の名さへも多くは湮滅して傳つてゐない。故に吾人は只彼處や此處から斷片的史跡を拾つて想像的に之を彷彿するの外はない。

上述のアールヤ族の宗教に於ける是類の缺陷は又セム族の方にもある。バビロン人、Assyria 人、Phoenicia 人、Chittago 人、回教以前のアラビヤ人の宗教の如きに至り

ては何等の所依の經典はないから、碑銘だの、傳説だの、固有名詞だの、古諺だの、呪詔などの傳り残れるをたよりに推測するより外に道がない。

されど、吾人をして、尙一步を進ましめよ。セム族の思潮が南東より北西に、印度河より *Euphrates* 河の方へ、*Euphrates* 河より *Jordan* 河及地中海の方へ流れ來た其域床の面積は敢て狭ましとにあらねども、之を全世界の自餘の部分と較ては實に九牛の一毛である。今眼を高う擧げて、ぐるりと見渡すとすると、先づ目に付くのが *Nile* 河畔に屹立するピラミッド、そこらには螺旋堂がある。殿堂の殘壘がある。何れも其壁面には書文字が書いてある。諸神諸女神の像が彫つてある。又埃及には有名 *Temples*、且に録せる宗教的書類の巻物がある。概近研究は着手せられたれど、未だ太古埃及の信仰を知悉する程には至らな。

次にナイル河を折ると、茲に全亞弗利加の地を見る。其處には *Pygmies* (蠻人の小舎) がある。家畜小屋がある。供職の煙が、そこに昔は天に上りつゝあつたのだい、や今ても上りつゝある處もある。が、まづ古アフリカの宗教の痕跡は今や非常の速力を以て湮滅に歸しつゝあるといつてよい。併し現時の殘存物より推測すると、蛇及祖先崇拜のあつた事、微かながらに來世の信仰もあつた事、さては天の至高神—白人に

も黑人にも同じく父たる一の信仰の名残りも認め得られるのである。

今眼を、アフリカの東岸から離れて海を横切らして、マダガスカル島からハワイの方へやると、其間に、島又島が點綴して印度洋及太平洋に連鎖をなして居る。其處には黒い *Tapias* 人が居る、黄い *Mulay* 人、蒼色の *Polynesian* 人も居る。何れも未開中の未開人、而かも神的實在物や未來の信仰の聲が微かに聞える。其形式こそ賤劣であれ、祈禱もある、供犠もある、何れも祈らば聞かん、献げは受けんの神の存在の信仰は人間在所不可抜である事を示して居る。

更に東方に向ては、兩米の二大陸を見る。此處にも古代宗教研究の材料は充滿して居る。不幸、始めて彼地に行きたる歐人が集めたと云ふ傳説や神話の類を見るに多くは當時の西班牙人の思想の影を宿し居るから、頼むべき材料とする事が出来ぬ。遺憾千萬な事である。Mexico や Guatemala 邊の怪しげな舊文字の書も未だ明に讀解せられない。土人が土語で書いた類と雖も全くあてにならぬ。多くの警戒を要する。とい云へ、メキシコの *Aztecs* 人やペルーの *Incas* 人の古代宗教は研究するに多大の興味あるべきは疑ない。夫から北の方へ向くと、赤膚の土民が居る。彼等の消息は甚だ微かである。殊に數年前の出來事以來は所謂 *Livres des Sauvages* (蠻人の讀本) は

再びとは得られぬことゝなつた。けれど赤色印度人の遺民は尙存してゐるから、彼等の朴素の信仰を知るのに材料として用ゐられる。彼等は其處へは *Atlantic* 橋を渡りて行つたのであらうか。但しは亞細亞の母土を離れて島から島へとカヌー(うづろ舟)の上で風に送られて米の地に着いたのであらうか。それは何れにせよ、夫れ以前即ち有史以前の人類移住の證據は今日でも確に認められるのである。

こゝて亞細亞の大陸へ立歸ると、此地は彼の入大宗教占領の所ではあるが、夫れ以外の信仰も、或は表面に、然らずば、下層に流布して居る。若しくは流布して居たのが見られる。蒙古人のシャーマン崇拜 (*Shamanism*)、Fin 人及 *Eschima* 人の半ホーマー的神話の類は即ち夫れである。

かくどんくゝと述べて來ると、學者は望洋の歎を免れぬであらう。材料の豊富なることは最早何人と雖否定する譯にはゆかぬ。唯、問題は如何に是等を處理せば研究の目的を達し得べきかにある。答へて曰く *Divide et impera* 分類せよ、さらば了解せられん。然り唯分類あるのみ。學者を導く *Ariadne* の巻の糸は之のあるのみ。眞の科學は分類を基として立つ。宗教の分類は不可能、と明に定まつたら、始めて宗教學も又不可能と云つてよい。地面を能く觀察し測量した上で、各自々に部域を定めて開拓

に従事したならば力の浪費なしに成功の堂に上り得るであらう。然らば如何に分類すべきを先づ通俗に行はれて居るのは眞宗教、偽宗教の二つに分けるのだ。是は國語の分類に、自國語、他國語と別つの類だ。希臘人の分類には曰く希臘人のと蠻人のと、猶太人のには曰く猶太人のと異邦民のと、印度人のには曰く、アールヤ人のとムレツチヤ共 (Mlecchas) のと、支那人のには曰く中華のと外狄のとめい、勝手の熱を吹く。こんな分類には科學的價値のあらう等がない。次には天啓的宗教と自然的宗教とに分つ法だ。然るにバラモン教の眼からは自分ば天啓的で、佛教は自然的と見えるが、其バラモン教も回教からは自然的と見える。廣く研究して見ると、凡ての宗教が何れも各自を以て天啓的と見て居るやうだ。基督教猶太教は云ふ迄もない。バラモン教に至りては實にひどいことを唱えて居る。嘗に韋陀は天啓だと云ふに止まらず、有史以前否世界存在以前に其起原を有てると云ふ。佛教とても這般の臭氣は全く脱してるとは云へない。後世の佛典中には佛陀は天啓的眞理を授かつた様に書いてある。拙著古代梵語文學史八三頁參照。勿論佛陀自身は *Numa* や *Zoroaster* や *Mohammed* 等の如く神の靈に面謁したやうなことは云はない。況んや韋陀詩人の唱ふる如き大言をや。佛は自ら唯我獨尊と云つて

天下に我より偉なる者賢なる者なしとじて居る。さればこそ、その諸神さへ彼に奉仕して居るのだ。彼は吾人の所謂內的光明を尊奉して居るのだ。彼始めて四諦を説くや、曰く、僧よ、此等未曾有の教理は達せんが爲めに、我内に眼と知と智と明覺と光とが開けたら、直譯と彼は直弟子等に *Sarvajña* 一切知と稱せられて居るけれど、彼も或事柄に付ては其時代の語を語りつゝあつたので、地球の形狀、天体の運動に關する彼の説は全く間違つて居る。それで後代になつて、其誤謬が発見された時、佛教學者は其所謂一切知と矛盾するのを見て、一切知とは唯々主要なる教理に關してのみ然るものであると制限を附けて、只此等の範圍内に於てのみ彼の言説は無過誤であると唱へた。勿論是は後代の見解であるが、佛教學者の卓見には、感服の至りだ。 *Mihinda Pagan* (ミリンダ王問經、那先比丘經) の中で *Nagasena* (那先) が已に此種思想を告白して居る。彼はミリンダ王の間に答へて曰ふには、然り大王よ、佛は全知なり。されど凡ての時其全知を用ゆるにはあらず、彼が一切を知るは冥想によりて、其知らんと欲する一切を知るなりと直譯。此言は、感覺や理性で知り得らるゝものと、冥想によりてのみ知り得らるゝものを截然と區別したのである。彼は、感覺や理性の範圍内に於ては佛の全知若しくは無過誤を主張しないで、只冥想によ

りて知らるべきもの、即ち吾人の所謂信仰事に關してのみ之を主張したのである。さて自然宗教なる語は其意味が一定してゐない。十八世紀の哲學家は之を恰も普遍文法の如く、奇蹟、怪譚、敷衍、細説等を加へざる而して凡ての宗教に必要且通同なる宗教的原理の一束と解して居る。所謂宗教的原理とは、即ち神の存在、其萬能遍在、全知、永久性、自存、靈質、善良を云ふ。人によりては之に「唯一なること、人格的なること」の二を加へてゐる。凡て是等は理智によりて發見し得られるものだ。Diderot が「凡ての天啓的宗教は自然宗教の異端なり」と云ふた其自然宗教とは上述の意味での夫れなのだ。

然るにかくの如き意味の自然宗教としては古來嘗て眞に存した事がない。かの普遍文法と同様、哲學者腦中の産物に過ぎぬ。が今先づかゝる空想産物を普遍的原初的天啓と見て其宗教を原始的或は自然的宗教と名けるとすれば、他に別に、墮落宗教或は偶像的宗教、と通常の天啓的宗教との二類があるから、都合三種となる譯だが、此の如きも探るに足らぬ。已に確定した宗教或は言語を殊更に特別の人間にのみ示すやうなことは、神様には似つかはしき仕業とは思へぬ。寧ろ神様は只其素質を人心の中に植へ置かれたので、夫れが後に開展したのだと見る方が穩當らしい。

蓋し不思議なものは大人よりも小供、樅木よりも團栗、動物よりも細胞である。彼等は後來開展の素質を藏して居る。

右の説は毫も史的根據を有せず全く探るに足らない分類法だが茲に、又國民的宗教と個人的宗教とに區分するのがある。其創立者の名は其信徒も知らず吾人にも知れないと云ふやうなのを國民的宗教、創立者の名、少くとも創立者と假定される人間の名を冠つてゐるのを個人的宗教として居る。例へば古のバラモン教、希臘人、羅馬人、チウトン人、スラーブ人、ケルト人等の宗教は國民的宗教で、摩西教、ゾロアスター教、佛教、孔教、老教、基督教、モハメッド教などは個人的宗教である。

此分類は便利な點はあるけれど、批評的精神に協つてゐない。成程バラモン教徒や希臘人や羅馬人に各其教祖、詳しく云へばインドラ、ツエウス、ジュピターの存在を教えてくれた最初の人、は誰であつたかと尋ねても決して答へ得まい。けれども斯學の研究者は此等のアールヤ族の諸宗教に個人の精神若しくは或學派が與へた感化の跡を認むる事は容易である。又翻つて個人的宗教に就て見るに其創立者自身は、何れも皆、我唱ふる所は新説にあらずと主張して居る。孔子は「述而不作」と云つて居るし、佛陀は「我は過去の七の師佛の一後繼に過ぎない」と云ふて居るし、耶穌は

「我は律法及預言者を破らんとて来りたるにあらざ、之を充さんが爲なり」と云つて
 るし、モハメッドさへも我教祖は Abraham 即アブラハムである。我は Mosim 人て猶太
 人でもなく基督教徒でもなく、唯 Moker 市に堂を建てたる者のみと唱へた。(スプレ
 ン
 ゲル氏マホメッド傳三卷四九頁、四八九頁、コーラン三章六節、Coran. III. 6 参照)そ
 れで、幾何が果して始祖の創唱に係れるか、古説なるか、はた弟子等の附加なるかを
 確定しやうとしたとて、それは到底不可能である。且つ如何なる宗教でも其眞の力
 と支へとを得るには必ず人心内に或地盤をつかまへなければならぬのであるが、
 かゝる地盤が一度び見出されると、個人的宗教は容易に發展して、宇宙的宗教とな
 る傾向がある。(キツェン氏ヒッパート講義集中「個人的宗教と宇宙的宗教」Hibbert
 Lectures by Kuen. 1882, 'national Rel. and, universal Rel.' 参照)

次に尙一つの分類法がある。是は多神的、二神的、一神的と分けるのである。成程、宗
 教の主要點は人間以上の有力物、即ち神に對する信仰如何に存するのであるから
 其宗教の奉ずる神の性質によりて分類するのは頗る當を得たる觀がある。そして、
 此分類は便利な所もある。けれども神の數だけを標準にするのはとかしい。之れて
 は神の數は同一でも他の點に於て非常に異なつてゐる宗教が同類に組み入れられ

る事になる。不都合な事だ。且つ、別に單一神教 Henotheism と無神教の二目を置かねば
 なるまい。單一神教と云ふのは、どんなものかと云ふと、之れは多神教と同様に數多
 の神を信じてはゐるのだけれど、禮拜及祈禱の際には、其中の一つの神だけが信者
 の心を占めて居て、其神は其余の神とは全く別なものとなつて居るのである。此類
 は古草陀詩人の宗教には著しく見える。神は數多あるけれど、一定の上下の位が付
 いてゐるのではなく、其中のどれでもない、唯其際の自然界の狀況や信者の渴仰如何に
 應じて、或は空の神 インドラ、或は火神 Agni、或は古の天涯の神 Varuna かどれか一つ
 の名を呼んで之を拜む。其時はその神を最上神として讚美する、とは云ふもの、他
 の神々を從屬の者又は除け者にすると、の心組でもないのである。かうゆふ風の崇
 拜を單一神教と云ふ。之は多神教の始まり口には常に見られる所、別に一つの目
 を立て、置く價のあるものだ。

又、無神教と云ふと、苟も宗教として無神など、は不可能の様に思はれるけれど、
 佛教の如きは其原始に於ては眞に無神教であつた。佛陀はエーダ諸神の存在を否
 定して居る。又、基督教に於ても其興起の直ぐ前に、高尚な道德を唱導した人々は諸神
 は唯の幽靈だとして居る。

次回の講演には、宗教の科學的分類は言語の分類と同様にせなければならぬ理由を、言語、宗教、及國民と此三者相互の關係から論證しようと思ふ。

第三講

(千八百七十年三月五日)

有史以前と迄は派らなくとも、少くとも人種時代 (Ethnic period) に於ては、人類の活動は普遍的のものであつた。個人的でも黨派的でも、はた國家的でもなかつた。而して國民即ち言語、言語の地圖即ち國民の地圖であつたと云はれてゐる。然れども宗教と國民との關係は言語と國民の關係よりも更に緊密な者である。

と唱導したのは Schelling 氏である。私は親しく氏の此講演を聞いて感服した事があつた。

蜜蜂は其奉ずる所の女王蜂が異なるので、従つて異なる群團ができてくると同じ様に、人間も異なる君王や政府の下に集まるから異なる國民を生ずるのでと云ふ説がある。けれど夫は間違つてゐる。丁度あべこべだ。同一政府の下にあるのは國民が同一だからだ。因果を顛倒してゐる。之れは、爲政者の野心などの爲めに國亂が起つて國民の統一が阻害せられる場合のあるのでもわかる。或は又血統の同一が國民を作るとする者もあるが、之もいかな。血液を同ふすると云ふ事は或は一家族、一部族、一人種を形成する事もあらう。けれども一つの國民を作成するに必須

なる、高潔なる道徳的感情——愛國心——を産み出すことはできない。

蓋し一國民を、作成する所のものは、宗教と言語とである。併し其力は宗教の方が優つて居る。北米の野蠻人等の言語は、もと同一言語から分れてきた方言 Dialect であることは明かに知り得られる。然るに彼等が併て一國民であつた形跡は認められぬ。之に反して、希臘人を見よ、イオリヤ語、ドリヤ語、イオニヤ語など各地々々其言語を異にし殆んど相通ぜざる程であつたのみならず、多くの共和國に分れ、或く支配者も異なつて居た時代でも、彼等は堂々たる一大希臘國民であつた。何が故であらうか、曰く彼等は皆同じくドドナ（Dana）の古ツエウス、即ち總希臘（Pan-Hellenic）のツエウスを信奉して居たからである。之が爲めに、彼等は、よしや國を異にし言語を異にし、政府を異にするとも理想的には皆同一躰のものであるとの感情が深く々々、彼等の胸中に横はつて居て不可拔ものがあつたからである。

また猶太人を見よ、彼等の言語はフェニキヤ人、モアバイト人 Moabite などのとは別ではあつたれど、希臘人の諸言語の相異なるほどには、互に異なつてゐたのではない。然るに猶太人は Yahveh 崇拜を固守してフェニキヤ人の神 Baal 及 Ashtoreth、モアバイト人の神 Chemosh を拜することを頑然として拒むだが爲めに、遂に此等三

人種の合同を見るに至らなかつた。Israel 國民ができたのは全く頑固なる Jehovahi（ヤーエー）に同じ崇拜の結果である。

シエリングの曰く、國民は其神話の確立したる時始めて成立す。神話の起原は國民固定以前にあらざるべからず。國語も亦然り。國語の確立は國民の確立と同時にありと、神話哲學講義一卷、一〇七頁、ハーゲルは哲學上シエリングの敬であるけれども、此事に關しては同一の結論に達して居る。曰く一國の基礎を作すものは神の觀念なりと（歴史哲學）

上述の説は獨り哲學者のみならず歴史家特に法律史家も又認めて居る。皮相から見ると法律が國民を團結するやうに思はれるけれど、其法律は其權威、勢力、生命を宗教から授かつてゐるのだ。Manu（Manu）の法典に付て、Nino（Nino）氏は、法律は神の定めたものであるとの思想は近代的であると云つてゐられる。それはそうであらうけれども、立法者は通常の人民よりも一層神様に親近なものであると云ふ考へは、何處の古傳説に於ても見られる。Diodorus Siculus（Diodorus Siculus）の云ふ所によれば、埃及人は其法律は Hermes 神が Nevis（Nevis）なる者に授けたのであると信じ、Crete 人は Minos 王は Zeus 神から其法律を教ふるられたと信じ、Lacedonia 人は Hyknus 是其法律を Apollo 神から授つた

のだと信じて居るとの事だ。又 Aryan 人は其立法者 Natimistes は善靈より教ふるれたとし、Getao 人は Namokis は女神 Hestia より教はつたとし、猶太人は摩西は Jho (エボバに同じ) から授かつたとして居る。

併し古代に於ては宗教は人類の生活及社會制度の上に多大の感化を與へ引離すべからざる干係をもつて居たとの説をメーソン氏程に力を入れて唱導した人はない。氏の云はれるには家族が單位で、其が集まつて氏性 (Clan) 即ち門をなし、氏性が集つて部族、部族集まつて國家をなす。家族は家族の窠 (Nest) によりて保たれ、氏性には氏性の窠、部族には部族の窠、國家には國家の窠があつて、各夫によりて保たれて居た。外國人は先づ窠に近づくことを許されて後始めて歸化することを許された。法律が宗教から離れた後でも、窠は第一の祭壇で、父は第一の長老で、而して妻子や奴隸も窠の周圍に集まつて居た。窠は即ち聖なる火を燃す處で、其家保護の女神であつた。後には夫れが國の女神ヘスチャとなつたのだ。現今に於ても婚姻の儀式などには往々古代の宗教的痕跡を存してゐるのがある。

今茲て一寸尋ねなければならぬ事がある。上に宗教々と云ふて居るのはどんな意味の宗教であらうかと尋ねて見ると、人間の心内に潜んでゐる一つの力とし

ての宗教ではない。記し得べき外面的發表としての宗教である。即ち若干の神の名や物質的意義を脱して精神的意義を有する様になつた若干の形容語——例へば物質的意義での力、光、清潔を言ひ表はして居たのが偉大、善良、神聖を意味するやうになつた語——さては、供儀、祭壇、祈禱、功德、罪惡、肉體、心靈など云ふ若干の専門語等を一括して之を指して宗教と云つてゐるのだ。此等の者は原始宗教の外面的骨格である。吾人若し宗教を單に是等の外面的發表と見る時は、宗教は只神聖なる一方言に過ぎないこととなる。すると、原始の宗教と原始の言語と如何に密着の干係があるかが知れる。宗教は殆んど全く言語に依屬して居ることがわかるであらう。之に依つて之を見れば宗教の分類は言語學上の分類と同一なる時始めて妥當なることが知れる。原始の言語に就て云ひ得られる程の事が原始の宗教に就ても云ひ得られるやうだ。⑤

暫らく言語の事に就て御話しやう。

先づ眼を歐洲及亞細亞とにつけて見渡して見ると、原始の言語は茫々として混沌不定の状態にありて恰も砂漠の如くである。其言語の砂漠の内に三箇のオーシスがある。此等の三中心の名をツラニヤ語、セム語、アールヤ語と云ふ。人類の言語は

此等の三中心(特に二中心)に於ては、夙に固定化して自然的ではなくなり、永久的となつた、換言すれば自然的言語が史的言語となつたのである。私は此集中化は政治及宗教よりの感化の結果だと主張する者である。今彼の三族の言語と宗教とは互に相伴ふて固定化した事を證明しやう。

抑も支那語はツラニヤ語の第一の代表者であることは論がない。處て支那の宗教を見るに無彩色、非詩歌的、單綴音的とも名け得べき底のものである。其崇拜する所は空、太陽、電光、風、山川等を表示せる無数の離れくゞの靈である。此等の靈は相互に干係もなく、其間に統一もなく雜然として群居して居るのである。文之の傍に死者の靈としての祖先崇拜がある。祖先の靈は人事を豫知し、在世の人間の行の善惡に應じて吉凶禍福を引き起すとせられて居る。要するに古代支那宗教の特質眞髓は人間及自然の二種の靈魂崇拜であつて、現今寸も尙行はれて居る。但し上層社會には半宗教的半哲學的の二元論的信仰も存在して居る。所謂二元とは哲學上には形式と實質倫理上には善惡、宗教及神話上には天地と名けられて居る。さて支那の古代宗教を知るには孔子の著書によるの外はない。然るに彼は新説を唱へたのではない。古教の説述者に過ぎないと自ら云つて居る。曰く傳ふるのみ、新しく作る

にあらずと又曰く古を信す、故に之を愛すと、レッゲ氏孔子傳九六頁 Legge, 'Life of Confucius' ショット氏支那文學七頁 Schott, 'Chinesische Literatur' 参照)

次にセム族を見る。バビロン人、フェニキヤ人、及カルダゴ人の宗教は何れも多神教で猶太教、基督教及回教は一神教であるが、夫れ等盡くに通同の若干の神名がある。其等の名はよく彼等の宗教の特徴を示して居る。勿論、其言語に於て、其文學に於て、其開化に於て、其時代に於て、かほど迄に相異なる諸種族を包括して、一言の下に其特質を云ふことは頗る至難である。が試みに強めて之を云はゞ、歴史に於ける神の信仰、精しく云へば神は自然力を支配するものなるが故に之を崇拜するのでなく、個人、種族、國民等の運命を左右する者なるが故に之を崇拜することである。セム族の諸族の名は大抵道德的性質を表はした者である。例へば剛強なる者、高く揚れる者、主、王等、而して何れも確固たる戲曲的個性を持つては居ない。夫故に容易に相合同する傾きがあつて、單一神教から一神教へ移るのに苦勞がない。殊に其奉せられる場所は單調なる大砂漠であるから、かゝる傾向は最も生し易かつた。此他尙一つの特徴とも云ふべきは、セムの宗教は女性を容れざる事、若し女神ありとせは單に、太古の無性の神の能働力の表示に外ならぬ事である。但し之れは凡ての神

名に付て然りと云へない、若干の例外はある。セムの宗教は何れも殆んど本能的に唯一神のなりと云ふた *Rehan* 氏の説にも制限はいるが私の説も夫位の程度の制限はいる。

最後に、アールヤ族を見ると、印度の谷や獨逸の森で拜まれて居た神名は何れも自然力の表示である。が決して天然崇拜ではない。短く云つて仕まへば、自然に於ける神の崇拜である。精しく云へば人心の奥底に潜める者としての神でなく、自然界でよ美装の後に現はるゝ者としての神を崇拜するのである。且つアールヤの諸神は何れも確固たる個性を具へて居るのが其特徴である。故に一神教へ移るには劇しき抗争が起る。偶像破壊騒動が但しは哲學上の失望か、何れかなしには濟まなかつた。

以上三族の宗教は其言語と同じく人類の運命を定めた所の史的事實である。吾人は自ら吾人の言語、思想、宗教に於て現に之を感じつゝあるのである。

然れども、此等の三大先驅者が後に見残したる混沌は全然の混沌のまゝではなかつた。言語の本流は此等三大支流を分れ出てしめたる後も尙ほ引續き進行した。本家の聖燭は、此等三祭壇に點火した後も、全くは滅盡しなかつた。烟や灰に埋もれ

はしても微かながらに薫つて居る。世界何處に行くも宗教と言語との存せざる所はない。只夫等は自然的野生的發育をして居るのみで、歴史を有つて居ない。又歴史を残してもゐない。故に彼の三者と等しなみに科學的處理を施す譯にゆかないばかりである。

然るに此處に疑問がある。何故に此等三個以外、寧ろ二個以外と云ふべし、何となれば支那語が南北兩ツラニヤ語の中心であること、精しく云へば、原始の混沌言語は北方には *Altkyris* 語、蒙古語、*Fen* 語と分れ、南方には *Taio* 語、*Bhotiya* 語、*Tamilia* 語と分れたが其最初に固定したのは支那語であると云ふ事は尙未だ證明された譯ではないから其證據が出る迄はツラニヤ族は嚴密には一つの族とは云はれぬのである。に於ては固定化がなかつたの乎と怪しむ人があらう。が其理由は簡單である。曰く此等の三は言語發達の例外に屬するもので、決して常例にはあらず、否あるべからず、人間の言語が其野生的盛衰の状態を離るゝことはあり得べし、離れざるべからざるにあらず、其可能はあり、必然的にはあらず、若しもセム、アールヤ、ツラニヤ族の祖先等が純平たる自發的(偶然的)作用を以て固定化を行はざりしならば凡ての言語は蜂蟻的、唯一時一代の需用に應じて盛衰起滅し恰も水上の氷片の如く

てあらう。若し然かりしならば言語の概念は今日の吾人の持てる夫れとは甚だ異なるものであらう。然るに今例外から作り出された概念を、自他にあてはめて見て、何故に、他も又かくの如くならざるやと怪む、是は恰も凡ての動物が家畜化されてないのを見て怪しんだり、庭園内のアチモチの花を見て居た眼で、野や谷に満てる野生のアチモチの異様なるに驚くと同様だ。

ツラニヤ族に於ては原始の集中化は他の二族に於けるが如くに強固ではなかつたから其諸部の間には、ヘブリツ語、アラビヤ語、希臘語及梵語間に存する如き緊密なる関係を見出し得ぬけれども夫等の間には、截在的の一致と大跡の構造上の類似があるから、太古には集中化があつたと假定せなければならぬ。北方ツラニヤ語即ち、匈奴語、Lapponia 語、エストニヤ語、フィン語には一致點が十分ある。南方のは夫れ程の證據は少ない。少ないは少ないが、夫れでも原始の同一を立するには足る。南北兩ツラニヤ語を遡れば支那語に歸一する。近頃 *Edkins* 氏は、支那語は滿洲語蒙古語の根元なると同時にシヤム語、西藏語の夫れでもあると證明した。

Musea 氏は、ツラニヤ語に於ける干係は他の二語に於ける夫れと同一には論ずべからずと云ふて、私の説に反對せられたけれども、進化説はダーウインが再説し

てから以來、自然科学にも言語學にも適用されて居る。全人類には共通の祖先があると假定しても不都合はない。何ぞ況んや、ツラニヤ語にも他族のと同じ様の關係が存して居ると假定したとて不可あらんや。

さて、今亞細亞を去りてアフリカを見やう。アフリカの言語にも一定の集中がある。近時の比較研究によると、赤道から *Kesikama* 迄の間の言語 (*Kafr*, *Setchana*, *Danna*, *Oyherero*, *Angolo*, *Kongo*, *Kinsaheli* 等の諸語) は正式の *Bantu* 語に於て集中して居る。(*Bleek* 氏南アフリカ語の比較文法) 二頁及「ブシユマン語の研究報告」参照) 此等のパンツィ或はカフアイ語の一群の北方には *Berber* 語と *Galla* 語とがある。是はセム語の一部的固定である。其南方にはホットテントツツ及 *Bushman* の二方語がける丈だ。 *Dr. Hahn* 博士によると、此二方語は密着なる關係を有つてゐる。そうだが兎に角、此等の南方語と *Nodia* 語と埃及語との間には眞の類縁があるのであらうか。此等は元は同一であつたのにカフアイ族侵入の爲めに分裂したのであらうか。は今後の研究問題であるが、要するに古埃及の言語及宗教は古アハルヤ及セムの夫等とは獨立に、ナイル河地方に於て集中化したものである事は慥である。

アフリカの言語の原始的姿形は大體ながら推知し得られるけれども、アフリカの

宗教の盛衰に關しては殆んど全く消息を缺いてゐる。殊に、回教と基督教の進入の爲めに、大抵の所では、古しの諸神の遺跡が破壊されてしまつた。近頃は傳導師や旅行家が *Nubia* や *Hottentott* の宗教に關する記述を出して居るが、其多くは極めて近時の信仰に關する報告で、而かも嘲笑的に書いてあつて、眞面目な態度のは稀である。殊に、宗教の起源は呪物崇拜にありといふ説が彼等の先入見となつて、彼等の眼を盲にしたと見えて、呪物崇拜以外の信仰に關しては何事をも記して居ないのが多い遺憾な事だ。

亞弗利加の宗教の中で、文書の徵すべきものを有て居るのは、只埃及の夫があるのみだ。埃及の宗教は羅馬人や希臘人にも吾人にも久しく謎であつたが、近頃は研究が大に進んだ。一見した所では、埃及の宗教程混雜紛糾を極めてゐるのではない。一方には賤劣なる動物崇拜がある。かと思つると、同時に他方には高尙な神秘的思想がある。かゝる奇異なる對照は、最近の研究も尙未だ十分に説明し盡すことができない。けれども *M. Le Page Renouf* 氏の *Hibbert* 講演集を讀むと、埃及の宗教にも、アールヤの夫れと同様に、宗教思想の一定の發展があり、歷程があることを感せずには居られな。

埃及の宗教は初發から、只の動物崇拜であつたのではない。動物崇拜は埃及宗教の衰頹期に起つたので、神話中の象徴から導き出したのだ。元來は埃及の神話はアールヤの夫れと同じく、宇宙の法則秩序、日や月の出沒等の如きを基礎にして居たのだ。埃及語の *Maat* は梵語の *Ṛita* と同様に、元とは感覺的の順序の意味であつたのだ。が後には道德的秩序の意味になつて居る。埃及の神話は、大抵太陽を元としてあつたらしい。併し、其中の諸の自然力以外に、一大力者——全宇宙の物界並に道德界を支配し、各個體の運命を左右する——をも甚だ早くから認めて居る。後世になつては、死者も崇拜された。之れは死は不朽なる新生命の始めと云ふ考からきてゐるのだ。さなさに言語の疾病なる神話は、埃及に於ては藝術の發達の爲めに膨脹せられ敷衍せられて、奇益、奇怪、益、怪となつた。埃及の最初の神には堂はなかつた。印度に於て *Para-Brahma* 至高の梵には社がなかつたのと同じである。のみならず、其像が「右に刻された事もなく、書かれた事もなく、其住所は未知で、供犠もなく、從者もなかつた」のである。然るに後世になつて、かゝる事は一切忘れられて、*Memphis*, *Heliopolis*, *Abydos*, *Thebes*, 即 *Dendra* など國中至る所に堂が立てられ、祈禱、供犠も盛に行はれた。けれども「神は一體」との思想は印度に於けると同じく始終一貫して保存されて居た。自

段々と明かになつてきてゐる。

宗教學には言語學に比すれば一段の利徳之を利徳と云ひ得べくんばがある。何かと云ふと言語學上の斷案は、材料が不十分な爲めに下し難いやうな場合には、宗教の方では、そんな材料は不充分處でなく全然皆無であるから、どんな勝手な假定説でも立て得られることである。原始語が轉訛ながら、尙微かに行はれて居る所でも、古への堂宇は既に全く湮滅去りて跡を留めず、古き神名も聞き得られぬのである。

とは云ふものゝ、宗教學者は言語學の研究法に倣つて、先づ指をアールヤ及セムの宗教の比較研究に染むるが最もよいやうである。アールヤ語の中にもセム語の中にも、主要なる諸神の名、祈禱、供儀、祭壇、精靈、儀式、信仰等宗教の要素を表示する語は随分多く保存せられて居る。此等の者の説明を先づアールヤ語の方でやつて見て、夫れが成功したら、次に同一の方法でセム語の方でもやつて見るならば、必ず同一の干係が其何れの中にも存して居ることを發見するであらう。セムがすんだら同じやうに又ツラニヤをも研究する。

そこで先づアールヤより始める事にする。佛蘭西、以太利、西班牙語等所謂羅馬方

言が、こゝろいくつにも分裂しない時分は唯一つであつた。それは羅匈語である。幸にして、羅匈は吾人に傳はつて居る併しよし之が傳つて居なかつたにしても吾人はかの諸國語に通同に保存せられて居る多くの語から推究して行くなれば、分裂以前の文化の狀況を察知することが出来る。例へば夫れ等の諸國語の中に、「王」堂宇「宮殿」船「馬車」大道「橋梁」など云ふやうな高等なる文化生活に屬する物件を表はせる語が共通に保存せられて居るのを見れば、分裂以前に於ける彼等の開化状態が知れる。之れと同様にして、希臘語、羅匈語、梵語、さてはスラヴ語、ケルト語、チウトン語等に「家」の原始語が共存して居ることから推究すると、彼等は其分裂以前、少くとも印度の Manu や希臘の Agamemnon より千年前に於て既に天幕住居の域を脱して居た事が分る。又「王」なる語も共存して居るから、當時既に君王政治やうのものが成立して居た事が知れる。

1. 家は梵語 'Dama', 希臘語 'basos', 羅匈語 'dom', Gothic 語 'timpan', Slav. 語 'dom'

2. 王は梵語 'Raj', rājan, 羅匈語 'rex', Gothic. 'reiks', 愛爾 'ríogh'

余の事はさて置き、至上神の名を調べて見るに、印度、以太利、希臘、獨逸等諸語に通同なのがある。夫れは Dyans, Zeus, Jovis, Ti (國名順) である。此等の名は私の眼には只

の名と斗り見ゆるのではない、史的事實として、それがあり／＼と現するのである。此等の名を誦すると、ホーマーやエータより數千年以前に於て、唯一の不可知の實在が、其類語中の最美最良最高の名——光及空——の下に拜まれつゝあつた事を目睹するやうな感じが、私にはするのである。

云ふ事なかれ、是只の自然崇拜、偶像崇拜に過ぎざりし者にあらずやと、ヂャウスとは單に青空、若しくは青空の人格化でない、夫れよりもより多くを意味して居る。韋陀ては *Dyans Pitar* 希臘ては *Zeusares* 羅甸ては *Jupiter* と云つて同じく共に天父の意味である。嗚呼此語は私の眼には最古の詩集である、人間最古の祈禱である。ポリシヤ語や *Malanesia* 語の中に神に向つての祈禱の語のあるのを見る時、私は嗚呼是こそ最初にエルサレムに於て唱出されたものであるかと感しずには居らなないのであるが、此處でも夫れと同様の思をなすのである。ホーマーや *Ovid* によりて、口喧カクレンき夫或は不貞の戀男のやうに思ひましく描きなされて居るけれど此 *Jupiter* なる名の背後には神聖なる記録が潜ひて居るのである。

抑もアールヤ族が四方に分散して以來、茲に星霜を経ること幾千年、其間に學術は興起し技藝は進歩したけれども、無限者を稱するの最好最愛なる名は最古の祖

先が用ゐて居た者より外のものを發明することはできなかつた。天にのみす我等の父とより外の言葉は出て來なかつたのである。

次にセムの方を窺ふて見るに、或は、彼等諸族の言語は互に類似する事餘りに甚しいから研究の興味が無いなど、云ふ人があるけれど、必しもそうではない。ブンゼン氏、基教及人類三卷二四六頁參照、私はルナン氏が其最初の企てを成功して、*Prich* 語、シリヤ語、アラビヤ語、*Ethiopia* 語等は申すに及ばず古代の *Poenia* 語、バビロン語、*Nineveh* 語等をも網羅せる比較文法を出されんことを望むのである。ホップ氏のアールヤ比較文法と好き對であらう。

セム諸族に於ける本來の同一語と、後に他から採り入れたの例へはアラビヤ人がアラメヤ語からとを區別するに際しては、セム諸族は久しき間相接觸交通してゐたから、随分困難を感ずるであらう。けれども、*Phonetic* 學上の法則から推していつたなら不可能ではあるまい。

若しも彼等諸族の語の中に、父、母、息子、娘などのみならず、養父、養母、養兄弟等いふ名稱が共存して居る處から、彼等の社會制度の發達を推考するならば、モーゼの立法以前に於て、彼等は已に或文化程度に達して居た事が知れる。なんか一寸面白

が、そんな事は却設置、本題の宗教の事を研究して見ると、南方即ちアラビヤ、北方即ちアラメヤ、中部即ちヘブリウの諸國語に共通の神名がある。夫れから推考すると、彼等が分派以前、即ちアブラハムが只エホバ神のみを拜みて居り、フェニキヤては専ら Baal 神、バビロンては専ら El 神が拜まれてるやうな事になる前には、諸族皆同一の神を拜してゐたのらしい。今夫等の神名を調べるならば、古代セム族共通の宗教思想を知ることができやう。

彼等の神名は、アールヤの夫とは違つて、大抵力ある者とか畏敬すべき者とか、高く揚れる者とか王とか主とかいふやうな意味を持つて居る。一寸見ると是等は尊稱に過ぎないやうな氣がする。尊稱と見れば、彼此同一のがあつたとて不思議はない。處が同一の名稱が固有名詞としてシリヤ、バビロン、カルタゴ、Palestine 等の神名に使つてある。然らば此處に出來得べき説明は唯一つあるのみ。即ち神の名が確定した一時期があつたので、そうして、夫れは彼等各自の宗教及言語の確立以前にあつたといふ事である。

セム族の神名の最も古いもの、一つに El と云ふのがある。強さと云ふ意味の語

である。バビロンの刻文に El (神) 又は Bab-ilim の門或は堂の義と云ふ語があるが、其中に含まれて居る。ヘブリウでは此語は「強さ」或は「英雄の意味に用ゐられ、又神の義にもなつてゐる。例へば Beth-el (神の家)、He-el (強者或は神) の如く冠詞付きては舊約書には Jehovah (真神) に使つてある。併し El 文けては異國人の神にも使つてある。

此エル神はフェニキヤ人が Byblus 拜んで居たもので、天及地の子と稱せられた。Dun-zen 氏の埃及參照傳へ云ふ彼は Elim の孫で、エリウムは野獸に殺され、次て其子が立つたが、廢せられ、自分の子のエルに殺された。Philo 氏はエルは希臘の Kronos と同一の者で、Saturn 星の主神だとして居る。Himyaria の刻文中にもエルの名は見えるし、又最近時、アラビヤの固有名詞の中にもあることが發見された。但し神としてのエルの名はアラビヤでは遠の昔亡びてしまつたのだ。

フィロはエルは Elohim (Eloah の複数) に關係があるとして居る。其説に、エルが父と戰つた時エルの軍勢は Eloeim と稱せられた。希臘でクロノスの軍勢を Kronoi と云ふが如し。是はホンの臆説である。Eusebius 教授も之に反對して居られる。

Eloah はアラビヤ語の Ilah (神) と同語で、單數ではエルと同語として聖書の中に使つてある。複數では普通の諸神又は偽神の意味となる。但し舊約書で真神に此名が

使つてある場合は複數の形で、意味は單數なのである。アラビヤ語の *Ilah* は冠詞なしでは普通の神の義、冠詞が付くと、即ち *il-Ilah* 或 *il-ilah* となる。モハメットの神の名になつてゐる。モーゼ及アブラハムの神にも使つてある。

Elouh 或は *Ilah* の起原に關しては本國アラビヤ人間にも又歐洲人間にも異説がある。*Kamus* は曰く之に關しては異説二十ありと、*Mohamed El Fasi* は曰く三十ありと、*フライシエル氏* は曰く(強者)の根語は *si* (太い、濃から、強う)である。*Elouh* 或は *Ilah* は抽象名詞で恐怖の義、其根語は *alah* (激される、混雜される、困まらされる)である。*Elouh* は恐怖の義より一轉して恐怖若しくは畏敬の對象物を意味する事となり遂に神の名となつたのぢやと云つてゐられる。是説は「恐怖」てゝ意味をもてる *Paclad* なる語が舊約書では神と云ふ意味に使つてあるのと同じ寸法で行くのだ。創世紀三十一章、四二節、「我父の神、アブラハムの神、及びイザヤの恐れ我と共にゐますにあらずは」又五章五四節而して「ヤコブ、其父イザヤの恐れによりて誓へり」又アラメヤ語 *daclia* (恐怖)も神又は偶像の意味に用ゐられてゐる。梵語でも、梵天は「一大恐怖」と稱せられて居る(*Kathu-upanishad. VI. 2 Mohad bhayam vajram udyatam yah*)。

Naldeke 教授は此根語は「前方に居る、率ゆる」を意味すとせらる。

Elouh 或は *Ilah* は女性では *Allat* となる。此はアラビヤの女神で其有名な堂が *Elil* にあつた。但し *Mekkah* の堂には劣つてたが、*モハメットの命令で壞されてしまつた*。併し此アラート崇拜は一地方に限りて行はれてたのではない。ヘロドツスの書中に *Allat* とあるのは *Koran* 中の *Allat* と同一なることは疑はれなす。

セム族の神で有名なものには、エルの外に *Baal* 或は *Bel* と云ふのがある。此神を猶太人は異國神と思つて居なかつた。豫言者等は烈しく之に反抗したに拘はらず、エルサレムの林中で此神は拜まれて居たのである。兎も角、内國神同様、少くも、セム族の神として扱はれて居たので、彼等の祖先が洪水以前に奉事して居た諸神中の高位を占めて居たものである。パール神は初は一つであつたが諸方で祭られた結果として幾多の分身が出来た *Baal-Baur*, *Baal-Isidon*, *Baal-fars* など云ふ神は元は *Hyre* のパール *Sidon* の夫れ、*Farsus* の夫れであつたのだ。Malta 島で發見された二つの *Candeh-bra* には *ニキヤ* 人が *Melkarth* 即ち「チレのパール」に献げたる文が存して居る。パール神は *Shechem* では *Baal-berith* (條約の神)となり、*Echron* では *Baal-zabub* (蠅の主)として *Philistine* 人に拜せられ、*モアビト* 人及猶太人は *Baal-peor* と呼んで居た。*ニキヤ* の貨幣には *Baal-shamaym* とあり、*Palmyrenin* の刻文には *Baal-shamen* (天のパール)

とある。バールンシヤメーンはフィロ氏の所謂 Beel-samen^{ベールサムン}で之を彼は太陽の事だとして居る。曰く、暑さ厳しくなる時は古のフェニキヤ人は手を太陽の方に擧ぐるを習とせり。是彼等は太陽を天の主なる唯一の神なりと考へたればなり。彼等は之を Beel-samen^{ベールサムン}と呼び。即ち是希臘のツエウスなりと又 Baalim^{バルイム}多くのバール、或は諸神てふ語も目に入ることがある。

- 1、士師記 八章三三、九章四節
- 2、列王 一章二、三、及十六節
- 3、民数記 二十五章、三章

Baal^{バル}或は Ailim^{アイルム}には其女神 Astarte^{アスターテ}がある如く、Baalにも其女神 Baalt^{バルト}がある(アツシリヤ語では Bala^{バラ}フェニキヤ語では Baalim^{バルイム})セム族の女神の觀念は最初に於てはアール人の夫れとは同じでなかつた。アラートやバールトは最初は單に、アラート神やバール神の勢力、或は活動、若しくは集合力の表示に過ぎないものであつたので、決して一個の別の神ではなかつたのだ。少くとも「妻」を意味してたのではないらしい。それはカルタゴの多くの刻文には女神 Tanit^{タンイト}を「バールの面」と呼んでゐる。Eshumma^{エシュムマ}の刻文には Sidon^{シドン}の Astarte^{アスターテ}はバールの名なりとしてあるのて分る。De Vogüé^{ドヴォグエ}氏

Journal asiatique 1867. p. 138[亞細亞雜誌]參照併し此抽象的觀念は後時を経て、女性の力及妻の觀念に變つてしまつた。

此他の女神に Asherah^{アシェラ}或は Astarteh^{アスターテ}(複數)と云ふのがある。其男神は Ashtar^{アシュタル}である。此名はバビロンの刻文では Ishar^{イシャル}となつて居る。いつても女性の形で、天及地の皇后といふ意味である。Palmirene^{パルミレネ}の刻文及モアビトの石牌にも此名が見えて居る。此神は其の女性的の方面が秀でて著しくなり、カルタゴ人、フェニキヤ人、フィリスチン人のみならず猶太人にも拜まれた。列王記、十一章、創世紀一四ノ五、シリヤ語では Athara-hah^{アタラハハ}と云ふ Strabo^{ストラボ}氏の所謂 Astartis^{アスターテ}である。フェニキヤ人は Astarte^{アスターテ}と云ふ。此フェニキヤ名で此神は希臘、及羅馬へ傳はつた。キエーテン氏(イスラエルの宗教一卷九〇頁)によれば、元とは月の女神で、其崇拜の墮落しない間は、處女力の表示であつたのだ。Jeremia^{ジェレミア}が「天の皇后」と云ふたのは恐らくアスタルテが若しくはバールチヌを指したのであらう。エレミヤの書七の一八(何となれば南アラビヤでも此神は拜まれてたし、又 Sana^{サナ}(ヒミヤリヤ王國の古の首都)には Venus^{ヴェニス}の祠があつたし) Baal Ghnun^{バルグヌン}(Dan)又ヒミヤリヤの刻文には Athar^{アタル}てふ名が(時としては男性で動詞が先だつてゐる)見えてゐるから。

此他、有史以前の神名と覺しき者がある。ヘブリウ語の *Molech* 即是である。元とは王の義であつた。此神はかのカルタゴや、*Rhode* や *Crete* 島のみてなくヒンノムの谷でも拜まれてた所の *Molech* と云ふ神と同じ者である。Ammonite 人の神 *Milcom* (其堂は *Olivet* 山に在つた。列王記二二ノ一三)も其轉訛である。又 *Sepharvite* が自分の子を焼いて献したと云ふ *Adram Melech* 及 *Anammelech* 神等は何れも此神の地方的分身である。(列王記一七ノ三一)

Adonai はヘブリウ語では我主の義、舊約書ではエホワー神に限つて使つてある。此名はフェニキアでは最上神の名であるが、後、幾多の變遷を経て、かの *Adonis—Aphrodite* に愛着され、アレス神の猪に殺されるアドニスとなり變つたのである。

Elyon はヘブリウ語では最高者の義、舊約書では神の一賓辭になつて居り、又エホバ神の一名ともなつて居る。E *Elyon* の僧(最高者の僧)は *Melchizedek* と名けられてゐる。エリヨーンの名はヘブリウに限らず、フェニキアの開闢譯には *Elum* (最高神、天父)となつて出て居る。Oppert 博士は此エリウムは *Damascus* の書にある *Iinus* と同じものとして居られる。

Shaddai (烈しき者、力ある者)は聖書の中では大抵は單獨に、時としては E と結

合して出て居る。シリヤ語で惡鬼の意味 (*Tamud* の中でも同じ意味)の *Shed* イム語、及舊約書の中に僞神又は偶像の義に用ゐてある *Shedim* (複數)てふ語等と何れも同じ根語から來て居る。Vogel 氏は埃及の書文字の *Set* 又は *Set* も同一名として居られる。牧者等が傳へた神の名の中にもある。但し *Lepsius* 氏は此説には反對で、シャツグイは古のフェニキヤ神の一つだと云ふ。

以上の神名はセム族分裂以前にあつたものであつて、モアビト人のヘモニヤ、アムモニト人のミルコンや、シドン人のアシユタロトなどは後に至りて地方に生じたものである。(列王十一ノ五及七、士師記十一ノ二三及二四)

Jehovah 或は *Jahveh* (元はかく發音したのらしい)は猶太人固有の神名であるとは一般に思はれてゐるのであるが、*Lydus* 氏の有名な文中には *IAO* は *Chaldean* 人の神名なりとある。IAO は *Jahveh* 又は *Jehovah* 又は *Jah* (*Hallel-jah* の内にある如き)と同一であるとは假定したならば、リズスの所謂カルデヤ人とは單に猶太人と云ふ程の意味であらうか。如何であらう。アッシリヤの刻文に *Jahm* てふ神名があるのから考へると、然りと答へる譯にはゆかぬ。Sir Henry Rawlinson 氏は此の *Jahm* は眞にアッシリヤ二名なるや疑はし。恐らくはアッシリヤへ這入り込むだシリ

ヤ名であらうと云はれたが Schunder 氏等は之に反對して、ヤーエーはアッシリヤの古神の一であるのみならず、Acadim 起原のものだと云ふ。Delitsch 氏の説に曰、「¹」の音はアツカチャ語では「神及至高神を意味して居る例へば、²」(ヘヴリウ語 ³)に於て知るべし。此「¹」はアッシリヤ語では ⁴ と發音する。但しアッシリヤの刻文で ⁵ てふ語が神の名に使つてあるのは、未だ從來發見された刻文の中にはないが夫れは偶然なのであらう。

私は敢て此等斯學の大家と議論しやうとするのでない。唯今日では吾人の研究がバビロンやアッシリヤの文書を完全に讀解する迄に進んで居らぬのを遺憾に思ふのである。勿論 Behistun 刻文のバビロン譯が出版された以來、大進歩はあつたに違ひないけれども、未だ確定説を立て得る程に十分ではない。この事はヘルシヤの楔形文字 (Cuneiform) 翻譯の歴史に徴すれば明である。況んや Sumeria 語に至りては其研究尙甚だ幼稚なるをや。然るにかくの如き危き材料を用ゐて、古代比較宗敎史を著されたるチーレ氏等の勇氣には嘆服しなければならぬけれども又 M. Guyard 君の警告にも注意しなければならぬ。君は言ふ、⁶ Moulge, Silik-moulou-chu, なる語は Sumeria 及アツカチャの神名とせられてゐるが、之は Bel 及 Mardak の

名を誤り解したものだ。ギエ君自身の言或は、信憑するに足らぬかも知れぬけれども君は Pinches 氏の言を引用して居る。ピ氏が此學に於ける造詣の深さや、典據として價值あるべきは疑はれない。ピ氏の曰く、アツカチャ諸王の名に Hamunabi 又は Burnurias などあるが實は Kuteropastu Kidin-belmatati とすべしだ。

然るにキウチン氏は、エホヱー或はヤーエーはアツカチャ起原のものでないとして云はれるには、紀元前九百年頃即ち Meshu の刻文の時代頃では Javveh なる語は四字形で用ゐられて居た。即ち Ya(hv)eh である。こんな形は Iau からは出てくることはできぬ。否却りて Iau こそ Ya(hv)eh から出たのであらう。第八世紀頃一般に行はれて居た説では、ヤーエーは動詞のあるから出た。即ちヤーエーとは彼はある、存在するの義で、神の常住て信頼すべき者なることを言表はしたのだとして居る。但し此説の正否は保證の限りにあらずと。而して氏は尙進んで、イスラエルの神の名を、エル、シャツダイの代りにヤーエーと呼んだのはモーゼに始まるとして居られるが、私は何故氏が此語の已にモーゼの母の名 Jochebed (ヤーエーを己が幸榮とする女)の中に含まれてることを云はれなかつたかと怪しむのである。氏はヤーエーを「存在せる者」の義か或は「他神は存在せざるも、獨り自ら存在せる者」の

義かを定めずに置き、唯其根語を因果的の意味に解して、ヤーエーとは「生命を與ふる者」、萬物を存在せしむる所以の者即ち「創造者」と解し去らんとして居られる。かくの如くに見ることができらば、ヤーエーは古エーダの *Asura* の再現と見做すことができる。アスラとは「生命の授與者の義」、*Asu* とは「息する、存在する」の義、そこで *Asura* は活ける又活かしむる神、即ち *Avesta* の *Ahura* となる。するとアールヤ族とセム族は有史以前に、*Iran* の地に於て接觸したと云ふ史的證據は未だ擧がらないけれども、當時此二族が同一の思想及言語を持つて居たことは知れる。之を要するに、ヤーエーなる名はセム族共有の神名中の一とすべきか、除くべきかは未だ確定すべからざるにもせよ、兎に角、セム族は其分裂以前に於ては同一の言語と宗教を持つて居つた事実は動かぬのである。アールヤ族が皆同一の名で天の父を呼んで居つた時代のあつたと同様に、セム族もバビロン人がバビロンに、フエニキヤ人がシドン及チレに、猶太人が *Mesopotamia* 若しくはエルサレムに夫々住み込むやうになる前には何れも皆エル、即ち「天の強者」を拜んで居たことは確である。

終りに、吾人はツラニヤ族に付て觀察しやう。 *Finn*, *Lapps*, *Samojedes*, *Turks*, *Mongols*

gol 及 *Tungusians* 等の諸種族の言語が太古に於て固定的中心化をなした事は諸學者の許して居る所であるが、*Famulic*, *Lohitic*, *Gangetic*, *Malic*, *Taic* 諸種族の言語にも同様の中心化があつたと云ふ事と、及此等南北兩ツラニア語の最古の中心は支那語であると云ふ事との此二事は只假定であつて未だ確説とは見られぬのである。併し若し此等諸語の中に共通の神名を發見し得たならば、此假定説は大に其確度を増すであらう。宗教に就て云ふも同様である。

若し支那の宗教をツラニヤ族の夫れの最古の代表者としたならば、他のツラニヤ族例へば滿洲人、蒙古人、韃靼人若しくはフィン人等の神話中に同一神名があるかと云ふ疑問が出て来る。然るにツラニヤ語は其性質が甚變化的轉移的であるし、且つ支那に於ける最初の固定と、後に他種族に於て生じた固定との間に非常なる長年所が横はつてゐるからして、どうもかのアールヤのヂャウス、ピタルやセムのエルに比べるべきものが傳はつてありそうには思へない。然るに幾等かの指示はある。甚だ僅少の指示ではあるが、だといつて夫れを危むて遠慮してゐた日には何れの時か新發見ができてきやうぞ。安心な陸地へ達する迄には折々は水の中へも飛込まねばならぬ。堂へ上るには先づ第一段を踏まねばならぬ。私の説はホンの臆説で

あるけれども敢て愧より始めるのである。

支那古代の一般信仰は諸靈、諸力或は寧ろ諸名崇拜である。自然力は人生の吉凶を引起すものと考へて、其名を崇拜するのである。天空、日月、星、地、山川各自に皆靈がある。又死者にも靈があるが、夫れは今暫く云はぬ。

又支那の上流社會には一種の躰系を備へた説が行はれて居る。萬物には相反せる二力が貫いて居る。一は能働的で男性で、他は受働的で女性であつて、各物の中に、後に必ず存ずとしてある。又屢天と地とに配してある。

併し天の靈は地の夫れよりも上位を占めて居る。天地は萬物の母とは只書經丈けにあるので、古詩には天のみが父母であるとしてある。此天の靈の名を支那語で「*Heaven*」と呼ぶ。天空の義で、丁度、ジュピター若しくはアラールとでもありそな所にはいつも、きつと此字にぶつゝかる。Kanghoo 氏の帝國字典によれば、チエンは高きに居て下を御する大なる者とある。されば元は天空の義であつたのが段々と向上したのだ。アールヤ語の空の名が徑たのと同じ段階を徑て上つたのだ。天は大との集合で、一つの者、「比類なき者」「偉大なる者」「高き者」「揚れる者」としての天空である。或る支那の書に曰く、天空は一つのみ、豈多くの神あらやと、實にチエンの信仰は

支那宗教の骨髓である。又曰く、皇天燦たり、汝の趣く所に隨ふ。皇天燦たり、汝の遊ぶ所に到ると、天は萬物の祖である。上にある最高者である。陶師其器を作るが如く、諸物を作りたる者である」と云ひ、又天の命「天意」「天步」「照鑑」などの文字が見える。民の師たる聖人は天が送つたのである。孔子自らも自分は世の警戒者として天に使はれて居るものであると信じて居た。故に其危に際しては嘗て曰く、天我を知ると、此事は實に彼に取つては唯一の慰藉であつた。又孔子は天の靈を最高神と見て、他の一般人民の神即ち山川、風雨、死者の靈は劣位の者としてゐた。是はソクラテスが神話中の諸神に關してもつてゐた考へと同じである。孔子は嘗て如何にして鬼には仕ふべきかと問はれた時、未だ人に仕る能はず如何ぞ鬼に仕ふる事を得んと答へ又、或る時は「敬して遠けよ」と教えたのである。

さて、吾人は今、天の靈の信仰は果して、他のツラニヤ諸種族にも行はれて居るかを調査しなければならぬ。若し彼等諸種族の神名中に、最高神で空の意味の、見當るならば私の臆説は幾分か確度が増すであらう。併、夫れ丈けてはまだ臆説に止まつてゐるが、若し、夫れに同一の名の痕跡を認め得るやうなことがあつたらば、私の説はもはや臆説の域を超へて争ふべからざる事實となるであらう。

然るに支那以外のツラニヤ諸種族の古代史はさつぱり知れん、彼等の現時の狀態に關する報告も偏見的なものが多い。且つ彼等の古代の信仰の遺跡は佛教や回教や耶教の爲めに蹂躪されて殆んど湮滅に歸して居る。併し中央及北方亞細亞を抜跣した旅行家の中で最も信憑するに足ると思はれるのは *Ostren* 氏の書である。氏の報告によると、ツングイ、蒙古、韃靼、フィン人等の間には到る處に、自然の諸靈、死者の靈が崇拜されてゐるのみならず、夫等よりも高さ一つの有力者に向つての信仰も行はれて居る。此力者は或は「父」或は「古き者」創世者「護世者」天に常住せる者などと呼ばれて居る。

支那の史家で此類の事を記したのは重に匈奴と土耳其とに關したものである。彼等に據ると、匈奴は日月、天地、死者などの靈を拜し、其僧は *Shaman* と名づく、シャーマンは能く雲、風を呼び、雪、雨を降らすの力ありと云つてある。¹ *Byzantine* の史家 *Menander* 氏に據れば、氏の當時には土耳其人は火、水、地を拜し、又同時に、世界を造りたる一つの神をも信じ、駱駝、牡牛、羊の犠牲を献すとある。中世紀の旅行家 *Piano Carpini* 及 *Marcopolo* 等も亦、蒙古人は日、火、水を尊崇す、されど又一つの大なる力ある神を信じ之を *Natagai* (*Natigay*) 又は *Itoga* と呼ぶと云つてゐる。³ *カストレン* 氏は

具眼者であつて、凡常旅行家の見聞、解する能はざるものを見聞、解し得た人である。が氏の言に云ふ、ツングイ人は日、月、星、地、火を拜し又森、川、及若干の聖地の靈を拜す。但し此等と共に又、*Buga* と名くる最高神を信ず。と又曰くサモエト人は偶像及諸種の天然物を拜す、されど、又高さ神力を信仰せる事を常に告白しつゝあり。彼等は之を *Num* と呼ぶと。

¹ *Castren*, 'Vorlesungen über Finnische Mythologie' p. 36 (カストレン氏「フィン人の神話講義」)

² 「彼等は見るべき又見るべからざる凡ての物の作者、善惡の分配者たる一つの神を信ず、されど之を拜するに祈禱をも、讚歌をも又何等の奉事をも用ひず。但し皮製の若干の偶像あり、人面を模す。面の下方に乳房様のものあり、像は家の内外に置かる。家畜の護者にして又牛乳を豐滿に授くる者と信ず。又糊片にて作れる像あり、是も大に尊敬せらる。飲食毎に先づ其一部を割きて献す」
「*カニコボロー*」 *Yule* 氏出版 V. I. p. 249.

³ 「こは彼等の宗教の風習なり。彼等云ふ、天に最高神ありと、毎日香を焚きて之を拜し、心身の安康を祈る。されど他にナチグイと稱する神々あり。云ふ是れ地の神にして子供、家畜、穀類を護ると。大に之を尊敬し其像は各人の家必ずあり。皮と布片にて作る。又神の妻子の像をも同じ方法にて作る。妻神は左方に、兒神は前面に置かる。食事毎に肉の脂肪を取りて此等各神の口に塗る。次で薑汁を

戸外に瀆ぐ。之を爲し終れば、彼等は神は其眷族と共に食事に與れりと信ず」と(全五、一卷二四八頁)
 ユール氏は此等のナチグイはツングアス人の *Onkot Jurales* 人の *Negut* より出づとし、キロー氏は *Cathayans* 即ち支那人より來るとして居る。併しユール氏は之はキローが支那人と薩祖人とを混同してゐるのだと云ふ。

4、之れは即ち魯西亞の *Hogs* (神)にはあらずる乎。

Nim は又の名を *Juma* と云ふ。Finland の大神話に *Jumala* とあるのが即ち是である。有名なる此大神話は他のアルタイ種族の神話よりは完全に保存せられたものである。其他古の史詩も傳はつて居る。之は久しい間、口碑で傳はつて來たのが近時に於て誌録に付せられたものである。此詩の中ではジユマラは天空の神で種々豊なる物語がある。

ジユマラとは元來は天空の義で、カストレン氏の説の如く *Juma* (雷)と *Ma* (所)即ち雷の所、即ち天空の意味である。そこで最初には天空、次には天空の神となり、後には一般の神の意味となつた。此語は *Lapps, Estonians, Syrganes, Fehremissians, Vol-yaks* 人等の語中にも見えて居る。但し語形は聲音學上必要なる丈けの變化は免れぬ。が兎も角、此神の發生及變遷を觀察したならばアルタイ種族の宗教思想の一

斑を窺ひ得るであらう。カストレン氏が嘗てサモエド種族の一老婦人に向つて汝は祈禱を行ふやと問ふた時、老女が答に曰く、毎朝天幕を出づれば太陽に向ひ、叩頭して云ふ、汝の出る時我も亦床を離ると、又毎夕に於ても、汝の没する時我も亦臥して息ふと云ふと思ふに、此祈禱は恐らく彼女が神への奉仕の全部でがなあらう。此祈禱は我等が眼には如何にも氣の毒な憐れなつまらぬものゝやうに見える。けれども彼女に取りては決してそうではない。何となれば此老婦人をして少くとも一日に二度だけは、眼を地から天へ向けしむるものは此祈禱ではないか。之は彼女の生命を、高さ大なる生命と結び付けるものである。地上の俗生活に一點の神聖なる光明を授けるものである。夫故に彼女自らも己れを正しとして誇り顔にこんな事を云ふて居る。朝夕の祈をさへ行はぬ暴漢もある」と。

右の場合ではジユマラは太陽によりて代表されたる天空の神となつてゐるが場合によつては海の神ともなる。カストレン氏が或日、サモアの水夫と北極の海岸を遙道してゐた時、我に告げよ、ヌムは何處にやをはすと、すると聲に應じて、忽ち黒き遠き海を指して、彼處にをはすなり」と。

又史詩 *Kalevala* の中には、女主人公の *Poliina* が仕事をしつゝ、呼んで云ふには

地の諸靈を拜し之を *Pu-teng-i-li* と稱すとある。 *Hu* とは地であらう。そこで *teng-i* は *teng-i* に當る事になる。但し、土耳其では此語は夙に天或は神てふ意味を失つて、一般の神の義となつたのである。近世のヤクト語の *taugan* も之と同様の意義上の變化をして居る。此語は元は天空及神を意味してゐたのだが、現今シベリヤに居るヤクト人の耶蘇教徒は之を「聖者」の意味に用ゐて居る。又ヤクト人は野の馴鹿を神の馴鹿と稱へて居る。之れは荒野に住んで神以外には其保護者が無いと云ふ譯なので。

是に於てか、吾人は支那、蒙古、及土耳其に於ける同一の神名は管に其漠然たる意味と音韻との類似を有せるのみならず、其觀念の有機的發達が相一致してゐる事を知るのである。即ち何處に於ても先づ天空の意義を以て始まり、次て上りて、神の義となり、後下りて、諸神及諸靈の義となつて居る。此の如き變化は凡そ、神が天空の名の下に始めて認められた所では、いつも發見せられるのである。天空の神は神話的に分裂して數多の神となり、此等多くの神より遂に一般の神の觀念に到達するのである。かくの如く見來れば、佛蘭西語の *Divinite* と韋陀の *Dyaus* (天空)との干係が史的に説明し得る。即ち「字學的及聲音學的に説明し得られる」ヤクト語の *Taugan*

(聖者)と支那の天(天空)との關係も同様の譯である。

然し、若し只の意義と漠然たる音韻の類似ばかりから推定してもよいのならば、南北ツラニヤ間の比較をなすことはやさしい。例へばサモエド語の *Nam* と西藏語の *Nam* (佛性?)との如きは單に響の上から云ふならば *Nam* と *Nam* は *Nam* とフィン語の *Jumala* とよりも一層近しいのである。然るに *Nam* と *Jumala* との類縁は聲音學上疑ふべきではないけれど、*Nam* と *Nam* とに於ては聲音學の規則上 *Nam* が *Nam* に變じ得ることが許され、且つ同一の根語が發見される迄は其類縁を云ふことはできなからず。

Jacschke 氏の *Tibetan-English Dictionary* (西英字典)に *gnam* とし此説を立てんとす。以てらく天空の義なり。且つ、*gnam-tel-dar-po/ty Horpa* 即ち蒙古の神名なり。 *Nam-ma* とは鳥の翔り、聖者の位し電光及雷の住へる虚空の義なりと。

さて、今更に眼を轉して支那の民庶が信して居る所の諸の小靈を見るに、其性質が北方ツラニヤ族の信じて居る諸靈と酷似して居る。支那のは所謂 *Shin* (神)であつて、宇宙間の作用に於て感知せらるゝ所の不可見的の或者を意味して居る。此神に種々の階級がある。恐怖られるものもある。病氣の靈もある。其數殆んど算ふべから

ずだが、主に三種に分ける。Tien-shin (天神)、^{チキ} Chi (地祇)、^{ヒン} Hin Kwei (人靈)とてある。天神の中には日月、星、雲、風、雷等があり、地祇の中には山野、穀物、河、樹木、歳などがある。死者の靈の中で人民一般に尊崇するのは皇帝、聖人、及公益者の夫れである。又各家族毎に、其 ^{Manes} Manes (保護神)があつて拜まれてゐる。

之と同一の宗教思想が北方ツラニヤにもある。唯、支那の如き曲細なる區別と煩鎖なる典式とが缺けてゐる迄の事だ。

カストレン氏曰く、^{Shaman} Shaman 共が祈る諸神あり。^{Tadelpojos} Tadelpojos と名づく、空氣地、水等、到る處の自然界に存する不可見的靈なり。是等を以て單に死者の靈なりとなすもの多し。されと又劣等神の一團と見る者もありと。又曰く、フィン人の神話は神を以て充滿す。自然界の各物には其作者保護者として各 ^{Genius} Genius (靈)あり。^{Haltin} Haltin と名く、此等の靈は外物に拘束さるゝことなく、自由に出遊し、魂と身とを有し、獨立の人格を具す。而して其存在は只の一箇物に依屬せるにあらず。何となれば、ゲニウス(靈)のなきものとはなけれども、其靈は只の一箇物に限らるゝことなく、全類若しくは全部を包括すればなり。此山、此灰、此石、此家に各靈あり。されど其靈は又他の凡ての山、灰、石、家をも保護すとせらるゝと。

今此言を論理的に排列して見ると、凡そ宗教的思想の發達は何處でも同一であることが知られる。吾人の所謂 ^{Essentia} Essentia ^{Generis} Generis (概質、普遍的本質)即ち ^{Tree-hood} Tree-hood

^{Stone-hood} Stone-hood ^{Horse-hood} Horse-hood (木性、石性、家性、一木、石、家の抽象)なるものはフィン人等の ^{Haltin} Haltin,

^{Tadelpojos} Tadelpojos. 支那人の神である。吾人は今日事もなげに、概質と云つて居るけれど未

開人の心には中々其意味を知る事はできない。多くの木を林、多くの日を年と云ふ時は、其處に何か實體的個體的のものがあるやうに思ふ。個體觀念から一般觀念に直觀的から概念的に、實在的から抽象的へ遷り行く際には、林、年、雲、光等には其の影、其の幽靈、其の精、其の力と云ふ様なものがあるとやうな考へが起り、其等の者は實在物の一部とせられ、遂に是等が神話中の諸神となるのである。

祖靈崇拜も北ツラニヤと支那とに共通の現象であるが、但し之は世界到る處存せざるはなき迷信であるから、餘り力を入れて云ふべきほどのものでない。併し此の迷信が支那と北ツラニヤとに於て殊に十分に發達して居るのは一寸妙である。カストレン氏の曰く、フィン及アルタイ種族の多數は死を恐るゝと甚しきも、死は個體の存在を全滅するものとは信ぜず。彼等の中、來世を信ぜざる輩と雖、尙ほ、死者の生存を表示せる者たる葬禮を遵守し、食物、衣服、牝牛、小刀、箱、鍋、櫛等を墓上に置く。

強めて其所由を尋ねれば、答へて曰ふ、之れ死者をして漁獵、戦争等其生前なしし事をなし得べからしめん爲めなりと。ラップ人フィン人も亦肉躰は亡ぶと云ふ。されど、又新なる肉躰が下界に於て獲らると云ふ。又死者は幽靈或は精靈となりて墓冥界、地上特に深夜及風雨の際出て來ると云ふ者もあり。風の音、木葉の鳴る音、火の響等に於て其居住は表示さるゝも、通常人の眼には見るべからず。只シャーマンのみ之を見、且つ其意向を占知するを得とす。奇なるは、一般に此等の靈は悪性のもつとせらるゝ事なり。特にシャーマンの靈を然りとせり。シャーマンの靈は或は安眠を妨害し、病氣災禍を送り、親戚の者の心を腦ますと考へらるゝが故に、之を防がん爲めにあらゆる工夫を行ふ。死骸を戶外に送る際には、赤く焚きたる石を其方へ投ぐ。是其歸り來るを妨げん爲めの咒術なりとぞ。又墓に食物等種々の物品を供ず、是れ死者をして其歸來の口實なからしめんが爲めなりとぞ。 *Chivvashies* 人の子等は父の靈に供物を献じ祈りて曰ふ、汝に饗應せん。見よ、茲に麵麩あり又諸種の肉もあり。汝の要する一切の物あり。願くは我等に害をなすなかれ、我等の近くに來るなかれと云ふ。之れは死者が、若し此等の供物を與へられぬと、怒りて、其復讐として、病氣や災禍を送つてよこすと信じてゐるのである。古代の匈奴等は其酋長の墓へ

虜を屠つて供した。是れはシャーマン等が、どうしなれば首長が怒り出して宥むる事ができぬと言ふからである。同じ匈奴は又祖先の墓へ定期に供犠をなして居つた。シベリヤから中央亞細亞へ轉住した所の *Huns* 種族が其故地の祖先の墓へ使節を派して供物を奉獻した事がある。此等の墓には高さ柵が回らしてあつた。夫れは、其中へ生者が這入らぬ様又死者が外へ出て來ぬやうとの用心だ。又或墓には立派な修飾がしてある。夫等の墓が遂には殆んど支那では全く殿堂と化して死靈崇拜の場所則ち廟となつたのである。死靈崇拜に順序がある。墓上に一つの花を置くのが始まりで、皇廟の祭りが頂點である。之れは、天子の靈は *Shang-ti* 即ちチエン(上帝)即ち天(即ち最高の靈)と同等と見做して、他の諸靈以上の者と信じたからである。之を要するに、支那の煩鎖なる典式とフィン人の簡素なる禮拜と一見背壤の差があるやうではあるけれど、同じく共に宗教的信仰の原始の段階にあるもので、其實質は全く同一である。即ち、第一には天空の崇拜である。最高者の觀念を表示するに、未開の人心では天空以外の者を以てすることができぬのであつて、此崇拜によりて人間の精神は膨脹し向上し、終には無限者存在の信仰に到達し得るに至るのである。第二には自然の諸靈若しくは諸力の信仰である。之れは人間の宗教心の最

直接の要求を満足せしむるものであつて、人心の想像力を養成し古代の詩歌に高尚なる題目を供給したものである、最後には祖靈存在の信仰である。所謂其靈は意識的のものであるか、無意識的のものであるか、或は物質的のものであるか、精神的のものであるか、何れにせよ、此信仰こそは凡ての宗教の生命の源泉である。

本講演を終るに臨み其要領を擧ぐれば

第一、言語と宗教の間に自然的親縁の存すること、従つて、言語の分類法は古代宗教にも適用すべき事

第二、アールヤ族分裂以前にはアールヤ族共通の宗教あり、セム族分裂以前にはセム族共通の宗教あり、支那人と他のツラニヤ諸種族との分裂以前には彼等共通の宗教ありしこと、即ち古代に於て言語に三个の中心ありし如く、三个の宗教的中心の存在せし事

以上の事は世界諸宗教の史的研究には其眞の基礎となさるべきものであると私は信じて疑はないのである。

第四講

(千八百七十年三月十二日)

上來、私は理論的神學、即ち宗教哲學は必ず比較神學、即ち宗教の比較研究を基礎とせんければならぬ事を述べ且つ其研究の際如何なる方法に依て其方針を定むべきかを論じた、思ふに此方向の研究が進歩するならば、爲めに神學は多大の影響を受けるであらう、恰も言語の比較研究の爲めに從來の言語學が受けた夫れの如く、併し、其爲めに從來の神學が無用になると云ふのはなほ、それは彼の Grimm や Bopp や Humboldt の著書の出た後と雖 Plato の Cratylus や Harris の Hermes や Horne Tooke の Diversions of Purley 等の書が尙價値を持てゐるやうなものであらう、然し、古今東西の諸宗教を比較研究する其結果は必ずや從來の宗教哲學——ジエリングのと云はずヘーゲルのと云はず——をして其面目を一新せしむるに相違あるまい、見よ、幾萬年間埋れて居た所の化石の類が材料となつて、如何に地質學を進歩せしめたかを、實に近世科學の進歩は皆其材料の區域と種類が増大した御蔭である。

私は本講に於ては、古への宗教を解釋し研究するに就て、取るべき態度精神を一

言して大尾を告げやうと思ふ。

抑も從來の史家及神學者が世界の諸宗教に對する取扱ひ振りの苛酷さ加減と云つたら、實に如何に辛辣な裁判官も及ばないのである。苟も某教祖の傳記とし云へば、其一言一行、用捨なく捉へ來りて、解剖し評騰し、毫も假借する所なきのみならず、其言説の本意の那邊にあるかをも見究めず、只其皮相上から、出來得る限りの惡しき意味に於て之を解釋し、之に加ふるに、自分の信仰以外の者に向つては嘲笑と輕侮とを以て臨むのである。故に味方に於ては天使以外の何者をも見ざらんとし、敵者に於ては天使以外の何者をも見んとするのである。ア、此の如き結果や夫れ知るべきのみ、基督教以外の宗教と來ては其真相にも其特質にも全くの盲目で、一切の宗教を擧げて偽宗教だと云ふに至つた。否之よりも尙甚しいのは、基督教以外に救濟の道は求むべからずと偏執して、基督教以前の宗教の價値を全然沒却しやうとする。ア、若し夫れ宗教の比較研究がかゝる僻見を打破し得んか、其一事以て研鑽の勞に報ゆるに足るであらう。

吾人は古代の詩歌に親んだ、古代の藝術を知つた、古代の哲學を讀むだ。而も未だ指を古代の宗教に染めざるは何ぞや。人は埃及やバビロンや希臘の古殿堂を見て

嘆稱する。Phidias等の作つた神像の前に恍惚と己れを忘れて居る。而も、Atheneの堂やツエウスの像に現はされて居る所の宗教的感想に對しては之を嘸棄して顧みず、一概に之を偶像崇拜なりとし、Periclesやソクラテスやプラトーンをも一括めに木石崇拜者流の列に葬り去らうとするは何事ぞや。知らずや、古人を我等に一層親近ならしむる所以のものは其哲學よりも詩歌よりも美術よりも寧ろ宗教にあることを、優劣の差こそはあれ、彼等も兎に角或宗教を持つて居たと云ふ事にあるを、又知らずや、其宗教微りせば其哲學も詩歌も美術も不可能であつたことを、ア、吾人若し仁愛の心を以て見、偏固の眼を去るならば、美と善との新世界は、恰も雲霧を開いて青天を望むが如く、熾然として古代神話の背後より湧現するであらう。

今日に於ては何等の幸ぞ、吾人は恐るゝ所なく、自由に口をさくことが出来る。慈悲仁愛の心を以て他に接することが出来る。と云ふと變なやうだが、實はさうはてきなかつた時代があつた。至高の宗教的眞理も只盲的熱狂と火と劔とによらずば勝を奏する能はずと考へられた時代があつた。あらゆる偶像は破壊せられ、其祭壇は蹂躪せられ、其信者は殺戮された時代があつた。

今日は吾人はパールを恐るゝ要はない、ジュピターを憚る要はない。吾人の持つる危険と困難は他の種類のものである。天地を創造し玉ひたる神、自己に肖どりて人類を作り、休みなく之を導き玉ふの神が、いかで、凡ての宗教を偽物にして置いて彼等を見捨て玉ふやうの事あるべき。眞摯なる宗教研究は、聖オーグスチン (Augustine) が教えた事を教えてくれるのである。彼の言に曰く、真理の幾粒かを含ませざる宗教はあることなしと。否古代宗教史を研究するものは、更に一步を進めて、宗教は神のせさせ玉ふ人類の教育 (Divine education of the human race) なることを覺るであらう。

世には、救済を與ふるものは自家の宗教以外にあるなしとして、自分のと其他のと——波斯教、佛教、孔子教等の如き——の間に截然たる溝渠を造つてゐる輩がある。かゝる輩は世界宗教史を人類の教育と解することは到底できまい。然るに丁度かゝる見解は彼の輩が低頭尊奉する偉い方々の御教しえになつてゐる所だとは御存知ないか。大それた英吉利の僧正様や、獨逸の哲學者先生に尋ねに行き迄もない。法王でもよし、教父でもよし、使徒でもよし、どの方々も皆此事を仰せられてゐる。

舊約書を合せて研究する人は必ずや、基督教の眞精神は舊約書中には含まれ

てないことを知るであらう。而して、新約書の眞福音到來迄には長年月の距離があるから、何故に神様は其久しき間人間を暗黒中に彷徨はしたのであるかと疑ふであらう。レオ大法王 (Leo the Great) (四四〇—四六一) は答へて曰く、是れ蒙昧の人間を神の召しに適すべく準備せしめしなり。神の人の利福を慮るの切なるや、嘗に此新慈悲新教訓を以てせるのみにはあらず、太初より既に、凡ての人間の爲めに、同一救済の道を設け玉へるなりと。

又 Iræus 氏は、古代宗教の不完全なるは已むを得ざるに出づとして、之を説明するに曰く、慈母は赤兒に完全なる食餌を與へ得ざるにあらず、只赤兒は大人の食を受くるに耐えざるを如何せん。之と同じく、神は最初よりして、完全なる真理を人間に授け得べかりしも、人間は之を受くる能はざりしなり、彼は尙未だ赤兒なりしなればなりと。

若し以上二人の言を以て後代の勝手な放言だと云ふなら、請ふ使徒等の言を聞け。パウロは言はずや、立法は猶太人に取りては學校教師なりしなりと。又ペテロは云はずや、神は人間を尊敬するものにあらず。されど、神を恐れ、正を行はんものは其何れの國民たるを問はず必ず彼れに容れられんと云ふは眞なる哉と。

併し吾人は彼是と典據を搜し廻るには及ばない。唯「開ける胸と仁の心を以て古宗教の文書を讀めばいゝ。吾等若し一度斷乎たる決心を以て他者を信用し、毫も疑念を抑むなく、悪しく考へず、又己れは隣人に優れりなどの自惚見を廢してしまふならば、此全世界一よしや之を惡世界と呼ぶ者は呼べ—は恰も夢の覺たらん如く俄然其面目を變じて現ずるであらう。人様は忠實なものと善良なものと思切つて信任しなさい。するとよしぞうでなくとも、汝の信任が彼を善良にし、忠實にするに至るであらう。世界の宗教に就て云ふも又此の如し。或者が云ふ如く自余の宗教は果して惡魔の所作であらうとも、我と彼とは初よりしてしかく徑庭があつたのではない。世に善をなせよ、惡を避けよと教えざる宗教があるか。蓋し之あらん、我未曾て之を聞かざるなり。 Rabbi Hillel 氏は「善なれ、我兒よ、神の爲めに」と致したい思ふ云はれたが、私は之に更に一語を加へて「善なれ、我兒よ、神の爲めに」と致したい思ふに、此句は以て立法及預言者所説の全體を盡すに足りるであらう。

私は是から、舊世界の諸聖典より拔萃したものを茲に朗讀しやうと思ふ。是等は何れも黄金よりも尊き眞理の顆粒である。但し、茲に出すのはホンの見本だけです。さて愈、是から第一に讀み上げますのは Vasishta と申す所の エーダの預言者が

Varuna 神希臘語の Ουρανός 天空の義又天空に住する神の義に獻げたる祈禱であります。

が、少くとも最初の一句だけは原文其まゝに讀みます。—之はリグ韋陀第七卷、第八十六の讚歌です。抑も是は三千年の其昔し、 Satledge 河畔は Catadrin と申す所の一村落に於て吾々の通りに感じ、話し、信じ居りましたる黒い顔の—印度人—牧者で、詩人で、僧で、家長で、憶に聖書の中の David と比肩すべき程の人物—が發しましたる語音其まゝを諸君の御耳に達したいと思ふのであります。若し夫れ此詩人が思想の大海に與えた一衝動から起つた波が傳はり—て幾千百年の後吾々の海岸を打つたので其波の音が語るを聞けば、是ぞ、かの古へのアールヤ詩人が、天地の作者全能の神の存在を感じた時及び、同時に己が罪の重さを感じて宥免されんことを祈つた時の感想であると思ひましたならば、なるほど精神ちうものは金剛不壞であるわいと感じずには居れません。

Diirā tv asya mahinā janunshi
 Vi yas tastambhn rodasi chid nryi.
 pra dākmi rishyam nunde brihantam.

divya nakshatram paprathach cha bhūma.

「廣き天涯(天と地)を分ち支へたる彼れの所作は賢且壯なる哉。彼は輝ける榮ある天を高さに擧げたりき。彼は星充てる空と地とを分ち、突き出せり。

「我は我自からの我に之を云ふか。如何にして我はヴルーナに近くを得るか。彼は怒ることなく我献げを受けんと思ふや。何時我は彼れの和らぎたるを、靜心もて見るべきや。

「此我罪を知らんと欲して我は問ふ。オ、ヴルーナよ、我れ行きて賢者に問ふ。諸聖の語る所皆同じ。曰くヴルーナこそは汝を怒るなれと。

オ、ヴルーナよ、常に汝を讚美する汝の友を、汝の毀たんとするは古き罪の爲なるか。我に語れ、汝、克つべからざる主よ。我は罪より免れ讚美を以て速に汝に歸らん。

我等の罪より、又我等自らの肉體もて行ひたる罪より我等を救へ。ヴシシュエタを免るせ、オ、主よ、盗みし家畜を喰ひ了りたる盜の如く、彼を免るせ、小牛を繩よりの如く。

そは我等自らの所業にてはあらざりき。オ、ヴルーナよ、そは過失なりき。醉

はす飲物と愛欲と骸子と無知とにてありき。其處にては、老いたる者若き者を導き誤らんとす。睡眠さへ妨げらる。

我をして罪より免れしめ、怒れる神に仕へしめよ。奴が其主への如く、主なる神は愚者を誨め、最賢者なる彼は彼を拜する者を富に導く。

オ、主ヴルーナよ、願くば此歌汝の心に協はんことを、獲ること、保つこと、に於て我等の榮えんことを、我等を護れ、オ、神よ、汝の祝福を以て。」

(譯者白す、こは是英譯の全然的直譯なり。完全なる英譯は到底予が力の及ぶ所にあらず。さればとていかいほしき鹽梅を加へんは中々に加大ならん。讀者之を諒せよ。以下皆然り。一々断らず)

私は決して此讚歌の缺點に盲ぢやないと同時に其美點にも盲ぢやない。これ程の詩を三千年前の印度に於て發見したる喜悅は實に私一生の勞苦に酬ゆるに足りる。是れは何人も神様に見捨てられてはゐないと云ふことの證據である。此確信は史學研究者に取りては無上の寶である。パピロンや埃及の歴朝の凡てよりも、湖棲時代の聚落の凡てよりも、はた又 Neanderthal や Abbeville へ掘り出した頭骨や顎骨よりも多くの價值があるのである。

尙二三の讚歌を御覽に入れる。

宥^{ユル}を請ふの祈^{リグ}七卷第八十九

- 一、我をして未だ、オ、ヴルーナよ、地の家に入らしむるなかれ。慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。
- 二、我若し風に追はれたる雲の如く震ひつゝ、彷徨^{ウロコ}はゞ、慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。
- 三、力の缺乏の爲めに、汝光れる強き神よ、我は彷徨へり、慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。
- 四、渴^{カク}は拜信者に來れり、彼は水の直中^{ナカ}に立てりしかども、慈悲なれ、全能よ、慈悲なれ。
- 五、我等人間、オ、ヴルーナよ、天の主人の前に過を犯さん時、我等無知の故に法を破らん時、我等を罰するなかれ、オ、神よ、其罪の爲めに。
ヴルーナへの讃歌(リグ、一ノ二五)
- 一、我等は汝の法を破らぬ日とはなけれども、我等は人間なれば、オ、神よ、ヴルーナよ。
- 二、我等を死に渡すなかれ、暴者^{ヒル}の打撃^{ウチ}にも、はた、忌はしき者の怒りにも。

- 三、汝を和^ユげんとて、オ、ヴルーナよ、我等は歌を以て汝の心を解く、御者が疲れたる馬を(解く)如く。
- 四、唯富をのみ是得んと志す彼等は、失望して我より逃げ去れ、鳥が其巢への如く。
- 五、兵士^{ソウシ}よりも強き人を何時か我等は彼方に將^{カサ}ち去らん、何時か我等は遠きを見るヴルーナを和ぐるを得ん。
- 〔六、彼等(Nith) 及ヴルーナを指す〕は何れも同じく此事をなす、—温雅なる彼等は忠實なる施與者を見誤ることなし〕
- 七、空を翔る鳥の所を知り、水の上の船を知れる彼。—
- 八、十二の月と其各の子とを知り、又後に生るゝ月を知れる、秩序の維持者たる彼、—
- 九、風の廣さものゝ、光れるものゝ、能あるものゝ、道を知り又高きに住めるものを知れる彼、—
- 十、秩序の維持者なる彼れヴルーナは彼れの民の中に座す。彼れ賢者其處に座して支配す。

十一、其處よりして、あらゆる驚くべきものを認めつゝ、彼は既になされた事と將になされんとすることゝを見る。

十二、願くは彼れ賢なる Adiba は我等の道を生の終迄直くせんことを、彼は我等の生命を長ふせんことを。

十三、ブルーナは黄金の甲を着け、其光れる外套を纏へり。牒者彼れの圃に塵せり。

十四、罵る者も、人間を惱ます者も、害を巧む者も怒らし得ざる神。

十五、人間に榮を、半ならぬ榮を授け、そを我等自らの我にも授くる彼。

十六、遠さを見る彼を戀かれて、我思は進み動けり、牡牛が其牧場への如く。

十七、我等を再び會り語らしめよ、我は蜜を持参したれば、汝の好むものを食へかし、友達トウヂの如く。

十八、我は凡てによりて見らるべき神をや見し、我は空中の戦車をや見し。彼は我祈を受けしならざるべからず。

十九、オ、此我が請を聞け、ブルーナよ、優かれ、肋をと望みて、我は汝を呼べり。

二十、オ、賢き神よ、汝は凡てのもの、天及地の主なり。耳傾けよ、汝のまに。

二十一、我の生存を得ん爲め、上なる繩を我より取り、中なるを弛め、下なるを去れ。

リグ中に見ゆる神の最多數は上に擧げたるものよりも遙に神話的な性格を具へて居る。併し精神的、道德的性格を全然缺如して居るのは殆んど稀である。が今其一例として次の讚歌を掲げる。此詩では Agni (羅旬 Ignis) 神は火の代表と見做されては、あるけれど、其奥の方の遙なる所には、やはり、或神的要素が神話的皮殼に包まれつゝ、閃めいて居るのが認められる。

アグニへの讚歌(リグ十一ノ六)

一、アグニよ、汝に献ぐる此薪を受けよ、此我奉仕を受けよ、此等の我歌を聞け。
二、此薪を以て、オ、アグニよ、我等は汝を拜まん。汝、力の子よ、馬の制御者よ、又此賛歌を以て、汝、高さ生れの者よ。

三、汝の僕我等歌を以て汝に仕へん、オ、富の授者よ、歌を愛し富を悦ぶ汝よ。

四、汝富の主、富の施與者よ、汝賢しかれ又強かれ、敵を我等より追ひ拂へよ。

五、彼は天より雨を我等に賜ふ、彼は破るべからざる強さを我等に賜ふ、彼は千倍の食を我等に賜ふ。

六、神々の中の最も若き者、彼等の使者、彼等の請ふ者、拜する價の最も多かる者よ、來れ、我等讚美せん時、汝を拜し、汝の助を望む者に、(來れ)

七、そは、オ、聖者よ、汝は此等二種の被造(天と地、諸神と人間を云ふ)の間を賢しく過ぐればなり、親しき使者が兩村の間を(過ぐる)如く。

八、汝は賢なり、汝は悦ばされたり、汝倣(まね)ときアグニよ、絶間なく供犠を行へよ、此聖なる草の上に座せよ。

此處には、奇怪にも、同一神の中に道德的要素と物質的要素とが相混合してゐる。變な感じがするけれど、かゝる類は凡て宗教觀念發展の初期に於て何處にも見らるゝ所である。唯、アールヤ民族のみでない。アフリカ、アメリカ、さては、アウストラリヤに於て皆然り、唯、此等に於ては、其豐富(ニカヤ)と明了(エツカヤ)とが韋陀の歌に比して劣つてゐる丈けの事だ。

リグの中にある歌が何れも同一様の古さのもてないとは、私が屢々唱へた所である。併し、其爲めに私は、私の古代梵語文學史中に主張して置いた説を改めやうとはしない。彼の書では、私はリグ讚誦の編輯は *Brahmana* 期の始まる前に完了してゐたものと見做さなければならぬと云ふた。其説に弱點があるとは、今でも思つ

てゐない。勿論、此種の研究には先入見を抱いてかゝるのはよくないけれども、後代のゾーダ文並に其他の古文字の書の中のものとも比較参照せんければならぬ。所が、そうして見ると、私にはどうしても、リグ中の言々句々何れも盡く同一の古さのものだとは思へないのである。今其例證として、茲に最終の *Mandala* からの拔萃を御覽に入れる事にする。之は近代的沈澱物だと一般に見做されてゐるものである。但し、果して然るや否や、確定的證據がある譯ではない。

序でに注意して置くが、此次の歌の中に *Visvakarman* と云ふ神の名が出てゐる。此事から推定すると、此詩の作者は韋陀教の第一期に屬してゐるものではない。此名が固有名詞で使はれてゐるのは第十のマンダラの中にあるばかりだ。此語は元とは「萬物の作者」の義で、種々の古の神の敬稱に用ゐてゐる。インドラも *Surya* も皆此名を附けられてゐる。又 *Visvakrit* (萬物を作る彼れ) はアグニ神の敬稱にしてゐる。而して其アグニはブラーマナの書中では、*Visvakarman* と同一のものとしてゐる。*Visvakarman* は甚抽象的な一個獨立の神で、*Pranapati* 等と同じく、宇宙の創造者、尙正しく云へば、宇宙の修飾者、建造者である。彼に献げたる讚歌を讀むと、其觀念の出て來た素地がほのかに窺はれる。其詩の作者の積では、*Visvakarman* を單

に創作者と見て居るやうだけれど、アグニや又はスーリヤの痕跡を想起せしむる點がある。或詩に

「凡ての世界を犠牲として、獻げ、我等の父として降り來りたる預言者且僧なる彼は、最初に現はれて、富と幸とを願ひ、可死者の中間入りをなせり」

とある。が之の句には種々の解釋が付けられる。意味甚不明である。併し此に萬物の作者としてある所の、*アスヴカルマン*は元は火の神、特に朝の光の神であつた事を考へ合はすと、此文稍合點のゆく所がある。朝の神 (*Aushsvya*) としてのアグニは、美なる世界を黠出して夫れを朝時の供犠とする僧とせられてゐる場合が屢々ある。而してかゝる供犠は一日及一年の始、又は世界の太初に行はれるものとしてある。詩人は、朝日の光をば、毎朝竈で焚く眞の火の如くに世界を輝かすものと見たのであらう。或は詩人は、昇る旭の光には、世界を持ち出し、見せしめ、存せしむる、即ち世界を作るの力が存して居るとも考へたのであらう。こんな考は餘程變テコな思想である。變テコではあれど、尙考へ得べき思想である。韋陀の文を解するに當りては何時でも、少くとも考へ得べき或者に到着せいで、は落ちつかないのである。

此詩人が、*アスヴカルマン*を人間中へ降りて來た父と見做したのは、火のアグニ

神を思ひ及んだのであらう。朝の光は、最初には、遠くに隔つてゐる神物と見えるけれど、後になると、人間の住んで居る地上へ來て、其處(各家の竈)に住居して居る、其趣が他の諸神力とは異なつて居る。かの思想の萌芽は此處にあるのだ。アグニは人間と共に住する最初の神である事、彼れの存在は一切人間の活動、殊に工藝に必須條件なること、彼の恵によりてのみ人間は健康と富とを得ること、なんどの思想は種々の方法で、韋陀の歌に言表はされてゐる。

此等の思想を、*アスヴカルマン*へ移して考へて見ると、第一句は稍理解されるやうである。従來の諸譯では思想の連絡が認められない。

- 一、一切を見る、*アスヴカルマン*萬物の作者が地を作り、其力によりて天を示し、場所は何處なりしか、其支へは何なりしか、そは何處なりしか。
- 二、到る處に眼を有ち、到る所に口と腕と足とをもてる神なる彼、彼は天と地とを作り、腕と翼とにて、之等を合せ煉るなり。
- 三、彼等は天と地とを何れの森、何れの木より、切出したるか、汝等賢者よ、彼れが世界を支へつゝ、立てる場所を汝等の心の中に求めよ。
- 四、犠牲に悦べる、オ、*アスヴカルマン*よ、汝の最高の住所は何なるか、最低のは

何なるか、はた此等の中間の住所は何なるかを汝の友に教えよ。汝自らの爲めに供犠せよ。汝の身軀を増加して。

五、供物によりて生長する萬物の作者よ、汝自身の爲めに、地の爲めに、天の爲めに供犠せよ。他人を暗黒の中に彷徨はしめよ、されど我等の中にては賢者を有力ならしめよ。

六、今日は、我等をして、戦時の保護を乞はしめよ。言語の主よ、莽スグカルマンよ、我等の心に感應する萬物の作者よ、願くは彼は凡て我等の供物を受けんことを、何人にも祝福となり、又我等の安寧の爲めに善行をなす彼。

×此語は元來アケニに宛て、云へるなり。火を供犠の主體とすると同時に又其對象と見るは波羅門には通例の思想なり。火は供物を抱くが故に一種の附なりとせらる。又之を神の處に遊び行くが故に人神間の媒者なりとせらる。されど火は夫自身神聖なるものにして尊き神なり。かくて火は供犠の主體たると同時に對象となれりしなり。即ちアケニは自ら供犠を行ひ、自らに之を献げ、又自らを犠牲として献ぐとの思想成立ししなり。是れこそは、後代の話澤 Nirukta 一四二頁(Baoh 氏の譯を見よ)に見ゆる思想の本地なるなれ。即ち先づアケニをば昇る太陽及朝と見次に、日出を自然界に於ける一大供犠、天地の光榮の爲めに點ずる所の光と見、最後に、此

毎日の供犠は創造の爲めの供犠にして創造者の光榮を表する所以なりとするの神統記的思想を打成せしなり。

次には Zendvesta からの抜萃です。

此書は文字の風が餘程古いもので彼の Cyrus Darius Xerxes 諸帝の遺した楔形字の刻文よりもまだ古い。此等の諸帝は何れも Ahura Mazda (Auramazda) の Zend 語神の恵によりて位に即いたのて、其神像を Behistun に建立した人々である。さて此典籍と云はんよりは寧ろ断片はボンベイ在住の波斯遺民が今日でも遵奉し居る所の御經である。

第一番目の抜萃は Yagna の第十三章中から取つたのである。此れの翻譯、寧ろ解字は種々の人の手で試みられて居る。が先づ其中で著しいのは Spiegel 氏のと Haug 氏のとである。(Haug 氏、波斯聖語論・Essays on the Sacred Language of the Parsees)

本文に取掛る前にブンゼン氏著「史上の神」(God in History)の一節を参考の爲め掲げます。(Miss. Winkworth の英譯に據る)

「先づ次のやうな畫を心に描きなさい。處は中央亞細亞古代の不思議の市都——

Bactria 府(宏麗の義)即ち現今の Balkh 市(諸市の母の義)の近傍に火を神として祭
 である所の聖山がある。その山の頂さから望むと、海拔約二千尺の高原が北方に行
 くに従ふて次第に低下して茫々たる沙漠で、終つて居る。—— Bactrus 河は此沙漠
 に障げられて Oxus 河と合し得ないのだ。次に南方には遙あなたに Hindukush 山
 (亞歷山の史家が所謂 Indian Caucasus) の聳立すること五千尺。此國の大河バクト
 ルス或は Dehis 是源を此等の山—— Paropamisus 山(即ちヒンヅクシー山——
 に發し、市の附近に來りては無數に分岐し、其地爲に灌溉を受けて潤濕、花充ち果溢
 るの美觀を呈して居る。所謂隊商 (Caravan) 共は山を超へて不思議の國に渡り行
 き、彼處より珍寶を持來りては皆此地に集まつて來る。……此處に或日の事、人々
 が聖火を焚いて占卜をしやうとして居る處へ指して、 Zarathustra と云ふ人が國
 の貴族共を叫合して「一大宗教的活動をなそうと云ふので、自分の弟子や豫言者や
 説教師共を數多率ひて此處へ到着した。先づ諸王子を招き寄せて、正信と迷信と何
 れか其一つを撰ばしめようとする。其時の演説である。左の拔萃は、是は歌誦の體に
 なつて居る。拙譯は主にスピーゲル氏のとハッグ氏のとに據り、傍ら Hübschman 氏
 の訂正を參考した。ゾロアストルの歌、Dr. H. Hübschman, 'Jin Zoroastrisches Lied。」

- 一、全知なる主よ、今や我は、聞かんとて集まり來れる凡ての者に汝の讚美と
 Volunano (善靈の讚誦とを宣へんとす。
- 二、最も良き事を汝の耳もて聞き、清き事を汝の心もて見、以て各人自ら主義と
 する所を選べ、大審判の到らん前に、賢者は我等に味方せよかし。
- 三、双生の老靈は想、言行に於ける善事と惡事とを各自の動作を以て示せり。善
 き者等は二者を區別せりき、惡行者はせざりき。
- 四、此等二つの靈共に來りし時、先づ生と死とを作れり。是れ惡しき者には終に
 最も憐れなる生あれ、されど善き者には幸あれかしとてなり。
- 五、此等二つの靈の中の惡しき者は最惡の行を選べり。親切なる靈、動かすべか
 らざる空を衣服とせる彼は正しきを選べり。而して善行によりて忠實にアフ
 ラマツダを喜ばす者等も亦。
- 六、デーヴを拜して欺かれたる者等は二者を正しく區別せざりき。最惡の靈を
 選みたる者等は集まりて共に議し、人生を惱まさん爲め Aelima に走り行け
 り。
- 七、而して、彼れ(善き者)に力は來れり、徳は智と共に。而して長久なる Arnaiti 彼

女自ら彼れの身體を強ふせり。汝富むことあるは彼の女の賜によるなり。

八、さばれ彼等の罪の罰來らん時、而してオ、マツダよ、僞(Dru)を眞理(Asin)の手に渡し、者等に其敬虔の賞として汝の力の示されん時。

九、此時こそは、我等をば此世界の進捗者たらしめよ、オ、マツダよ、オ、幸を與ふるアシャよ。我等の心をして智惠の住へる處にあらしめよ。

十、其時こそは實に、其處に、邪なるドルウジは倒れ亡びなん、されど、令譽を保ち續けたる者等は、ゾフマノとマツダとアシャの美しき住所に長久に集められん。

十一、オ、人々よ、汝等若し惡者には責苦善者には祝福たるべき、此等のマツダの命令を固守せば此等によりて勝利獲られん。

次の三句はヤシユナの第四十三章より抜いたのである

「我は汝に請ふ、我に眞理を告げよ、オ、アフラよ、太初よりして、清き世界の父たるは誰ぞ、日と星とに道を作りたるは誰ぞ、誰か汝を除いては、月を増し又減せしむるを得ん。オ、マツダよ、是れと他の事とを知らんことを我は願ふ」

「我汝に請ふ、我に眞理を告げよ、オ、アフラよ、誰か地と雲とを保ちて落ざらしむ

る。誰か風と雲とに速さを與へたる。善靈の創作者は誰ぞ」

「我汝に請ふ、我に眞理を告げよ、オ、アフラよ、誰か親切なる光と暗とを作りたる。誰か親切なる眠と覺とを作りたる。誰か朝と午と夜とを作りたる。賢者に其義務を覺らしむる彼等なる乎。」

ツェンドゴスタを毫も誤なく譯出することは至難の業であるから、以上の譯文は必しも原意と精密に適合しとるとは保證は出來ないけれど、ゾロアスター聖典の要旨の存する所は、此世界には善と惡との戦争が進行しつゝあつて、各人は其何れかに味方せんければならない、而して終りは善の勝利に歸する、と云ふにあることだけは明白である。

次には佛典から抜かうと思ふのぢやが、さて何にしたがよからう、教説物も比喻物も實にあり餘る程に澤山で、選り出すに困るが、免にあれ、パーリ語で書いた佛の教説集の中より左の如く摘出する。(The Dhammapadam) [法句經]東方聖典集第十卷

一、凡て我等の現状は我等の思ひ考へたる結果なり、即ち我等の思考に根據し我等の思考より作らるゝなり。人若し惡しき思考を以て語り或は行はゞ、苦は、車輓く牛の足を其輪の追ふが如くに彼を追はむ。

四十二、蜜蜂は蜜を集め、而して其立去るや、其花の色をも香をも傷ふことなし。賢者の世に處する又此の如くなるべし。

六十二、愚者は、是の子等は我に屬し、此富は我に屬すとやうの思考を以て憐まざる。我自身既に己れに屬せず、況んや子をや富をや。

一二一、一二二、「こは我に近づき來ることなからむ」と心の衷に言いて、惡を輕視するなかれ。こは我に益なからむと心の衷に云ひて、善を輕視する勿れ。水滴の落下、尙よく瓶を充たす。

一七三、善行を以て惡行を蔽ふ者の此世を照らすは猶月の雲を出づるが如し。
二二三、愛によつて怒に、善によつて惡に、寛大によつて貪吝に、眞理によつて欺者に克てよ。¹

二五二、他の誤りを見るは易く、己れの誤りを見るは難し。人其隣人の誤りに於けるや、糠を汰するが如く、其己れの誤りを隠すや、騙者の其徒に、惡骸子を隠すが如し。²

二六四、虚言する放逸なる者は剃髮によつて聖とならず、貪慾の虜、如何ぞ聖たるを得ん。

三九四、組める髮何の用ぞ、愚者よ、羊皮の衣何の用ぞ、内貪掠あり而かも汝其外を清くす。³

1、羅馬書、十二ノ二十一、比照

2、馬太、七ノ三 全

3、路加、十一ノ三十九 全

佛耶二教ほど、其主要な點に於て相反對して居るものはない。然るに佛教程、基督教を想起せしむるものはない。佛教は高等力への依屬感情に少しも價値を置かない。て其凡てを看過してゐる。従つて最高神の存在を否定して居る。基督教の根本義を云へば、父として神を信ずること、神の子として人の子を信ずる事、及凡ての人間は彼の子を信ずるによつて神の子となるを信ずることに歸する。かく根本義に於ては相違あるに拘はらず、佛及其弟子と基督及其使徒との間に言語上の一致が驚くべき程に存して居る。或は新約書中から佛典へ取り入れたのではあるまいかと疑はれる程だけれども、其類似せるものゝ多數は既に紀元前に存して居たものであることは明白であるから此疑は消える。

ピユルヌフ氏の佛敎史緒論、二〇五頁に左の如き譯がある。

「阿難、嘗て旅して田舎に到り、旃陀羅族の一婦人 *Māndiśā* (摩鄢女) といふ者と一つの井の傍にて遇ひ水を乞ふ。女己れが素性の賤しき者なるを告げ、近づくなかれと云ふ。阿難いふ。我が乞ふ所のものは汝の種族若しくは家族にあらず。只一杯の水を乞ふのみと、後に女は佛の弟子となれり。」

新約書では、或教義が簡單な命令の形で表はされて居るのがあるが、それと同様のものが、佛典の方では比喻の形で御談議體になつて居る。とやうな類が折々ある。ソーマデーワ四卷、二八ノ一に、

「或る僧衆を集めて法を説く。聽者の中に王あり。王其嗣子なきを思ひ心快々として沈みし時、僧の云ふ己れの富を捨つるは此世に於ける至難の徳行なるが如し。己れの富を捨つる人は己の生を捨つるに等し。生は富に固着せる如く見ゆればなり。然るに佛陀は慈悲の心に動かされて他者の爲めに其生を草の如く捨て玉へり。さらば我等如何ぞ此の憐れなる富に戀々たるべけんや。佛は此高德によりて一切の欲より離脱して聖智を得、終に佛陀覺者の位に達し玉ひしなり。故に賢者は凡ての樂より欲を離したる後は己が生を犠牲にして迄も、一切生類に善を行ふべし。かくてこそ眞智には達し得るなれ。聽けよ、昔し一切此世の欲を脱したる王子ありき。若

く且つ美しかりしかど、遊仙の生活を志し、諸方に出行せりき。或日一商人の家に到りけるに其商人の妻、年若し。仙を見、其眼の愛らしきに打たれ、曰ふ。君は今のやうなる辛き生をいかで志すに至り玉ひたる。實に君が愛らしき眼もて詠められん。其女こそ幸ならめと。仙之を聞き己が一眼を抉出して掌上に置き、女に謂つて曰ふ。母よ、之を見よ。汝若し好むとならば此醜き肉塊を取れ。他眼も亦此の如けん。我に告げよ、愛らしきもの何の處にかある」と。

かくて、説教僧は之と同様の比喻を數々挙げ來り、さて終りにいふやう、眞の賢聖は富も生も顧ることあるべからず。又妻子にも執着すべからず。是等は棄らるべき草に等しければなり」と。

之を讀むならば誰か、聖書中の諸句を想起せず居られやうぞ。馬太傳五ノ二九には曰、汝の右眼汝を叱らば之を抉出し去れ。と同十九ノ二九には曰く、家若しくは兄弟若しくは姉妹若しくは父若しくは母若しくは妻若しくは子若しくは田を棄つるものは云々と。而して又路加傳十二ノ二八には曰く、今日は野にあり明日は爐に投げ入れられむ草と云々。

x *Dialagi Centurum*, p. D. 4. 1. 2. 曰く *Demotus* は其兩眼を抉出せり。其理由(一)冥想の妨をなし、

故(二)悪人の榮ゆるを見たる故(三)女を見れば必ず淫心を起すが故。

以上は類似の例の二三に過ぎない。

又同集「話の河の大海」ソーマデー著四卷二七に次の話が載つてゐる。

嘗て如來の宗教に志し、僧を恭敬せし一商人ありき。其子、父を賤んで罪人と呼べりしかば、父の曰く、何故汝は我を罵るぞ。子答ふ、汝エーダの法を捨て、法ならぬ法に従へり。汝婆羅門を捨て、沙門を拜す。如來の宗教何の益かある。之に歸依するは、唯賤しき生れの者、寺に隱家を求むる者、麻の衣を捨て髪を盡く剃る時幸なる者、欲しと思ふ物は何をも食ひ拂清フイキヨクも懺悔も行はぬ輩あるのみと、父の云ひけるは、宗教にも種々あり、或は他界を目的とするあり、或は衆生の爲めにと企つるあり。され、眞のバラモン教と云ふは、禁欲、忠實、一切衆生に對する親切、及妄りに性別の規則を破らぬ事等の外にありとしも覺えず。されば汝は一切生類の保護を唱ふる我宗教を罵ることあるべからず。何となれば、親切ならんとせば無法なるべからず。而して我は一切生類の保護以外に更に更に親切てふ事のあるを知らざればなり。夫れ我宗教は慈悲を目的とし、解脱を極地とす、我若し之に固着すること過ぎたりとせんも我に於て何の罪かあらむ。子よと。

さるに、子は尙も罵りを止めざりければ、父は彼を王の前につれゆきぬ。王は彼を刑すべしと命じぬ。但し死の用意の爲めにとて二ヶ月間の猶豫を與えられぬ。二ヶ月の終りにかの子は再び王の前に引き出されけるに、其面いたく瘦せ衰へ色さへいと青げなるを見て其故を問はれしに、其答に曰く、我は死の日々に近づきくるを思ひ、食欲少しも起らずと。王告げて曰ふ、我が汝を刑せよと嚇おそしは、おゝよと、生類が死の近く時感ずる苦痛の如何にあるべきかを思ひ知らしめ、以て、一切衆生愛憐を命ずる宗教を尊敬するやうならしめんとてなりき。されど今は汝已に死の恐れを知りたり。是よりは更に進んで、精神の自由を得んことを勉め、再びと父の宗教を罵らぬやうにならざるべからずと。子、心頗る動きつ。如何にせば精神的自由は得らるべきやと問ふ。王、時に、町に市の開かれあるを聞き、彼に命じけるは、油の満てる皿を手に支へ、町を通過し終る迄一滴だも灑こぼすことあるべからずと。執刑者二人刀を抜りて彼の後に従ひ、一滴の落ちん時立到トキヨロに刻トキねんとす。子はやがて町の凡てを、一滴もこぼすことなく過ぎ終りて王に歸りける。王曰ふ、汝今日、町を過ぎ行く間、何物を見しことありや。答、我思ひは器の上に凝りて、我は更に其他の何者をも見ず。又聞かざりき。其時、王の曰く、正にそれと同じやうに、最高の者の上に汝の想を凝すべ

し。思を凝らし而して、外側の生活に心を煩はさざる者は眞理を見ひ、而して既に一度眞理を見たらん上は再び業の網に捕はるゝことあるべからず。かくて、我は汝に精神的自由に達するの道を、言葉少なに教え了はりぬ」と。

× Mahāvamsa. p. 33 (天史) 比照

佛陀によると、吾人一切の行爲の動機は慈悲、即ち吾人の所謂「憐人への愛」でなければならぬのである。然るに此高尚なる感情の事は、バラモンの聖典中には繰返し説いてある。 *Mahābhārata* の *Udyogaparva* 第三十八章に曰く、己れの欲せざる所は他になすべからず、これは簡單なる法則なり。自餘のものは盡く欲より起るなりと。同 *Anuśāsanaparva* 第一百四十五章に曰く、言、想若しくは行を以て何者をも害はぬこと及慈悲憐愍なること、是れ善人の永久の法なりと。又同じく *Śānti-parva* 第一百六十章に曰く、許容と忍耐、親切と平等、忠實と正直、肉欲及客氣の控制、溫和と適宜と持重、寛大と沈靜、満足と言語の親切と憎惡の缺脱——是等凡てを合すれば則ち是自制なりと。又同じく *Sāntika-parva* の第一百十章に曰く、何人にも恐れられず、又自ら何人をも恐れざる者、凡ての人を己れと同一視する者、かゝる人は凡ての困難に打克つと。又同じく *Āśvāsāsāna* の第一百四十四章に曰く、常に友と敵とを同一様の心

を以て遇する者は凡てに友たるなり。かゝる人天に行かんと。

見るべし、吾人の最も尊んで價值ありとする所の者は上述の如く佛教にもある。バラモン教にもある。而して孔老二教の中にも存して居るのである。今其一二の言を引いて置く。

孔子曰く、汝の欲せざる所之を人に施すなかれと。

老子は曰く、有物混成、先天地而生……寂兮寥兮……獨立而不改……周行而不殆

……可以爲天下母……吾不知其名字之曰道、強爲名之曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反。

希臘や羅馬の作家は、其當時如何はしき神話や偶像崇拜が行はれてゐたにも拘らず、宗教及道德的高尙なる感情を發露して居る。其類の言句の如きは實に澤山あるから茲に掲ぐる邊がないが、プラトンは、人は神に似んと勉めざるべからずと云つた。此所謂神とは *Numina* や *Muses* や *Mercurius* などを指してゐるとは思はれぬ。又或詩人は、良心は凡ての人に向つての神であると云つた。彼は眞の神を知つてゐるのではあるまいか。

さて次に古代埃及の所謂「書文字」の書類を見るに、何れも皆、壯嚴な思想と稚氣を帯びた、どころでない、もつと下等な思想との混和物である。併し何處でも初期の宗

教にありては、こんなのが通例である。怪むに足らぬ。宗教學者はそんな中から大切なものを選び出さねばならぬ。眞、美なるものを東洋の聖典の中に見出すのはやさしい事。併しそんな寶物丈けて満足してはならぬ。薔薇や百合ばかりに眼をつけ、荆棘を看過する植物家は有難い學者である。苟も自然的發達——草木のにせよ、思想のにせよ——なるものを研究しやうとする者はこんな態度を取つてはならぬ。餘事はさて置き、*Enum* と云ふ所にあつたバビルス製の書類の中に左の言がある（ルヌフ氏ヒツパート講義集二二二頁）

「全能の神、自己存在者、天地、水、生命の息、火、諸神、人間、動物、家畜、爬虫、鳥、魚、王、人、を作りたる者……曰く我は天と地の作者なり。我は其山と、其上に居る被造とを揚ぐ。我は水を作り、而して *Mohana* 川は成立す……我は天の作者にして又二重の地平線の秘密の作者なり。凡ての諸神に其内にある精靈を與へたる者は我なり。我、我眼を開く時其處に光あり。我眼を開づる時其處に闇あり。我は時限を作り、而して時限は成立す。我は朝の *Chepu*、午の *Ku*、夕の *Tun* なりと又

「汝を祝福す、オ、*Pah-tanu* よ、自らの形を隠す大神よ……汝は息める時警しめつゝあり。凡ての父の又凡ての諸神の父……永遠の無限なる時代を超ゆる警戒者、

天は未だ造られざりき。地は造られざりき。水は流れざりき。汝は地を一所に集めたり。汝の手足を合せたり。汝の四肢を數へたり。汝の分れたりと見し物を其本の位に直せり。オ、神よ、世界の建造者よ。汝は父を有せず。自らの祝福によりて生れたるなり。汝は汝の眼の光によりて暗を逐ふ。汝は天の頂に登る。而して登り終りたる時にも下に來れり。汝、冥界の住者なる時は汝の膝は地上にあり、而して汝の頭は上空にあり。汝は汝の作りたる物體を支ふ。汝の動くは汝自らの力によるなり。汝は汝自らの腕の力によりて揚げらる……汝の聲の轟は雲の中にある。汝の息は山頂にあり。洪水の水は各地方の高樹を蔽ふ……天と地は汝の與へたる命令に従ふ。彼等は汝の彼等の爲めに設けたる道を通りて旅し、彼等は汝の彼等に命じたる路及汝の彼等に開きたる路を違ふことなし……汝は休む、而して之れ夜なり。汝の眼輝き出づる時我等照さる。オ、我等をして、空を揚げてヌートの胸の上に船盤を浮はしむる神に光榮を與へしめよ。*Eni* は諸神と人間と彼等凡ての子孫とを作りし者なり。凡ての陸と國と大海とをば『地をしてあらしめよ』てふ彼の名に於て作りし者なり……日ごとに生み出さるゝ赤兒、如何なる路をも越ゆる老者、達し得べからざるの高き、

次のは、Thotes の大神 Anon に献げたる讚誦の拔萃である。之は Brak 博物館の所藏中にあつたもの。

汝を祝福す、アモン、ラーよ、地の王位の主よ、天の老者、地の最古者、一切存在の主、諸物の支、萬物の支、彼れの作品中の一つ、諸神中の唯一、諸神群中の美牛、凡ての諸神の首、真理の主、諸神の父、人の作者、動物の作者、草の作者、家畜の養育者、プターより生れたる善き力、プターには諸神幸榮を歸す。…最も光榮ある者、恐れの主、己れの像に形どりて地を作りし者の首、彼れの思想は何れの神にも勝れて、如何に大なるぞや、汝を祝福す、ラーよ、眼に見えぬ堂に住める法の主よ、諸神の主よ、命じて諸神を作らしめたる船中のチェブラ、人間の作者 Anu …… 彼等に生を與ふる …… 惱める憐れなる者に聞き、彼の泣く時心のやさしさ …… 賢き格言を與へ、意のまゝにナイル河を溢れしむる智慧の主、來りて人間を活かす最も愛すべき慈悲の主、天空より進み來りて各の眼を開く者、樂と光とを起す者、諸神は彼れの善を悦び、彼を見る時彼等の心蘇る、テベスにて拜まる、Obelisk (Helopolis) の家に高く冠せる、オ、ラーよ、生命と健康の力の君よ、凡ての諸神の君主よ、地平の直中に見らるべき者、過去の時代と下界の支配者、彼の名は彼の被造に秘めらる …… 汝、多くの手を持てる一つ

唯一つの者を祝福す、汝は凡ての人間の眠れる間覺めて、其被造の中の善者、即ち萬物の支持者アモンを求め出さんとす、地平のトムと Horus は言を盡して汝を恭敬す、汝を祝福す、汝は我等の内に住へばなり、汝を拜す、汝は我等を造りたればなり、

次のは、Remeses 二世の祈禱である。かやうな祈をする王様は餘り多くはなさうだ。

「然らば汝は誰ぞや、オ、父アモンよ、父にして其子を忘るゝことあるか、汝の意に逆ふ者には憐なる運命こそ慥かに待てるなれ、汝を知る者は幸なり、汝の行は愛の充てる心より出つるなればなり、我汝に請ふ、オ、父アモンよ、我の未だ知らざる多くの民の中に在る我を見よ、凡ての國民は我に反して結び、而して我は獨なり、我と共にする者はあらず、我の多くの兵は我を捨て、我の騎兵の中一人の我を求むる者あらざりき、我彼等を呼びし時、我聲に耳傾けたるは一人もなかりき、されど我は信ず、アモンは百萬の兵よりも、十萬の騎兵よりも、一萬の兄弟と子とよりも、彼等盡くを集めたるよりも、我には尊きことを、多くの人間の所作は空なり、アモンは彼等を服従せん。」

次のは、Plah-hotep の書中のものであるが、此書は世界最古の書と稱せられてゐ

る。パリの博物館にある此書の原稿が果してモーゼ出誕前數百年に於て誌されたものとせば、世界最古に相違ない。但し、もしそうだとすると此記者は埃及第五王朝 Assu Nubkara 王治下の人となるのである。

「汝若し賢人ならば、汝の子を神の愛の中に育てよ。神は從順なる者を愛し、不從順なる者を憎む。善き子は神の賜なりと云はる」と。

又 Ani の格言の中には次の言がある。

「神の殿は言多き發表を恐る。愛の心もて、言葉密やかに、遜りて祈れ。彼は汝の事業を護らむ。彼は汝の言に聴かむ。彼は汝の献げを受けむ。」

「世界の神は天涯の上の光の中にあり。彼の徽章は地上にあり。毎日拜まるゝは此等なり。」

最後に、所謂「死者の書」なるものを掲げやう。

「我は一つの小兒を殺したる事あらず。一つの寡婦を虐げたることなし。一つの牧者を虐待したることなし。我の日(生存中)には一つの乞食あらざりき。我の時何人も飢へざりき。饑饉の年の來れる時、我は國の南北の境迄凡ての田地を鋤き其住民を養ひ彼等に食を供したりき。其中に一つの飢ゆる者あらざりき。而して我は

寡婦をば恰も其夫あると等しからしめき。

又他の刻文には

「正しき事をなし、惡しき事を憎みて、我は飢ゆる者にはパン、渴く者には水、裸なる者には布、乏しき者には隠家なりき。願くば我の彼になしたる事を大神は我になし玉はんことを。」

等、いくらかく出せば切がない。此位にしてをく。兎に角、埃及古文學の研究は日に盛である。若し眞の學者的精神を以て之を續けてやつたならば、埃及は向來、宗教學者に取りての無盡の寶藏の一つとなるであらう。とは私の疑はない所である。

さて是から、アフリカの黑人共の觀察に移らう。輒近、其言語及宗教に就て研究をした人々は僧正 Colenso 同 Callaway 博士 Bleek 同 Hahn 此等何れも信憑するに足る學者である。殊に Bantu 族に關しての研究が多い。此種族は東岸から赤道を超へて喜望峯に至る一帯の地を占めてる蠻人である。今日も尙明白でない事柄も随分ありはするが、彼地に居る傳導師等が何れも大抵彼等を稱賛して居る事は特に吾人の注意を價するのである。今日續々耶蘇教になる者があり、若し其實甚少ないが、別に怪しむべきでもない。カラエー氏によれば、若し時英軍の砲撃を實地

に經檢した所の土人の一老婦が其子等に曰ふには、天地を震憾する程の事をする者は何事に於ても誤る筈がない。宜しく彼等の宗教にも歸依すべきだと。されば弘教の望は十分ある。併しカラエー氏は直接傳導よりも寧ろ他の方法を探りて學校教育を盛にするやうと勉めて居られる。蓋し氏の説に以爲らく、基督教は未開の人心よりも開化の人心に於て榮え易いからだ。氏に信服してゐる一つのツル人が氏に謂て曰ふには、天に御座す王様の事に就ては君等白人から始めて聞くといふ譯ではない。夏日雷鳴の際には私等は王様が戯て御座ると云ふてゐます。そうして若し誰かビク／＼怖がりてもすると、年老いた人達が「ハア、貴様は王様に、屬してゐる物を何か食つたな」と云ふ。私共小さい時分には度々こんな言葉を耳にしました。其時年寄連は天の王様を指しするのが御定まりでした。併し其王様の名は聞きませんでした。只王様は高い所に御座ると云ふこと丈覺えて居ます。而して此世界を御創造なすつた者 (Undabuko) は其高い所に御座る王様であるとも聞きました。又嘗て之も矢張り高齢の土人の女の話しに、

「私共が穀類の起原オコリに付て尋ねたことがあります。穀類は一跡何處から來たのでありませう」と云ふと、老人は、それは萬物を御作りなされた造物者から來たのだが、

我々は其造物者を知りはしないのだ」と申す。それで、私共は續いて、其造物者は何處に御座るのか、酋長様には、我々はよく御目に懸るではないかといひます。と老人は頭を掉て、我々の見た酋長様も亦造物者が御造りなされたのだ。そんなら其造物者はどこに御いてになるのか、我々はちつとも御見掛申した事がないではないかと問ふと、老人は天を指して、造物者は天に御いてになる。そうして、其處には一つの國があつて民が住んでると。又彼は諸王の王であるなど、は常々父上が語られた所であります。又こんな村、即ち雷に打たれた村では人々が、天が家畜を御食べになつた。王様がこの村から家畜を御取り上げになつたなど、いふて居るのを屢耳にしました。又雷が鳴る時は、ナアニ王様が御戯して御座るのだと人々は申して、心を強ふしてゐました。

次のは Amantanja 種族の一老人で Ushaka の戰で負けて四つ手傷を受けて其痕跡がまだあるといふ、其長老の物語りには、

「我々共先祖代々の信仰はこうでした。父や祖父が申しますに、Unkinkulu と云ふ地から生れ出た男があると、又常々彼等は、天に一つの王様があると云ふていました。又雷が鳴つたり、霞が降つたりすると、王様が武裝してゐられる。王様が霞をふ

らさうと思召す。萬物に秩序を御授けになるのはアノ方だ……一切生類の根元はアノ方の外にはない……又「生物の源 (Urdhlo) は上にある。それが人間に生命を授けるのだ」とか又「雨は王様から來るのだ。太陽も彼から來たのだ。又御月様—人間が夜道を安全に歩めるやうと白い光を御授けになる御月様も亦彼から來たのだ」など常と々云ひ聞かされました。又雷が落ちて家畜が死んでも人々は困まつた顔もしません。王様が自分の爲めに、自分の所有の食物の中から御殺しになつたのだ。元來家畜は御前達の者でない。皆王様のものだぞ。王様は腹がすいたから、自分の爲めに御殺しになるのだと云ひました。若し又一村が雷に打たれて牝牛が殺されることがあると、此村は是から榮えるだらうと云ひ、若し打たれて死ぬる人間があると、王様が彼奴を御叱になつたのだと云つて居ました。』

造物者の一名は *Hongo* (靈の義)とも云ふそうだ。次のも矢張り一土人の話、

「イトンゴとは死んで又後蘇つた人間をいふのではない。人間と家畜とを支へ保つ所の地の支保者を云ふのだ。支保者とは我々の生活してゐる地を云ふのである。之によりて我々は生活することができる。之がなくては生存し得られぬ。之によりて我々は存在してゐるのである。以上カラエー氏「ウンクルンクル」に據ると。右いく

つも土人の談話を擧げたが、是に依りて見れば、何等宗教的生活もなく宗教的觀念も有てゐないと思はれてゐる所の此等野蠻人と雖尙、不可視的の神があつて萬物の作者で、天空に住して居て、雨や霞や雷を送つてよこし、悪人を罰し、又山上の家畜の中から供犠を取つてゆくとほどの事は信じて居るのである。

序に一言するが、宗教を観察するには餘程注意を要する。試に一つの支那人か又は印度人が我英國へ來て、石炭コークつヒューき輩の談話を聞いて國へ歸つて、そして英國人の信仰は是の如きものなりと報告するとしたなら、吾人は如何なる思をなすであらうか。かくの如くにして採集した材料の中の神なる名はどんな意味のものだらうか。英人や獨逸人が嘔オムスすると神汝ゴッドを祝福ブレスすと云ふが、其中の神以外の者ではあるまい。カラエー氏が、ツル人に就て調査をやつた時、最初に知り得たる神名は此類のものであつた。 *Dinko* てふ神名は恐らく傳導使が彼地へ渡ってから出來たものだらうと思はれたので、氏は之をさる土人に尋ねると其答へに「否、ウチククソ」といふ語は英人から教はつて始めて知つたのではない。昔から我等の用ユツクつてる言葉だ。人が嘔する時は、願カミくはウチククソは我を永久トシに愛願せられんことをと云ふのが常である。此ウチククソはウンクルンクルの爲めに隠されてしまつた。今は何

人も視ることとはできない。人々はウンクルンクルを萬物の創造者だと云ふが、夫れはウンクルンクルを作つた所の彼を人々は見得ないからだ。ウンクルンクルを神だと云ふのも夫故だ。……』

さて吾人は上來、未だ何等の積極的信仰に達してゐない所の蠻人共に就て述べたが、今茲に、丁度之れとは反對の極端の者、即ち、もはや何等の積極的信仰に執着しない底の標本を出そう。

左に掲ぐるのは、^{Faizi} Faizi と云ふ人の言葉である。氏はアクバー帝の顧問 ^{Abul Fazl} Abul Fazl 氏の兄弟であるが、思ふに氏の如きは當代にありては異端外道と排斥せられ而かも後世からは聖人、殉教者、地の鹽、世の光などと稱賛される類の一人であらう。即ち眞の信、同類に對する眞の愛、眞神の信仰を持せる人で、其所謂神は不可言説、不可思議で、而かも眞の信者の胸中に永久に存しゐる所のものである。

「ファイチの ^{Divan} Divan を以て、千の宗派に屬する自由思想の驚くべき發表の例證とせよ。

^I 我は塵となれり、されど、人の、かゝる塵より起らんことは我墓の香にて知られん。ファイチの終は始より知られん、彼は仲間なしに世を去り、又仲間なしに起つ。

過去の事、許されんと云ふなる復活の日の會議には ^{Kashf} Kashf の諸罪は基督教會の塵の爲めの故に許されん。²

1、「ファイチ」には又心胸の義あり、

2、回教の所謂罪は基督教の所謂塵と同様無價値なり。復活の日に於ては回教徒も基督教徒も同じく其教義の無益のものなることを見るならん。地上に於てこそ人は宗教に就て異同の争もすれ、天に於ては唯一つの眞宗教、即ち、神靈崇拜あらんのみとの意なり。

オ、永久より存し永久の間存する汝よ、眼は汝の光に耐ゆる能はず、讚美は汝の完全を言表はす能はず。

汝の光は理解力を溶かし、汝の榮は智慧を誑かす。汝を考ふれば徒らに理性を損壞し、汝の本體は思想を混亂せしむ。汝の靈性は宣言す、汝の智識を探らんとするも人間の冥想の血滴の徒らに翻し去らるゝあるのみと。

人間の理解力は塵の一元子に過ぎず。
汝の戸の番人たる汝の嫉妬は、人間の思惟の面を撃て凹まし、人間の無知の背頸に掌打を與ふ。

科學は、汝の完全へ達せんとする途上の砂漠の砂の如く人目を盲にす。文書の町

は汝の智識の大世界と比して一小村なるのみ。
我足は、聖賢だに迷ふ此道を旅するの力なし、此酒の香に耐ゆる力なし、此酒我心を亂す。

人の所謂先見も理性の案内も、汝の榮の町に入りては只眩みよるめくのみ。
人間の智識と思考と相合して僅に、汝の愛のいろはの第一字を綴り得んのみ。
知識に於ける初學も先進も共に汝に合一せんと熱中す。さはれ初學は空談するのみ、先進は戯言するのみ。

何人の腦も汝を捕へんとの考に充つ。プラト、の眉も此望なき考への熱を以て燃えたりき。

汝の嫉妬の刃は聖賢の肝臓をだに刺す。我如き無知の者いかで成功するを得ん。
オ、願くは汝の恵は我腦を清め玉はんことを、さらずば我不安は狂に終るべければなり。

汝の國の塵に額づき、さて後、汝を仰ぎ見んとするは、是れ信に於て正しからず、はた真理の許さざる所なり。

オ、人よ、肉と靈の二重の印ある貨幣の汝よ、我は汝の如何なる性質の者なるを知らず、汝は天よりも高く地よりも低ければなり。

汝の身には天界の像と下界の像とあり、天のをか地のをか、撰むは汝の自由にある。

汝の理性に背いて行動するなかれ、理性は信用すべき相談相手なればなり、汝の情性を妄想に被するなかれ、情性は嘘いふ愚者なればなり。

汝若し、自己の安寧よりも他者の夫れを撰めとの語の秘義を解せんとならば、毒を以て己れを、砂糖を以て他者を遇せよ。

汝若し民の仕ふる彼れに仕へんとならば喜んで不幸を受けよ。

希臘の智海に浴したる我は再び印度の深處より起てり、汝は嘗て此深淵、我知識の(に)陥りたることある如かれ、我に鑑みよとなり。

人若し我知識の面より蔽を徹せば、知識に於ける先進が確實と稱する所の事も、我には最も微なる思想の曙なるを見ん。

人若し我知識の眼より遮りを拂はば、賢者が天啓恍惚的知識と思へる事も我には唯の醉狂なるを見ん。

我若し我心中の物を持出し得んとも、我は時代の眼之に耐ゆるやを危む。
 我の器は、時の友誼の酒を要せず、我自らの血は我熱狂の酒の基なり。

私は古への諸宗教を研究するには宜しく此精神を以てせんことを願ふのである。何となれば研究を積み積むほど世には全く偽なる宗教てふものゝないことが愈々明に感ぜられるからである。否或意味から云へば各宗教は何れも唯一の眞宗教である。各時代の思想、言語、感情に適合せるものである。其時代に於て可能なる唯一のものである。と云へば或は難して曰ふてあらう。果して然らば、かの小兒や娘を火で焚いて供物にする所の Moloch 崇拜でも眞宗教であるか、神聖なる殿堂内に淫猥を事とする所の Mystica 崇拜や Kali 崇拜でも眞宗教であるか、はた又德行と冥想を積んだ其最後の褒賞として靈魂の滅盡を標榜する所の佛教の如きも眞の宗教なるかと。ア、是れ豈眞摯なる議論ならんや、是れ只黨派的私争なるのみ。此論法て云はゞ、此説を駁するに骨は折れん。三位一體説を奉ずることを屑しとせず、マツヤや聖者崇拜を頑然として排斥したる千古の賢人を、刑もあらうに焼殺したのは何宗教であつたか、それが眞宗教と云へるか。寺院の聖なる壁の後に淫行を隠

してをいた宗教は眞宗教であるか、或時期に於て懺悔しない罪人は免赦若しくは救済の道は絶えて只永久の刑罰あるのみと宣言した宗教は如何であるか。

ア、此論者流の精神を以て宗教を研究する者は、私は斷言する、かゝる輩は其眞目的を達して神聖なる淵源に到着することは永恆其期あるべからずと、論者の云ふ所の事の如きは何れの宗教にも附隨せる弊害である。宗教の排泄物である。避くべからざる排泄物である。かゝるものを見て宗教を批判せんとするは、病院を見舞つて其全國民の健康を、凡て皆是と判し、獄舎を訪ふて其全國民の道徳を評せんとすると異なる。吾人若し眞に宗教を知らんと欲せば、其創立者の胸中に立入りて之を求めんければならぬ。それができなければ、静寂なる書齋か但しは病室に是を尋ねるが、賣卜者の群や僧侶會議に求めてはならない。吾人若し宗教は理知の能力に従つて應化するものだ、と心得て、それを胸に持つて宗教を観察すると、迷信偽教と見ゆる所にも尙眞宗教の存してゐることを發見して驚される事は甚屢であらう。

宗教の目的は何處に於ても神聖である。如何に劣等な宗教でも必ず人間の心を神の前に据へるものである。勿論下等な宗教の神の觀念は不完全である、併し如何

に不完全なるにせよ、それは其當時の人心が捉へ得る所の至高完全の理想だ、宗教はかゝる理想の前に人心を置いて、之をして其日常の善の水準以上に引揚げる。少くとも一層高等なる善良なる生活を渴仰せしむるものである。

古代の宗教觀念及宗教感情の發表は甚だ小供らしいもの、否時としては不敬で忌むべきものもある。されど、小兒の舌のまはらぬ片言カクゴトは親は慈愛を以て聞き分け、てやらねばならぬ。人類の小兒期に就ても亦同様である。小供の言語は無邪氣なもので、其不敬度もさほど不快を感ぜしめないものだ。ある時、さる小兒が、オ、私しは唯一人で遊んで神様の御覽になることができないやうな房ヒツが、澤山とはいはぬ只一つていゝからほしいと云ふたのを私は聞いて、かの David の讚歌中の「何處に行けばや、我は汝の靈を避け得まし、何處に行けばや、我は汝の眼より逃れ得まし」よりも遙に切實に愛ぐるしく感じて、惡氣ニクキはそれほどしなかつた。

が、古宗教の言語も此通りである。今日でこそ吾人は事もなげに神の「遍在」だとか「全智」だとか云ふて居るけれど、昔はをかしい事をいふたものだ。ヘシオドは、太陽をば「萬物を照覽するツェウスの眼」だツェウスと云ひ、Arctus は「凡ての町凡ての市はツェウスに充てり、海も港も……我等も彼れの子孫なり」と書いて居る。又エーダの一詩人は、

ルーナに就て左の如き言を述べて居る。但し此句は、グシスタよりも後代のものである。

「此等の世界の大きな主は、恰も直傍チキナにある如く見玉ふ。人若し自ら密かに歩みつゝありと思はんも、諸神は凡て之を知り玉ふ。若しくは立ち若しくは歩み若しくは乗らんとも、若しくは寝ねんとし若しくは起きんとすとも、二人の者相座して、囁語ナソコトを王ワルーナは知り玉ふ。彼は第三者としてそこにゐますなり。此地も亦主なるワルーナに屬す。此廣き空も其遠き極までも、二つの海空と大洋は、ワルーナの腰なり。彼は此水の一小滴の中にも含まれ玉ふ。空を超えて遠く去らんとする彼、彼さへもワルーナを逃るゝ能はず。王ワルーナは天地の間にある者及彼方カクカタにある者の凡てを見玉ふ。彼は我等の瞬ヒトシを數へ玉へり。戯者其骸子カクシを投ぐるが如く、彼は凡てのものを定め玉ふと。此等の言は或は神の威嚴を傷けるかの如き所もないではないが、それが三千余年の古しに於ててきたものと思へば、吾人は寧ろ其潔純と深遠とに驚ざるを得ないのである。

嘗て印度人で基督教に歸した者が私に語つて曰ふには、私は國に歸つて、國の人に向つて、凡そ新舊二約書以外の言語は一切無意義である、など、主張して彼等の感

情を害しやうとはさら／＼思はない。寧ろ印度の哲學者詩人さては道德家等の言
 行に訴へて、夫等を我光て照らし基督の精神を以て彼等と論究しやうと思ふ。近い
 一例を擧ぐれば、印度人の諺に「最大たらんと欲する者は最少ならざるべからず」と
 云ふのがある。之は決して無意義でない。耶蘇は「汝等の長たらんとする者は汝等の
 奴となれ」と云ふて居る。埃及へ行けば美しく刻んだ石の断片が残つて居る。之を見
 れば當時の大建築が彷彿し得られる。印度に行て、人民の通常の言句を調査すれば
 印度の宗教は如何に壯大なものであつたかゞ分る云々」と。

この事は又同じ名の北米の印度人に付ても云ひ得られるのである。但し二者の
 宗教思想は宵壤の差はあるが、面白い話がある。最初彼地に赴いた傳道師は土人が
 汎神思想をもつてゐるのに吃驚したと云ふ事だ。其仔細如何と云ふに、Roger Williams
 の云ふ所によると、印度人は英國人の船、大家屋、書籍、文字、耕作などを見る毎に、*Ma-
 htoewack* (彼等は神だ)とか或は *Ommehittoo* (汝等は神だ)と云ふたさうである。如
 何にも汎神觀である。併し此汎神觀は、近來の言語研究によると、彼等の思想の發達
 から生じたのではなく、全く彼等の言語の曖昧的性質に由來してゐるのらしい。案ず
 るに *Manito-manit* 複數 *Manitôg* が最上神の義をもつてゐる事は疑はれない。La

Fontaine 氏は理解力に超越して、其原因の知り得られざる一切の者と解してゐら
 れる。併し此 *Manit* てゐる語は、*Dyans* 又は *Zeus* の如く元來は天空、太陽等の自然
 現象の名から出て後に *Dera* 又は *Deus* の如く、神聖なる者の名となつたのでは
 ない。若しかの語學者等を信ずべしとせば、此語は最初から抽象的觀念の名であつ
 たのだ。即ち *Anit* は超越する、超過するなどの義の、一つの働詞の假定分詞で
 之に接頭語がくつついて *Manit* となつたのである。而して *Anit* は同じ働詞の非人
 形(現在指定)で「より多く又は寧ろ」の義である。然るに印度人は最上神を *Manit* と
 稱するのみならず、男女、禽獸、虫魚等の卓越せる者に接する時は何時も *Manit* て
 む語言を發するので、此際は「過度」「異常」「奇怪」等の義をもつてゐるのである。最初の傳
 道師等を驚かした時の *Manit* は實は此意味であつたのだ。此語の此二様の意味
 は印度人の心中には常に並存してゐるであらう。若し然りとせば、之は言語が思想の
 上へ與へたる感化若しくは化石せる思想が活ける思想の上への感化の一例であ
 る。但し此場合は多語一義 (Polynomy) から來たのではなく、一語多義 (Homonymy)
 から生じたのである。兎に角、是は *Manit* だ、と云ふのと、是は *Divine* だ、と云ふのと
 は結果に於てはツマリ同じであるけれど、*Dyans* は天空の義の *Dyans* から出

たのだし、マニツトはそんな起元のものではないから、兩者は其過程に於て異なつてゐるのである。

實に、古語を取扱ふのはむつかしい。殊に宗教に關して然り、抽象的觀念は比喩によらなければ發表し得られぬ。古宗教の語彙は残らず比喩から出來て居ると云ても過言ではない。今日の吾人は空を考ふることなしに天を、放免を考ふることなしに宥恕を^{オホヒ}考ふることなしに啓^{ヒキ}示^シを考へ得るが、古代人には中々できなかつたのである。古代語に於ては以上の諸語は勿論のこと凡そ感覺的事物に關せざる語は盡く中間段階にぶらついて居る。精しく云へば、其類の語は何れも、半物的、半心的であつて、唯、語る者と聽く者との能力に應じて其何れの方面か、或は高く強くなり、或は低く弱くなるのである。此事は實に古代の神話及宗教に存する凡ての誤解の源泉であつて、此源泉は萬古に涸るゝことなきものである。凡そ宗教の生長發展には二箇の相反せる傾向が行はれてゐる。人心は、一方に於ては、言語の物的性質に反抗して其硬き皮殻を破り、向上して之を抽象觀念に適合せしめようと勉める。他の一方に於ては、茫漠として通し難き抽象的意義を、捕^{ツカ}へ易き俱象的のものに調攝し緩和し、高遠なる心的を、卑近なる物的に引下さんとする。宗教の言語には絶間

なく此二作用が行はれてゐる。此動反動の趨勢は太初より存し現今に於ても尙見らるゝ所のものである。

人間の思想上の此進退二潮動は各の時代に於て、父と子との間、母と娘との間に行はれ、如何なる宗教も免れ能はざる所であるが、一見しては宗教を破壊せしむるの恐があるやうである。けれども仔細に觀察すると、中々、かゝる進潮逆潮其者が宗教の眞の生命であるのだ。試に空を拜ひて居た人間等の位置に我身を置いて考へるがいゝ、空を拜すとか、或は「空は神なり」と云のは之れは或意味に於て眞である。併し我々が今日所謂神の意味で云ふならば、かゝることは不可能である。思想及言語の初期に於ては、吾人の今日云ふ意味の神や或はデウス、ツェウス、デーヴ等の如き一般的賓辭は決して存して居なかつた。又存し得なかつたのである。古宗教を解せんとすれば先づ古語を解せんければならぬ。凡そ言語の最初の材料は何であるかと云へば、感官を通じて受け納れたる印象より外にはない。夫故に「燒く」「光る」「温むる」などの意味の根語は太陽や空を表はす名として用ゐられることになるのである。然るに今翻つて空の名が其物的の對象から引離されて、空とは全く異なれるものゝ名となる迄の間の心内の過程を想像して見ると、抑も人間の心内には最初か

ら、自分は不完全な者、脆弱なもの、依屬的のもので自由な者でないといふ感じが存して居る。此感情は恰も、小兒は何故飢渴の欲を感ずるかと云ふと同じく説明すべからざる原的事實である。最初より存し而かも今も現に存して居るものである。人間は何處から來たのであるやら又何處へ去るのであるやら、自ら知らない。憐れな迷ひ子である。そこで彼は一つの案内者がほしい、一つの友達が欲しい。彼は己れの信頼し得る或者を求め、天にある父の如き或者を要する。彼は外界より來る諸種の印象の外に、内面より來る強き一つの衝動、一つの歎望、一つの渴仰を有て居るのである。他の一切の諸物の如くに流轉することなく、過現未を通して其存在を保ち、萬物を支持し、恰も異域の如き此世界の直中に於て之に對すれば人をして宛然故郷の思をなさしむる底の或者を要求するのである。而して此或者に對する漠然たる渴仰が定まつた形を取る爲めには一つの名が必要となる。即ち、其者に名を附けなくては十分明瞭に之を把握し得ぬのである。然らばどんな名を選んだがよからう。當時、言語の貯蓄は乏しくはなかつたらうけれど、其何れもシツクリ適合するやうなのは一つもない。其思想に自由と光明を與ふるに足るものは一つもない。どこか却りて其多くは其思想を束縛し暗昧にせんと擬するのである。けれども兎も

角、終に、一个若しくは數个の名が撰定された。此等の名は不完全であつたに相違ない。併し不完全ながらに幾分の満足は得られたであらう。けれども、必竟するに、心中に横はれる廣大無邊のもの、只の一部分の記號に過ぎない。かの、光れる空てよ名は何れの國民も何れかの時必ず用ゐたとし思はれるものであるが、此名が採用された時、之れは心内の無限者を遺憾なく十分に言ひ表したる名であつたとは思はれない。之によりて十分の満足が得られたとは思へない。天空、其者が神と認められたのであるとは決して思はれない。人々は目もて見らるべき天空の何たるかを現によく知つて居るので、而して名の發見者も夫が到底失敗であつたをよく知つて居るのである。が、唯、かの光れる空は最高のもので、唯一のもので、不變で、無限であるのかの無限者に名を貸し得る者は之の外には一つもないのである。だから已むを得ず其名を附けたのである。發明者は決して、此現に目で見えてゐる所の青き空を其神と同一物と思ふたのではないことは明である。

今此空てよ名が與へられ、而して人々に受けられたる際、如何なる事が起り來るであらうかを考へて見るに、先づ之を發明した者は男らしき人、詩人、預言者等の類に相違ない。創世紀三十二章のヤコブが神と角力する譚は、神の觀念を捉へ之に適

當なる名を發見せんとしたる努力煩悶の比喩である。然るに此名が幼者、老人、愚民、老婆間にも弘まつて彼等の勝手の使用に任せらるゝに至れば、必ず誤解が起てくる。之を防がんとするも到底不可能である。乃ち向下的運動が始まる。其第一步は天空を、かの實在者の居所と見做すことである。第二步は、名の背後の實在者は全然忘却されてしまひ、天空其物を拜み、或は之に雨を祈り、或は日々の糧を乞ふやうになる事である。最後には、可視的の天空に關する事柄が、其同一名を有する者へ遷し附けられて種々の物語が発生して來て、眞神の痕跡は堙滅せられて仕舞ふ。

此種の誤解を稱して、宗教の言語的盛衰、若しくは言語的生命と云ふべきである。宗教の言語には此種類の變態變様は實に無數であつて、以て、嘗に宗教の盛衰のみならず、宗教の生命をも解釋し得られるのである。Jacob Grimm氏が嘗て、南、北獨逸語の別、サンスクリットとブラクリットの別、及ドリヤ語とイオニヤ語との別の生じたのは全く、男子の言語と女子及小兒の言語との差から起つたのであると論じたが、宗教の言語にも又同様の並行的流脈が見得られる。宗教の言語にも高等なものがある、下等なものがある。廣いの、狭いの、大人に適するの、小兒用の、僧侶用の、俗人用の、喧しき市井間の、靜なる書房内の、などそれ／＼相異なつて居る。併し小兒は

其襁褓裡の言語を脱せんければならぬと同じく、宗教に於ても其女性的言語は進歩して男子的のに遷り行かねばならぬ。併し此際は、必ず抗爭が起る。此抗爭は間斷なく復起するもので、之は己れを回復せんとする消すべからざる欲求である。而も之は又宗教をして全然的衰頹に陥らしめぬやうにする効用を有て居る。此等兩極の間には最初より最終に至る迄、絶不絕動搖があつて、一進一退、若し一極の引力が余りに強くなる時は健全なる運動は中止せられ、萎靡沈衰を來す。或る宗教が若し一方には小兒の能力には適しながら他の一方には大人の要求に應じ能はぬやうな事になると、若しくは其反對の場合でも、其宗教は既に活力を失つて居るのである。かくの如くんば、其宗教は迷信となり了するか、然らずば只の哲學となり了するのである。

之を要するに、私が、一切の宗教には眞理があると云ふのは例へば、天空てふ神名は物質的意味で解しては全く虚妄だが、高尚なる意味で用ゐられてあると見れば正眞であると云ふのである。前述の如く實際上の心的過程に於ては、決して、神の觀念と天空とが同一物とせられたのではない。そんな事は不可能である。かゝる名は神の顯著なる方面の、少くとも一部を接近的に若しくは比喩的に表示したものに

過ぎぬのである。かゝる名を作つた御當人は其當時物質的の天を意味せしめたのではなく、今日の吾人の所謂天國と同じ程の意味をもたした積りであつたらう。さて又古宗教は大抵奇怪荒唐人を驚かす底の性質を有つてゐるが是も古語の性質をよく腹に入れば全く理解し得られるのである。古語は *Synonym* (同義語) に富んでゐる、正しく云へば *Polyonymous* (多名的) である。近世語こそ殆んど一物には只一名があるのみなれ、古の希臘語、アラビヤ語、梵語等に於ては同一物に其異名頗る多し、但しこは怪しむには足りない。蓋し其各の名は其物の一面、だけの性質を表はしたものであるから、若しも其一方に偏してゐる名に不満足を感じずる場合にはいつも新名を作るのである。故にいくつもの名が出さる。それが時を経るに従ふて其内で特殊の目的に適ふやうなものは保留されて後まで残つて行く。例へば「天空」は「光れるもの」のみならず或は「暗きもの」とか「蔽へるもの」とか「雷鳴するもの」とか「雨降らすもの」等の名が附くのである。之れは言語上て所謂 *Polyonymy* (多名語) と稱せられ、宗教上ては *Polytheism* (多神教) と稱せられる所のものである。然るに無限者に向つての渴仰は先づ之を「光れる空」と呼んで満足した處が又此同一の渴仰が場合によつては其神を「天空」の他の名例へば「暗き空」とか「畏ろしき空」とか「全能の空」と

呼ばしめる事がある。ヂャウスの外に「ブルーナ」が出来たのは全くかういふ風であつたのだ。それが後には分れて全く獨立の神となつてしまふ。かくて段々多くの神ができるけれど、神の圓滿と無限とを言表はすにはどんな名を持ってきても不適當で不完全であるから、苟も神に近似せるものは天地間に於けるありとあらゆる盡くを採り來りて遍在者の名とするやうになる。暴風に於て神聖者の存在が見出さるれば暴風、地震や火焰に於て認めらるれば地震や火焰が何れも其名とせられるであらう。

されば多神教及神話の發生豈怪むに足らんや。蓋し免るべからざる勢である。之れは宗教の幼稚語 (*Parler enfantin*) である。併し世界には小兒期があつた。小兒の如く語り考へ理解する時代があつた。其言語は其時代に取つては真正のものである。と同様に其宗教も其時代に取つては真正のものである。然るに大人の語を以て小兒の語を解せんとし、古代語を其文字通りに、即ち近世語的に、東洋語を西洋語的に、詩歌を散文的に解釋するならば如何であらう。其誤りは解釋する吾人の方にあつて、決して解釋される彼の方にあるのではなからう。今日にありては舊約書の「エホバ」の口唇息などを其文字通りに解する輩はもはやあるまい。

Per questo la Scrittura condescende

a vostra facultate, o piedi o mano

attribuisce a Dio, et altro intente

Dante 'Paradiso' IV. 444f.

(されば聖典は我等の力に ふさはしくものせるなれ。

神に手足のありとし書けるも 其儘の意味ならじ)

とはダンテの句、さても宜なる哉。

然り古代の言語は小兒の言語である。しかも吾人若しなまじむに之を排して一層抽象的な名辭を用ゐて、無限者神聖者に到達しやうとするならば、是れ梯して天に上らんとする小兒に類しはしまいか。

宗教に於ける幼稚語は決して化石でない。又亡びるものでもない。永久亡びる氣遣がない。我等の目には十九世紀の眞畫中にうるつく所の *Megatherion* (地質時代の怪獸) としても見ゆる印度の宗教にはかりあるのではない。新約書中にも澤山ある。耳で聞いたばかりではわかりつこのない。どうしても心胸で會得せなけりやならぬ底の比喩はいくらもくもある。

古代宗教に存する所の、恐ろし忌はしと見ゆるやうな事柄も、慈悲の眼光で解釋すると、其決して、然らざることが見出される。例へばバビロニヤの至高神 *Belus* が自らの頭を斬て其血と塵とて人間を作つたと云ふ譚は、本來、人間には神的生命の素質が存して居る、吾等人間は神の血統に屬して居る、彼の子孫である、とほどの意味を表はしたに外ならぬのである。古代埃及の宗教にも同様の觀念がある。太陽が己れを傷つけて、其血の流れから物を作つたと云ふが、是もバビロニヤのと同様にかの創世紀に、神は人を地の塵より作り其鼻の穴に生命の息を吹込めりとあるのと其眞底の意義に於ては毫も異なる所はないのである。

メキシコ國では *Huitzilpochtli* と云ふ祭の日には、小兒を犠牲に供へ其血と或植物の種とを混ぜて神の像を造る。祭の終になると一人の僧が来て此像を矢て射貫く。そして王様は其心臟の處を喰ふ。余の部分はそのらに來てゐる群衆に分配する。甚残酷なる習慣である。が、此神を喰ふといふ習慣も元來は象徴として工夫されたものであつたのだ。然るに後になつて、其眞の精神的意義は忘失せられ、其偽りの物質的意義が残りて、物質的の神を現に食ふ事になり、残酷なる呪物崇拜に陥つたのである。 (Windt, Vorlesungen über Menschen-und Thierseele. V. II. P. 262 ウント氏「人間

及動物の精神に就ての講義參照同一の慈悲の眼は他の諸宗教の典籍にのみならず、吾等自身の聖書にも與へられなければならぬ。所謂預言者の言説立法などは若し之を文字通りに解釋したならば難點は夥しく現はれ出づるであらう。併し若しよく古代の言語及思想を史的に了解する者から見れば此等の難點は聖書の眞實を疑はしむる材料とはならぬのみならず、却りて其時代に於ける純粹正眞のものたる屈強の證據となるのである。

而して我等自らの聖書に與ふると多くもあらず少くもあらずの慈悲を他の諸宗教にも許しやるならば、過ぐる三百年の其間、非歴史の見解の爲めに蹂躪し盡されたる所の彼の諸宗教の眞面目は燿然として露はれ來り、其眞價值眞地位は着々として恢復される事であらう。

宗教學綱要終

附錄

(一)

ポリネシヤの神話に就て

(ギル氏著、南太平洋諸島の神話及歌謡、Gill's 'Myths and Songs from the South Pacific' に序す)

人類の解釋に二つの相反せる見説あり。一つは向上的にして一つは向下的なり。一つは人間の思想は其原始にありては簡素朴純なりしが、後に腐敗し墮落したるなりとし、一つは、原始人は動物に僅に一步を進めたるものに過ぎざりしが、後漸次に發展進化したるなりとす。而して宗教に關しては甲は曰く、人間の心内には原始よりして、一つの超自然、無限、神聖、過境的なる或者を渴仰する素質存すと。乙は曰く、人性は最初にありては純平たる動物的受動的のものにして、環界の諸印象の爲めに所謂自然的過誤オナラミに陥り、茲に呪物崇拜、祖先崇拜、動物崇拜、天然崇拜等が發生し來るなりと。

此等兩説は、或意味に於ては共に眞理を有す、唯其何れかの一によりて一切を概

括し去らんとする時、何れも共に非眞理とはなるなり。宗教の眞の起原に就て確乎たる斷定を下し得る時期は未だ到來せず、恐らくは盡未來際到來することなけん。勿論吾人は今日、初期宗教に關して若干の斷片的知識を有せざるにはあらず、而かも、それを推究し行けば、常に必ず尙一層初期のもの、存せしを豫想せずんばあらず。或は曰く、最初の宗教は、呪物崇拜なりしならむ、何となれば此崇拜は既に動物に於ても見らるゝ所なればなりと、されど、呪物崇拜とはそも何ぞや、一つの樹、一つの石、一つの杭若しくは一つの動物等、人間の想像が偶然に選取したる或一物を暫時崇拜するの謂ならむ。是れ果して最初の宗教なるべきか、請ふ先づ記憶せよ、宗教と崇拜とは別なり、兩者は必然的に結合せるものにあらず、されど今一步を譲りて、之を然りとせんも、苟も一つの石を崇拜すると云へば、之を崇拜する者の心にては、所謂其石は、只の一つの石にはあらず、夫れよりもより多くの或者、即ち超自然的なる神聖なる或者ならざるべからず、故に一つの石の崇拜とは、一つの超自然なる神聖なる者に向つての信仰の外的發表の謂なるなり、されば超自然、神聖等の觀念は呪物崇拜より出て來るにあらずして、却りて、呪物崇拜は此等の觀念を豫想せるなり、必しも常に然りとはすべからざらんも、一般には然りとして不可なかるべし。是れ

と同様に、又祖先崇拜は不死の觀念、家族は理想的一躰なりとの思想、及死者の魂は神と同等の尊敬を價すとの信仰を豫想せるなり。

呪物崇拜の名は De Brooses 氏の始めて用ゐたる所なるが、此語ほど意義の漠然なるは他の學語中其比を見ず。

今日吾人の有する知識の範圍より之を見れば、凡ての宗教は呪物崇拜に始まり凡ての神話は祖先崇拜に始まると云ふは、嘘なり。世には呪物崇拜あり、祖先崇拜あり、又天然崇拜もあり、然り唯是等があるのみ、是等がありと云ふことよりもより多くの何者もあるにあらず、されば吾人の先づ勉むべきは、宗教、神話、崇拜の各形式を區別し分類して、其發展、盛衰の段階を調査し、之を社會の各層各級の中に追究するにあり、而して出來得べくは、特に彼等自らの言語にて研究せざるべからず、若し夫れ言語は果して思想及感情の發表なりとせんか、宗教的思想及感情を含有せるものの正しき了解は、必ずや之を言語の正しき知識に待たざるべからざるや論なけん。

宗教及神話に存する不合理的部分は、言語が思想の上に與ふる感化によりて説明し得べし、とは予が屢々唱導したる所なり、されど是を以て其凡てを説明し盡す

を得べしと云ひしにはあらず、唯神話の或部分は此方法によりて説明し得べしとなし、已に屢之を試みたるのみ、蓋し神話は、全躰としては、人間思想發展の途上避くべからざる或一時期を代表せるものにして、従つて其時代の一切の人心内の或範圍を包含せるものなり、神話の一部は宗教なり、一部は歴史なり、一部は詩歌なり、されど神話は全躰としては、宗教にもあらず、歴史にもあらず、はた詩歌にもあらざるなり、神話は此等一切を包括す、但し其發表形式は其時代にのみ自然的且つ可解的にして、そが傳説となるに及んで、不自然的且つ不可解的とはなる也、之と同じく天然崇拜、動物崇拜、英雄崇拜、呪物崇拜等何れも皆、宗教の一部なるには相違なし、されど其一をのみ舉げて宗教の起原若しくは發達を説明せんとするは不可なり、何となれば、其發達の諸方面に於ては、管に此等凡てをのみならず、尙より多くを包含すればなり。

さて、ギル氏の此著は學者に戒心を與ふる點に於て無比の益あるを見る。此書は Mangai の宗教及神話の記述なり、(マンガイヤは Hervey 群島に屬す。こは南太平洋上の一群島にして、南緯十九度より二十二度、東經百五十七度より百六十度の間にあり。)

先づ、ポリネシアの宗教神話が諸種の形を爲せることは頗る面白しとす。各島何れも夫自身の宗教的及神話的言語を有す、但し其内、凡てに共通のものあり、こは極めて古きものたるは明なり、ギル氏によれば、マンガイヤ島は他島に比すれば他國的感情を受けたる事最も少しとぞ、是此書に大なる價値の存する所以なり、マンガイヤの説話と猶太教、基督教及其他の諸古譚との間に一致あるを見る時、吾人は、こは歐人の旅行者が其種を蒔散したるにあらずや、若しくは傳導師等が自ら潤色したるによるにあらずや、と疑ふを禁ずる能はざるなり、ギル氏は特に此點に注意し、かゝる患なからしめんと勉めたり、氏は本書の編輯の間は一切他國の説話を遠け居たり、是れ無意識的着色を避けんとなり、以て其用意の周到を見るべし。

ポリネシアの傳説中に (Selected Essays vol. II. p. 456) に Eve (Ivi) の話あり、之は氏によれば、此地の或者が舊約書中の譚を聞きしことありて、夫れを自説に混入したるなるべしとなり。

又有名なるポリネシア神話の太陽英雄 Maui が顎骨を以て其敵を撃つ譚もマンガイヤにはあることなしとぞ。

右の事共は鎖々たるに似たれど、神話研究の上には重要なりとす、不合理的なる、

若しくは、馬鹿くしき様の事柄が二個の神話に於て相一致せる時、此二神話を同一起源と見るの説は最早破られざるべからず、何となれば若し夫れ、顎骨が武器として用ゐらると云ふ事の理由が一つの地方に於て存し得べしとせば、同一の理由は他の地方にも存し得べければなりよし、其如き理由は存せずとせんも、甲地に於て起りし若しくは起りしと假定せらるゝ事實は、乙地に於ても起りし若しくは起りしと假定せらるべければなり、かゝる一致に、始めて出會ふ時は、吾人は同一起源説に心引かるゝを免れ得ざるの感あり、さはれ、此類のものを見る事屢々なるに及んでは遂に之に左袒する能はざるに至るなり。

マンガイヤの説話の地獄は *Avaliki* 又は *Aviki* と名づく、人はそが佛教及バラモン教の地獄の一つと同名なるに驚かんとす、さはれ *Tahiti* 島にては *Hawaii* *Newzealand* 島にては *Hawaiki* と稱す、予の考にては *Sawaiki* なる名は一層古きものならんか、かく見來れば、結句、梵語とポリネシヤ語との間には何等の類似もあらざるなり。

マンガイヤ神話の太陽英雄を *Teia* と名づく、之も又埃及のと奇怪にも一致せり、さはれ尙注目すべきは、其ラーが擒となる譚なり、此類のものは希臘、獨逸、ペル

等其他の神話に多く見らるゝ所なり、拙著、獨逸工場よりの屑片 *Chips from German workshop 2nd ed. vol. II. p. 116* 参照)

又マンガイヤの説話に、*Teia* (月)が其戀人の老ひて弱くなれるを地上に送り返したる譚あり、是れ希臘神話の *Selene* と *Endymion* の譚、*Eos* と *Tithonos* の譚を想起せしむ、又エーダ神話の *Martus* (擊者、嵐神)が終には羅馬の戰神 *Mars* となりたる漸次的遷行の蹤跡を知れる者は、ポリネシヤの多くの神の内、嵐神、戰神、破壊神等の間の關係を見て、誰かは、人間思想の過程の、何處に於ても同一なるを認知せざるを得じや、但しポリネシヤの神名に *Maru* なるがあるは必竟、偶然の類似ならなくのみ。

ポリネシヤの傳説には、大洪水が四十日間、打續きたるを云ふ、此驚くべき一致は如何に説明すべきか、或は傳道師等の感化に歸し得べきが如し、されど只此一事を以て、俄に其同一起源を云ふべからず、偶然の一致なるやも知るべからざればなり、況んや或は、野蠻時代には今日の吾人の知らざる一種の天文的計算法の存せしに由るなきを保すべからざるをや、但し茲には、アメリカの傳説にも類似のものあることを引合には出すべからず、そは西班牙人より傳はりしなるやも知るべからざ

ればなり。併し此他 *Folio* 人の洪水説話、及其時、山が十五キュービット尺の深さ迄蔽はれたりとの譚の如きは圖らずの一致と云ひ得べし。(Bankroft 氏 'Native Races' V. 5. p. 20 参照)

又 *Chinalpopoa* の稿本によれば、造物主は第七日に於て塵と灰とを以て人間を造るとあり、第七日とは驚くべし、さはれ、此七と云ふ文字に、さまで重きを置かて之を見れば、吾人は寧ろ其驚く者を驚かむとす。そは、印度の洪水説話と猶太の夫れとの一致は尙甚しきものあればなり。否、雷に此二國間の「みならず、其他の國々にも這の種の類似は頗る多し、若し夫れ、是を以て皆其同一起源を云はゞ、其各の間の差異は如何に説明せらるべきか、但し茲に唯一つの驚くに耐ゆべき事あり、印度の傳説にては、洪水が、*Mann* に豫告せられて後、第七日目に於て始まれることはなり。されど、此第七日と云へる事は、只 *Bhagavata Purana* の書にのみ見ゆる所なれば、恐らくた偶然の一致ならむ。然るに或は云ふ、是れ印度人が猶太若しくは回教より借り入れる幾にあらずやと、されど、印度人がかゝる一小鎖事をのみ借り入れて、重大なるは、多事を逸したりとは頗る怪むべきにあらずや。こは學者の注意迄に因に記し置くなり。

さてマンガイヤの説話を讀むに、其何れもが、皆言語に由來せるものなるを思はしめざるはなきなり。マンガイ人が言語を弄するなるか、はた、言語がマンガイ人を弄するなるか、そは何れかなるべし。ギル氏も亦之を認む。されど氏は、一切を舉げて之に歸し去らんとするは不可なり、之れ鐵と鏽とを混同するの類なりと云へり。茲に神話研究上特に注意すべき一大事あり、他なし、抽象的若しくは哲學的性質のもの、は皆次位的若しくは後代的の者とする事はなり。かくの如きは蓋し多くの場合に於て然るは否むべからず、而も必然的なりとはすべからざるなり。蓋し神話の主なる源泉の一つは原因探求の欲望にあるなり、可見的を不可見的にて解釋せんとする欲望、即ち、經驗以外に超出せんとする衝動にあるなり。アールヤ族にては、人間の思索は俱象的のものに關する疑問に始まり、先づ空、日月、風等が神として寫象せられ、其の後、抽象的の觀念に遷り行きたるを見る。されど、アールヤ族の或者、特に印度人にては、最初よりして、超自然に關する哲學的思想の起らざりしとは確に斷言し得べからざるが如し、又かして、こにては神話的思想の二潮流、即ち、形而上的のと物質的のものが長くは並行することなく、やがて一つは哲學となり一つは宗教及迷信の材料供給者となれりしとも、確かに、は斷言し得べからざるに似たり。

今マンガイヤの傳説によれば宇宙 (Aviki) は耶子の穀の形をなし、一つの太き莖の上に位す。其莖は上方に行くに従ひて漸次に細くなり行きて終に點をなす。此點は人間とは異なる形の鬼にして、名を Te-nu-ia-roo と稱す。一切存在の根の義なりとぞ。之を讀めば身は宛然ブラーマナスやプーラナの中にあるの思あり。次に此點の上には Te-nu-gaengio と名づくる鬼あり。呼吸の義なり。次に Te-nu-ya-ion と名くる鬼あり。長生者の義なりとぞ。凡て此等を讀めば皆抽象的、思辯的、組織的の響あり。従つて後代的に聞ゆるなり。實に或は然らむ。而かも何故に然るや、何故に然らざることはあり得べからざるか。曰く何等の理由なきなり。唯其然るを知るあるのみ。

次に進んで耶子の穀の内部に入れば、其の底に一老女あり。肉と血とより成れる鬼にして。 Varimotakave と名づく。トツ始め直譯すれば「始又底」の義なり。但し彼女自らは只の抽象にはあらず。云ふ彼女は其自らの左の腹の一切れを摘出せしに、其一片は最初の間となれりと。而して此最初の間にて種々の説あり。彼は半は人、半は魚、一眼は人目、他眼は魚目、右腹に腕あり、左腹に鰭あり。一脚は通常の形をなし、他の一脚は半より魚尾をなす。又彼には兄弟もありて、彼は純然たる説話的性

格を具せり。されど彼は其の始めは天空の表示なりしや明なり。彼れの名は Aviken と云ふ。午の義なり。物語は云ふ、ヴァテアは二个の大眼を有す。但しそが同時に我等に見らるゝは稀なり。其一眼は通常人間の呼んで太陽と稱し、此處天界に於て見らるゝ所のものなり。他の一眼は月と稱し、アヴィキ(下界)に於て照ると。こは固より、只の神話にはあらざるなり。然るに他の神話によれば、日と月とはヴァテアの兩眼にはあらずして、共に活ける生物なりとせらる。而も何人も此二神話の互に矛盾せるを訝ることなし。蓋し是等は人々が之を理解し得たる間は眞實なりしなり。そが不可解となると同時に神聖とはなりしなり。

上述の如く不確なる事實に夥し。呪物崇拜、祖先崇拜若しくは神話全體をば言語の疾病と見做さんとする者よ、來りて、先づ自家の説を此マンガイヤの傳説に就て檢試せよ。是唯世界の全宗教及神話の一小片に過ぎざるなり。而かも自説は之をだに包括し能はざるを見ん。何ぞ況んや、全宗教及神話を説明し盡さんとするをや。

附録 (二)

ホソテントット人の神話

(ハーン博士著「ツイゴアム、コイコイ人の至高實在」Dr. Hahn's 'Tsui-|| Goum, the Supreme Being of the Khoi-Khoi' を讀む)

Hottentot 或は Hitenhitit てふ名は和蘭人が喜望峰に於て初めて見たる黄色人種に附したる名にして、蘭語にては「吃」の義なり。Dapper 氏によれば此土人の言音に一種奇異なる急 噪 聲ありしによるとぞ。又和蘭字典 Idichion Hamburgens には「裁醫者の緯名」とあり。兎に角、こは土民自らが稱する名にはあらず、彼等は自らを Khoi-khoi 即ち「人間中の人間」と稱し居れるなり、かく稱するは己等を Bushmen (Bojesmen) と區別せるにて、彼等は之を *Witlo* と呼び、犬よりも劣れる者となせり、されどハーン氏によれば、此二種族は元來同一族にして、言語も同じく、只前者は農業を、後者は狩獵を生業となし、の差ありしに過ぎず、然るに後に及んでブンメン中には方言數多生じ、終に互に相通ずる能はざるに至れりとぞ、コイコイ語にては語

根は皆單綴音にて、必ず母音にて終り、代名詞的接尾語によりて文法上の諸變化をなす。然るにサー語にては語根は多綴音なるが多く、此語は全體より見て、聲音學上の墮落及文法上の混亂著しとなす。ハーン氏は此兩國語を梵語と英語とに比せり、當らざるにあらず。

コイコイ語には數詞もあり、十進法にて秩序あり、ブンメンは從來、二若しくは三以上を數ふるに耐へざる人種なりと云はれたれど、ハーン氏によれば *Aibushmen* には二十迄の數詞はある由なり。

コイコイ人の奇習として記すべきは、男兒を呼ぶに母の名を、娘を呼ぶには父の名を以てすることなり。長女は最も尊ばる。梵語の *Duhiter* (娘は本來は「乳搾り」の義にて、即ち *Duh* (乳搾る)より來れるにて、希臘語の *θυγάτηρ* も英語の *Daughter* 等も是より出たるなるが、女子の地位の相同じきは面白からずや。今ハーン氏の引用せる一小歌を譯出す。歌に曰く、

我れの女獅子よ、
汝は我が汝を誑さんと恐るゝや、
汝こそは軟かき手もて牝牛の乳を搾るなれ。

我を噛みませ(接吻せよ)

我が爲めに乳注ぎませ!

我が女獅子よ!

大ひなる人の娘よ!

(直譯)

ハーン氏によれば彼等は愛らしき性質を有し毫も忌むべき所あることなしとぞ。

却説彼等の宗教は如何のものにやあらむ。

抑も之を現時の希臘羅馬の研究者に見るに、彼等の多くはホーマーの諸神及其神話英雄の眞の性質を知るに困しみ、而して名稱語句の眞意義に關しては殆んど何等の確説をも與ふるに耐えざるにあらずや。見るべし言語の研究が如何に神話學上に必要なるかを、況んや野蠻人の宗教神話に關してをや。之を研究せんとする者に取りては、蓋し其言語の知識は絶對的に必要なりとす。從來の報告者の多く信憑すべからざる所以のものは、重に此知識の缺乏にありて存するなり。

Taylor氏は多數の傳導師及旅行家等が齎らし來れる言語、宗教、傳説に關する報告の大抵誣妄なるを指摘し、多く其證例を集めたり。其中に次の如きがあり、同一の人

種に就て、或牧師は曰く、彼等は一つ若しくは多くの神を崇拜すと、而して他の牧師は曰く、彼等は神てふものに付ては何等の觀念も、はた名稱をも有せずと、而して最も笑ふべきは同一人にして前後矛盾の言をなせることなり。例せば Sparrman氏は、其著書の或處にては、ホツテントットは果して至高神の信仰を有するや疑はし、何となれば彼等は自ら我等は痴鈍にして何事も知れる者にあらず、最上神の事の如きは嘗て耳にしたる事なしと云へるに徴して明なりと述べ、而かも他の處にては、コイコイ人も一つの最高實在の信仰を有すと認めざるべからず、彼等は、之を以て強悍なる惡魔の如きものにして風雨雷霆の因て來る所なりとせりと記す。また Lichtenstein氏は Khosa Kahr人は何等宗教の痕跡を有せずと主張しながら、彼等は世界創造者たる最上實在を信ずとの説を認容せるなり。氏の曰く、但し Van der Kamp(一八一死)の言を信すべしとせば、彼等は唯此實在の名稱を有せざるのみと、氏は最下等人種だも無名の實在の觀念を有せりとするなるか、噴飯すべし。ハーン氏は土民の間に生長したる人にして、彼等の言語に精通せるが故に、氏の記述は十分の安心を以て讀むを得べし。

而して氏の書の興ふる効果如何、曰く、頗る吾人の主張に應援を興ふるものに似

たり、過ぐる二十年間其眞否の争はれたる學理上の原則が大に確められし所あるに似たり。

夫れ、太陽説に反對する論難は埃及、バビロン、ポリネシヤ、アメリカ、及アフリカ等より集められたる材料によりて全く粉粹され了はんぬ。又何ぞ茲に精論するの要あらむ、さはれ所謂神話の不合理的分子は古語の誤解に由來すとの學説が、新たに此書によりて確められたるの一事は注意すべしとなす。

* * * * *

コイコイ人は其最上神を *Tsuik-goad* と名く、(二は中央の急聲を表はす) *Tsuik-goad* とは是を改造したるなり。此名は、從來の報告にては、報告する人々によりて種々なり。 *Tigua, Thnikwe, Tuigua, Tigor, Tangua, Tsuikwap, Tshukwab, Tsugam* などあり。何れも *Tsuik-goad* を不完全に發音したるものなり。

最初彼地に渡りたる傳導師等はコイコイ人は何等の宗教をも有せずと思惟したりしが、十八世紀の始めに及んで、*Peter Kolb* 氏あり。和蘭の彼地滞在の官人の *Die* 氏の言を引きて曰く、彼等は如何なる宗教を有せるか、明には知られず、唯彼等は夜の明くる時早朝相集まりて、互に手を取り踊をなし天に向つて叫ぶを例とす。之に

よりて推すれば、彼等は神に付ての或觀念を有せるが如しと、又 *Father Faehard* 氏

を引いて曰く、彼等は世界の創造とか又は三位説などの事は毫も知ることなきも或一つの神に祈禱し居ることは明なりと、而して *Kolb* 氏と同時代なる *Boving*

氏も、彼等、少くとも、彼等の中の賢明なる輩は、天地創作の神ありて雨及雷を送り、人間に衣食を給すと信ぜりと云へり、而して *Kolb* 氏自家の經驗によれば、*Hottent* トート人は凡て、一つの神を信ぜることは疑なし、彼等は之を知り之を公言し神は天地を創造し之を支配し、萬物に生命を與ふるものなりとす。而して尙此神は彼等の云ふ能はざる性質を有せるが如しとぞ。

Tsuigwab てふ名を最初に記したる人は *Schmidt* 氏なるが、氏によれば、*Plades* 金星 *Plades* 金牛宮の背邊の星群の歸り來る時は土民は祭を行ふ。此星東方の地平線上に現はるゝや否や、母は子を腕に載せて高處に走り行きて、彼の星を指し、其方へ小兒の手を延さしむ。かくて一村の民は古來の習慣に従ひて、相集りて踊り歌ふ、其合唱に曰く

「オ、*Tigua* よ、我等の頭上の我等の父よ、我等に雨を與へよ、*Nientjes* (果樹の名) の實熟して食物澤ならん爲めに、善き年を我等に贈り玉へ」

チクアはツイゴアの轉訛なり。Schlemen 氏譯の Namagna 語の聖書には此語を神の義に用ゐたり。但し現時の士民の耶教信者間にては此語の代りに Elohim と呼ぶべく教えらる。こは Elohim の訛なり。

ハーン氏も數個の讚美歌を載す。吾人は之等を読んで宛然、韋陀讚誦中に入るの思あり。而して蠻人の簡素朴訥なる賛歌も必竟するにアールヤ人の夫れと大差なきを感ずるなり。今其一を譯出す。曰く

汝、オ、ツイゴアよ、

汝、諸の父の父よ、

汝は(我等の)父なり。

雷雲を流さしめ玉へ、

我等の家畜を生かさしめ玉へ、願くは――

我等をも亦活かさしめ玉へ、

我は實にいたく弱り果てぬ、

飢の爲めに、

渴の爲めに。

オ、願くは、我は野の果實を食ひ得んことを、

汝は我等の父にあらずや、

諸の父の父よ、

汝、ツイゴアよ、

オ、願くは汝を讀し得んことを、

我等は汝に報ひ得んことを、

汝、諸の父の父よ、

汝、オ、ツイゴアよ、

次に吾人は此ホツテントットのツエウス若しくはインドラとも云ふべき者の性格を観察せんとす。請ふ暫らく、ハーン氏が老ひたるナマクア人となしし會話を聞け、

突然として雷雲の地平線上に現はれ出でし時、かの老人は、豫め必ず數時間内に降雨のあるべきを算定して曰ふ、ア、其處にこそツイゴアは我等の祖父の時代と同じ昔しの姿にて來るらめ。今日はやがて雨降らむ、而して地面は Fushib にて蔽はれむと。余は其ツシブとは何の義を尋ねしに、答へて曰く、雨後始めて緑の草

の見え、又は早朝、光れる緑色が地上に廣がれるを見る時は、我等は、ツシブが地を蔽ふと稱するなりと。

こは、サムエル後書二十三章四節の、日の出の朝の光の如く雲なき朝の如く又雨の後の日の光明カウヤによりて地に苗モいづる若草の如しを想起せしむ。

右はツイゴアブの自然的及詩歌的方面なるが、此信仰は又實踐的方面の上にも感化を興へ居るを見るなり。ハーン氏記して曰く、嘗て旅して路に迷ひ、水乏し、速に水を得べき所に至るにあらずは、又明日を見ること能はざらんとす。此時余は案内者 (Hagob) 族の一人なりきを叱して曰く、汝は何をなしたるぞや。明日は我等は *Takala* や蒼鷹の餌食とならんずらん。ア、誰かあつて、此困難より我等を救ひ出さむと老人は冷然として云ふ。ツイゴアブ我等を助け玉はむと。かくて朝の九時頃、水ある所に達するを得、水を飲み、烟を喫し、具さに前日の難を語りけるに、彼が曰く、昨日は我れ、旦那に殺されんとせしに、主は幸に之を妨げ玉へり。旦那は今、主の我等を救ひ玉ひたるを御合點なされしやと。

以上述ぶる所によれば、ツイゴアブは多くの點に於て開化人の思想及言表と類似せるものなるを看取し得ん。即ち超自然力の最初の指示は、大なる天文現象特に

太陽の力及そが人間及自然の生活上に與ふる所の恩澤に於て見出され、而して其超自然力を呼ぶに此自然現象の名を以てせることなり。さればツイゴアブとは元來、天空若しくは昇る太陽、若しくは注ぐ雨、若しくは雷の名なることは、之れ最も自然的にして毫も怪しむに足るなし。凡て此類の名は所謂太陽神若しくは天、上神ヘレニヤタル、ハイイに於て共通燒點を有す。ジュビター、メルクリウス、インドラ、*Indra* の如き何れも皆然らざるなし。此點に於ては吾人は些の解し難きものあるを覺えず。

されど吾人は今や、此等話譚中の所謂不合理的分子を観察せんとす。

空、太陽、雨、雷の神―最上實在とせられ居る所の此ツイゴアブは又他方に於ては、甚奇怪なる話譚の主人公たり。話譚は曰ふ、彼れもと膝に傷もてる藪醫者なりきと、*Appleyard* 氏によれば、ホツテントットの *Israel-Konh* をカンファー人は *H-Tisko* と呼ぶもと、數代以前のホツテントット或はナマクア人中の一つの有名なる醫師兼妖術者の膝に傷受けたるもの、名なり、彼れは其存命中非常に強力なりしかば、死後にも尙、彼等は彼れに保護を祈れりしが、終には殆んど神となれりと。又博士 *Mohat* 氏によれば、氏嘗て大ナマクア地方に旅行し一つの老醫兼妖術家に遇ひ、其語るを聞くに、曰く、ツイゴアブは大力の兵士なり、嘗て他の酋長と戦ひ、膝に負傷す。されど

後敵に打勝ち、其名は消失せぬ。そは誰もツイゴアブ(傷ある膝)を敗る能はざればなりと。余は、彼等がさしにも、創造者、恩人として崇むる者の、かゝる、惱める者若しくは痛き膝などの如き名を有せることの甚不似合なるを咎めしに、答へて曰ふ。此名は悪魔若しくは死を呼ぶに用ゆる名なり。余は實に、死は真に痛きものと思ふなりと。

又ハーン氏が *Hapobemana* といふ老人より聞きたる所によれば、ツイゴアブはコイコイの有力なる酋長にして實に凡てのコイコイ族の祖先と仰ぐ所なり。されどツイゴアブとは本來の名にはあらず。彼れの部下の多くが嘗て、他の酋長 (*Ganna*) といふ者に殺されしかば、彼れは是と争ひしに、ツイゴアブは幾度も敵に負かされき。然るに戦毎に彼は強くなり來りつ、遂に敵の耳の後部をしたゝかに撃ちて之を亡ぼしぬ。ガンナブの將に死せんとするやツイゴアブの膝をねらひて一大打撃を加へしかば、彼は爲めに大なる傷を負ひぬ。是よりして彼はツイゴアブ即ち「痛き膝」若しくは、傷もてる膝の名を得たるなり。彼は跛なりし故正直は歩み得ざりき。彼れは他人のなし能はざる多くの奇しき事をなせり。彼は甚だ賢なうければなり。彼れは來事を豫言したりき。彼は幾度も死し又蘇りき。而して彼れが我等に再來するや大馳走と大歡喜と起りき。各村より乳は持ち來され、牛と羊は屠られき。彼れは人々に多

くの家畜と羊を施しき。彼は富有にてありければなり。彼れは又雨を與へ雲を作り、又我等の牡牛と羊に乳多からしむ。彼は美しき天に住し、ガンナブは黒き天に住す。兩者の天は全く異なれりと。

上に挙げたるものは是即ち所謂不合理の分子なり。吾人は自然現象を比喩的若しくは詩歌的に言表はしたるを見るも決して怪むことなし。又道德、哲學若しくは宗教上の觀念を多少誇大的に敷衍したる話を聞くも毫も驚くことあらず。されど神話として神話たらしむる所以の者は實に其不合理の分子、即ち其不可解、背理、奇怪、荒唐なる邊に於て存するなり。ツイゴアブの譚を聞くに、或範圍までは吾人はうなづくを得、されど彼は、もと、膝に傷もてる醫者なりきと聞くに及んでは遂に驚訝を禁ずる能はざるなり。

茲にかゝる不合理の分子を説明するに、てき得べき二個の學說あり。其一つは、之を以て實際ありし事實となす例へば *Daphne* が *Phoibos* に逐はれ桂の木と化せしめられたりとの譚を、此派の人は説明して曰く、恐らくは、*Aurora* と名くる貴女が *Robin* てふ若者に追はれ、よと、其處にありたる桂の木の後ろに隠れたることありしを云へるならんと。此説は *Euhemerus* 氏の發明に係り、近時 *Abbe Banier* 氏

の再唱せし所、今日にても尙全く化石とはなり了せず、多少の勢力あり、他の學派の説には、曰く、神話の不合理的分子は言語が思想に與ふる感化上免るべからざる所にして、全く之に由來せるなり、故に諸神や諸英雄の譚は、其等の名稱の本來の意義だに明かなるに至らば、容易に理解され得べけん、試に前に擧げたる譚を例として云はゞ、此譚の如きは、ダフチは後に桂樹の名となりしも、元來は曙の名なりしこと、フオイホスは太陽の名の多かる中の一なりし事、而して太陽は其光を以て曙をばその消失する迄逐ひ行くものなると、とを擧げて説明せんとするなり、前の學説が専ら頼む所は野蠻人等の神話にして、其神若しくは英雄は何れも元は人間にして、死後、神として拜せられたる者なるの事實を指摘せんと勉む、後の學説の主として依る所は希臘、羅馬、印度等の神話上の名稱にして、其等の字義を詮議し解剖せんと勉む。

今ツイゴアの譚に就て之を検するに、パニエー説は頗る有力なるに似たり、何となれば、ツイゴアはもと人間にして、傷ある足を有てりしが、其醫術の巧なると勇強なりしとによりて、死後、神位に列せられたるなればなり、天下豈之に増したる明白なる説明あらんや、但しかくは自然現象が人格化、若しくは神格化されたる

にはあらず、古代の神は、全く之と同一名を有する人間の祖先に過ぎざる事となるなり。

茲にツイゴアの痛き膝の解釋に移るに先ち、今一つの他の學説を擧げんとす、こはパニエー氏のと結局は同一に歸すべきものなれど、其論據全く反對なるものなり、Spencer 氏の説是なり、氏の曰く、社會學の原理、三九〇頁、神話學者は云ふ、最初には非人格的に寫象され崇拜されたる自然力も、其名に存する或特別の性質の爲めに遂に人格化さるゝに至る、而して、此等自然力と同一とせられたる人物に關して種々の物語が後に起り來るなりと――

氏が所謂神話學者とは何處の誰を指せるにや、今の英、佛、獨、以等の神話學者は之れと全然反對の意見を抱けるなり、彼等によれば、非人格的力の觀念は人格的の夫れよりも後代に生ずるものにして、思想及言語の初期にありてはかゝる區別は毫もあることなし、非人格的力崇拜の如きは最も後代に屬すと、但し今は氏の言の不精密を答ひるの適なし、謹んで氏の述べ行く所を聞かん、氏の曰く、

之に反して、吾人の見によれば、實際の人物こそ最初の要素なれ、而して其名の同一なる爲め、或自然力若しくは自然物と同一とせらるゝよりして、茲に自然力崇拜

が第二に起り来るなりと。

今、吾人をして一例を舉げて此兩説を説明せしめよ、神話學者は云ふ、吾人の最古の祖先等が「太陽は死す」とか「太陽は夜に殺されたり」などの類の言句を發することあるは思想及言語發達の法則上避くべからざる所也。かゝる言ひ様の結果として、輝ける神聖物若しくは半神聖物、若しくは人間が黒き敵に殺されると云ふ譚生じ來ると。而してスベンサー氏は曰ふ、決して然らず、恐らくは「太陽と呼ばれたる實際の人間ありしならむ見よ、今も尙 *Sun, Sonne, Soleil* (太陽の英、佛、獨語)と名くる人間あるにあらずや、かゝる名の死することあらむ、或は、黒若しくは、夜てふ名の死することあらむ、かくて其死したる後には、其太陽君は祖先とせられ、若しくは祖先として拜せられ、若しくは神となるべし、然るに其名が太陽と同一なる爲め、崇拜及物語が其太陽君より、非人格的の太陽に引き移され、之に結び付けらるべしと、今氏自身の文を引きて證となす、(同上、三九〇頁)

「冬毎に、美なる日光は黒き嵐に逐はれ、或は雲の後ろに、或は山の下に隠る。若し出づれば疾足と轟聲とを以て逐はるゝが故に直ちに退却するの已むべからざるに至る、然るに幾月間を経れば、嵐は漸く溫和となり、遂に烈しさも減じ、日光は前より

も明かに見らるゝこととなる、かくて日光は勇氣を回復し、其出現し居る時間を長くす、嵐は追逐の目的を果す能はず、却りて彼女日光の美を見て心和らぎ進行愈々穏緩となる、かくて終には兩者の融合行はれ、地は濕と温を得て喜び、二人の者より植物生れ地面を蔽ひ、美花爛漫たるに至る、されど秋來る毎に、又嵐は暴ばれ追ひ廻り始め、日光は逐はれ逃げ廻はり始む。

太陽を女とし嵐を男とし、其合一を談するが如きは稍不自然にしてアールヤ族の神話らしくは思はれず、されど今は、かゝる事に付て論ずるの邊なし、尙謹んで氏の思索を拜聴せん哉、氏の曰く、

試に *Tasmanians* 人がかゝる神話を有すとせよ、上述の解釋法に従へば、之れ日光と嵐とを経験したる結果を比喩的に言表はしたるものにして、人心内に存する神話的傾向は、語の性より暗示を得て、日光及嵐をば嘗て地上に住したる人間なりとするに至ると。

神話學者の解釋は略、氏の云ふ所の如きものならむ、但し彼等は此等の言語を比喩的——それが何か有意的人爲的の或者を意味するとせば——とはいはず、只自然的にして且不可避的とするのみ、且つ語の性の相違が神話思想を生ずとは云はず、